

万国の労働者、被抑圧民族は団結せよ！

# ボルシェヴィズム通信 第7号

1972.8.20

今秋期の闘争方針

8・25集会への呼びかけ

革マル派のベトナム反戦闘争論批判

南北朝鮮共同声明について

尖閣列島問題について

狭山差別裁判について

連合赤軍肅清事件について

三里塚現闘団報告

レーニン研究会政治機関誌

# ボルシェヴィズム通信 第7号

1972.8.20

- ボルシェヴィズムの旗をかかげ「幼年期」の左翼反対派的政治を一掃して真の革命党を組織しよう！
- 大衆路線を活動の基礎とし、軍事路線を堅持し、両路線を支える鉄の団結をかちとろう！
- 社会主義と労働運動を結合して、資本主義的奴隷制度を廃絶しよう！

レーニン研究会政治機関誌

佐藤茂樹 著・発行

佐藤政府を倒せ！

武装闘争と大衆路線を結合、発展させよ！

1971.9 発行 定価 150

帝国主義を攻囲せよ！

— 獄中論文選 —

1972.3 発行 定価 440

<武装蜂起の党>宣言

近日発行予定 価未定

八木健彦 著・発行

プロレタリア革命党建設と我々の緊急の任務

— 総括・綱領・戦術・組織の問題によせて —

上巻 発売中 定価 750

下巻 近日発行予定

# I 今秋期の闘争方針

ベトナム人民の大攻勢に応え、米帝追撃。日帝打倒をめざして、ベトナム反戦。沖縄・三里塚・狭山諸闘争を闘いぬき、団結。勝利の秋とせよ！

一、五月・七月派兵阻止熊本現地闘争で我々は何をかちとったか？

五月六、七日の闘いの意義は次の三点である。

第一は、言葉の正確な意味での本土における派兵阻止闘争の突破口を切り開き、以後の沖縄闘争の牽引力をなしていること。五・一五沖縄施政権返還を直前にした階級攻防のダイナミズムが革命的左翼に新たな飛躍の課題をつきつける中であって、なだれをうづ諸党派の右旋回と腐敗・墮落を批判しつつ、沖縄人民と真に連帯し、日本帝国主義に打撃を与え得たのは我々の闘いが唯一ともいえる。

第二は、この闘いにおいて、全国からボルシェヴィキ派の労働者青年の総結集をかちとり、その思想的・組織的結束を更に強固に打ち固め、真の革命派の力強い胎動と前進を全人民に知らしめたこと。

第三には、昨年来、三里塚・沖縄闘争を中心にわが会が行ってきた政治主張——実践の一貫性と正しさを明らかにし、革命的左翼の諸論争と実践上の混乱を一段と止揚する方向に押し上げたことである。

そして、七・一五現地闘争は、以上の闘いの成果をより大衆的な規模で踏み固め、本格化した自衛隊派兵を阻止すべき本土人民の任務を鮮明にうちだすと共に、社会党、「共産党」、革マル、更には、中核派等の派兵阻止闘争からの逃亡——日和見主義を暴露し、日米帝国主義打倒をめざす沖縄闘争の真の永続化をかちとりうる部分があったいどこに存するかを明らかにしたのである。派兵阻止闘争における本土人民の任務はますます重大になりつつある！

日本帝国主義は、インドシナ戦争の新たな段階への前進、朝鮮人民民主主義共和国の朝鮮南北統一への外交攻勢、等々、激動するアジア階級状況を前にして、一方で「日中平和共存」等の「笑顔」をふりまきつつも、いよいよますます黒いアジア侵略、反革命の野望を秘めて、米帝との反革命同盟を更に強化しつつ、沖縄の侵略・反革命前線基地化に死活の運命を託さんとしている。社共をも動員した「豊かな島づくり」の欺瞞のヴェールの下で、沖縄人民をより一層の奈落の底に叩き込み、闘う者に対しては機動隊・自衛隊による強権的支配をうちたてんとする日本帝国主義者の卑劣な策動！この欺瞞と策動を本土人民は総力を上げて打ち砕き、沖縄人民と真の団結を

かちとらねばならない。派兵阻止の闘いこそ、その最も重要な闘いの一つなのだ。

秋の派兵阻止闘争の全人民的昂揚を組織する為に、我々は、二度の現地闘争の成果をしつかりと体内に消化し、われわれの組織的力量の高度化を基礎に、全国の職場、学園、地域での派兵阻止闘争を、他の諸課題と固く結合しつつ、更に精神的に展開しなければならぬ。

二、沖縄闘争終焉論をのりこえ、沖縄闘争の更なる永続的発展をかちとろう！

1 「復帰」後の沖縄状況——「復帰」の正体とは何であつたか？

五月十五日、返還式典の迎々しい茶番にカモフラージュされながらの本土「復帰」は、如何なる意味においても、沖縄人民の戦後二十数年に及んだ、米軍政の差別と抑圧の専制支配の軛からの解放を意味せず、直接支配者——日本帝国主義の下での沖縄のもつ矛盾の一層の深化・拡大と、沖縄人民、そして日本人民すべてへの帝國主義者のよりどう猛な攻撃の開始を意味している。

今、沖縄人民の頭上には、「救い主」たるはずの本土政府による情容赦のない仕打ち、政治・経済・社会・軍事すべての面での帝國主義の攻撃が吹き荒れている。

④ 一ドル三〇五円なる「通貨交換」によって更に拍車をかけられた「ドル・ショック」以来の物価騰貴。

「卸売商の命令で一週間のうちに二回も値上げし、一気に六割高になったパン、沖繩の食卓には欠かせない豆腐は二月に二五%、こんど二割上がって、四ヶ月間で五割高です。このまま放っておいたらどうなるのか。円ドル交換は三百五円に値切られ、どうして生活してよいかわからなくなる」(沖繩婦連官里悦会長「十四年前の重票からドルに交換した時も損をした。かわいそうな島です」(「毎日」)という婦人達の声は「復讐貧乏」といわれる返還後の沖繩の現実を生々しく伝えているだろう。

本土政府は、これに対し何らかの実質的な対策を組まなかったばかりか、沖繩労働人口の約三分の一を占める公務員、大企業労働者にだけは三六〇円で交換するという差別・分断支配の手段に利用せんとしたので、本土独占資本の沖繩進出は、地元企業の相次ぐ倒産、転業や「合理化」解雇、賃金切下げ―購買力の低下―「合理化」というはてしのない悪循環を生みだしている。「沖繩プライウッド」(ベニヤ板業)倒産、「琉球化学工業」閉鎖、百貨店「なみさと」閉店、塩二九社、タバコ三社の強制転業、等々。

同時にこの過程で日本帝国主義者は、労働組合の本土系列化による沖繩労働運動の右翼的再編成をもなさんとしているのである。そして、「零細企業の労働者は、この深い谷間でうめいている」(「エコノミスト」)と伝える如く、大

多数の組織を持たない労働者の頭上にこの資本の鉄鎖は最も荒々しく襲いかかり、再就職の見込みのない労働者に海外移住や、差別下での本土就職を余儀なくさせている。

⑥ 沖繩人民が戦後アメリカ帝国主義の占領、米軍支配配との血のにじむ闘いの中で獲得してきた「民主的諸権利」はく奪の一環として、教育委員任命制への移行が強行されんとしている。この教育機構と教育内容の帝国主義的再編は、明らかに、戦前の皇民化教育にも似て、新たな国家主義、民族主義教育の始まりを意味している。六八年教公二法阻止闘争等、沖繩人民が文字通り実力で守りぬいてきたこうした権利を、日本帝国主義者はただ「復讐」という名と引き替えに奪い去らんとしているのだ。

⑦ そして、これら反動的諸政策の中心環をなすものが、日本軍・自衛隊の沖繩派兵と、あの悪辣な土地強奪法の施行である。

われわれは、闘いの不十分性ゆえに、すでに数百名の自衛隊員の派兵を許してしまつたが、この自衛隊の沖繩派兵こそ、米軍基地機能の強化とあいまって、沖繩の帝国主義の牙城としての役割、侵略・反革命前線基地としての機能を極限まで推し進めんとするものである。

自衛隊こそ、かつて幾方というアジア人民の命を奪い、沖繩人民の三分の一を弾よけ、虐殺等で死に追

いやつた旧日本軍の後継者であり、今また沖繩人民の闘いを軍靴で踏みつぶし、日本人、アジア人民を血の海に引きつりとせんとする日本帝国主義のどす黒い野望の直接の担い手なのだ。

まさに、「復讐」後の沖繩のこうした現実こそが、七年沖繩返還をめぐる日米帝国主義の策動、即ち、安保日米同盟のより侵略的反革命的なそれへの再編・強化の内容に他ならないのである。

2 沖繩人民の闘いの新たな前進

こうした中で沖繩人民の闘いは、社共、革マル派の沖繩闘争終焉論―帝国主義への屈服や、諸党派の沖繩をめぐる政治路線の破綻にも拘らず、課題は更に多様化し、より広範な諸階級諸階層人民をまきこみつつ進行している。

大量首切りに抗し、非和解的闘いを継続する全軍労働者、防衛庁官僚どもの必死の切り崩し策動にもかかわらず「激しい抵抗の姿勢」(「毎日」)をかためる「反戦地主の会」、伊波場エテル労組を先頭とする中小未組織労働者の火の出るような闘い、米軍ベトナム侵略に抗議して闘う港湾荷役労働者、屋良等の裏切りにもかかわらず本土教育秩序への組み込みに抗して闘う教職員組合や官公労働者の同様の闘い、そして、反自衛隊闘争や、物価騰貴と政府の無策に憤激する諸々の闘い、等々。

一向に減らぬ米兵犯罪、B52の大量飛来、基地機能の合理化のための大量首切り等、返還後も何ら変わらぬ米

軍の重圧に抗する沖繩人民の闘いは決して弱まることなく、「新たな」敵日本帝国主義が照準に入りつつある。復讐協の方向喪失、内部風化は、日本帝国主義の沖繩の上からの国民統合の野望に対する思想的屈服であると同時に、他方の極での沖繩人民の新たな闘いの始まりを意味している。「民主的諸権利」をめぐる攻防と、自衛隊との会議は、必ずや、米帝と結託しつつアジア侵略・反革命の歩を進めつつある日本帝国主義の真の姿を暴露し、日米安保体制の最大の軍事的要衝沖繩での全人民的叛乱を準備するであろう。今、闘うエネルギーは深く蓄積されつつある！

3 沖繩闘争の継続的發展に向けて

当面の沖繩闘争をめぐる本土人民の任務は何か？

それは沖繩人民の反自衛隊闘争と連帯して、日本帝国主義による沖繩の侵略・反革命前線基地化の策動、日本帝国主義軍隊完成化の策動と真に非和解的に闘いを組織すること、沖繩人民の米軍基地撤去闘争と連帯して本土米軍基地に対する攻撃を強化すること、本土政府による沖繩人民の既得諸権利剝奪の攻撃に対し、その権利を防御、拡大するべく闘うこと、本土での沖繩人民に対する就職差別や諸々の差別、偏見と闘うこと、等々、総じて、米帝に対する攻撃を更に強化し、日本帝国主義による沖繩の上からの国民統合の野望を暴露し、粉碎することである。その一つ一つの闘いを真に全力をあげてやりぬき、

自己の階級的責務にこたえる中で沖繩人民との団結をうち固めねばならない。

日帝ブルジョアジイは、沖繩返還をもって沖繩闘争は「終わ」たなどと人民の眼を欺かんとしているが、われわれは、社共、革マルのそれへの屈服と排外主義への転落、中核派「奪還」論破産の人民的大衆的確認、返還粉砕派潮流の政治路線の喪失等をのりこえ、沖繩を日米安保同盟粉砕、日本帝国主義打倒の一大拠点とすべく、沖繩闘争の更なる永続的發展をかちとらねばならない。

三、米帝追撃。日帝打倒に向け、ベトナム反

戦。沖繩。三里塚。狭山諸闘争を闘い抜

き。団結。勝利の秋へ！

三月末開始されたベトナム人民の勝利への攻勢と、ニクソン—米帝の必死の悪あがきは、インドシナの政治。軍事の緊張を極限まで押し上げると同時に、アジア全域の諸国家を更に深く革命と反革命の対立へと引き裂き、国際的階級関係に新たな流動化を生ぜしめた。

打ち続く米軍の無差別爆撃、皆殺し作戦にもめげず、西、北部、メコンデルタの戦線を強化し、サイゴン政権を倒壊の危機に追いやるベトナム人民。インドシナ、中国、朝鮮人民の反帝統一戦線の前進を背景に、朴と米日帝國主義に打撃を与える朝鮮民主主義人民共和國政府の外交攻勢。そして、全世界的な民族解放闘争の前進と、

衛隊官僚のサイゴン訪問等日本帝国主義のベトナム侵略戦争加担。協力が急速に強化されつつある今日、日本人民のこの責任はますます重くなりつつある。

沖繩闘争については既に述べたが、日米安保同盟粉砕、日帝打倒に向け戦略課題をこの闘いの意義をはつきりと確認し、ベトナム反戦闘争と緊密に結合して十一月第三派派兵阻止の闘いを中心として組織しなければなら

ない。そして、昨年九月の第二次強制収用阻止の闘い、とりわけ、機動隊殲滅に対する弾圧が荒れ狂っている中においても、われわれは、それをばねかえしつつ、全力を上げて岩山大鉄塔防衛、開港阻止の闘いにも起ちねばならない。

また、九月結審、死刑判決の策動を前にした狭山差別裁判徹底糾弾、石川青年即時奪還の闘いも秋の重要な課題の一つである。

より一層議会主義へと純化し、イタリヤ、フランス共産党なみの大衆的国民党への変貌をはからんとする代々木共産党（「新日和見主義」なる分派の発生はこのことを裏付けている）。中核、第四インターブロックの破産。返還粉砕派—沖共闘の政治的影響力の急激な低下。既成左翼の日和見主義的墮落と革命派の混乱との間隙をぬって存在する革マル派、われわれは、この秋こそは、こうした日本の左翼戦線の混乱と分散状況を真に止揚しうる革命派の本格的な胎動の開始の時とせねばならない。

ベトナム反戦闘争を一契機とする帝國主義心臓部の労働者階級解放闘争の前進。こうした国際階級闘争の複合的發展を前に、ベトナムでは、七項目提案には何ら答えることなく、死にもめぐるいの無差別大量爆撃と、反政府運動への徹底した暴力的弾圧を展開しつつ、「後方」の打ち固め—日米反革命同盟の再編。強化に精力を注ぐ米帝國主義の策動、そして日本帝國主義の協力と侵略の野望。更に、ベトナム革命戦争をめぐる、ポドゴルスイ。ハノイ訪問によって、自らの反動性を露わにしつつあるソ連社会帝國主義。

以上の、現在における国際状況の基本的特徴を踏まえ、我々は次の秋の闘いの任務につかねばならない。

まず、我々は、代々木「共産党」の日本帝國主義との城内平和と反動的自主独立に基づく「ベトナム人民支援闘争」や、革マル派の「帝とスターの代理戦争」をやめさせベトナム人民に武装解除を要求する「民族和解政府方式に抗」する「国際反戦闘争」とは明確に異なり、帝國主義心臓部労働者人民のプロレタリア国際主義の旗幟を鮮明にした真のベトナム反戦闘争を組織しなければなら

ない。それはあくまでも、世界革命の波が帝國主義本國へ収束せんとする国際階級闘争の現段階を踏まえ、反動的な日米同盟の再編強化を粉砕し、米帝追撃。日帝打倒をもってベトナム人民の闘いと結合するという方向に推し進められねばならない。沖繩からの空母やB52のベトナム出撃、岩国、横田等からの武器・兵員の輸送や自

こうした自己の階級的責務の表現に向けて秋の闘いを更に精力的に展開しよう！

### 今秋期の大衆闘争の基本スローガン

□ ベトナム人民の大攻勢に応え、米帝追撃

。日帝打倒をめざして、ベトナム反戦、沖繩。三里塚。狭山諸闘争を闘いぬき

。団結。勝利の秋とせよ！

一、アメリカ帝國主義のベトナムにおける強

盜的行為糾弾！ 全世界人民と連帯し、ベ

トナム反戦闘争の巨波で「七項目要求」を

貫徹しよう！

。南ベトナム共和臨時革命政府の「七項

目提案」断固支持！

。アメリカ帝國主義による無差別 大量

爆撃。全面海上封鎖等の「皆殺し作戦」

糾弾！ チュー政権打倒！

。田中政府の侵略戦争加担。協力阻止！

米タン輸送。B52等のベトナム直接出撃

- 阻止ノ
- 代々木「共産党」の日帝讚美・欺瞞的「ベトナム人民支援」、革マル派の反動的「民族和解政府反対」の「国際反戦闘争」等をのりこえ、闘いぬこうノ
- 一、沖繩人民と団結し、自衛隊沖繩派兵阻止ノ
- 侵略と戦争の日米安保条約粉砕ノ
- 沖繩、本土の米軍、自衛隊基地撤去ノ
- 核・毒ガス兵器、V A O、特殊部隊撤去ノ
- 米軍基地・施設の自衛隊移管反対ノ
- 軍用地再契約反対ノ
- 四次防粉砕ノ 自衛隊の核武装、海外派兵、徴兵制、治安出動策動粉砕ノ
- 反戦自衛官と連帯し、自衛隊解体にむけて、攻撃的叛軍闘争を闘おうノ
- 一、沖繩人民の生活、自由と諸権利を新たに破壊する「復帰合理化」粉砕ノ
- 教育委員任命制反対ノ
- 復讐言切り、合理化反対ノ 全軍労働争勝利ノ
- 本土系列化による沖繩労働運動の右翼的再編阻止ノ
- 通貨切り替えに伴う物価値上げ、税金引上げ反対ノ
- 公害、独占企業の新進出反対ノ
- 本土における沖繩出身者に対する差別抑圧反対ノ
- 一、日本帝国主義による釣魚台略奪阻止ノ
- 社共の屈服糾弾ノ
- 一、三里塚農民の闘いから学び、岩山鉄塔を死守し、来年三月開港策動を粉砕しようノ
- 三里塚第一期工事完成阻止ノ 「新東京国際空港」建設阻止ノ
- 青年行動隊への不当逮捕を許すなノ
- 社共の反対運動切り崩しを許さず、九一六闘争の意義を防衛し、三里塚へ結集しようノ
- 全共闘運動の成果を踏み固め、革命的學生運動の新たな戦列をノ

一、狭山差別裁判徹底糾弾、石川青年即時奪還の叫びで東京高裁をゆるがそうノ

差別裁判取り消し、無実の石川君即時釈放の要求を井波にたたきつけようノ

9月結審策動を打ち破き、井波に判決を出させるなノ 公正裁判を要求するノ

一、出入国法案、外国人学校法案粉砕ノ

南北朝鮮共同声明支持ノ 日「韓」条約粉砕ノ 在日朝鮮人の戦闘的団結支持ノ

入管体制粉砕ノ

大阪市の民族差別行政糾弾ノ 徐さん職場を返せノ

一、労働運動の右翼的再編成阻止ノ 戦闘的階級的労働運動を創り出そうノ

一、刑法改「正」、保安処分新設粉砕ノ

一、新全総・総合農政路線粉砕ノ

一、国公立大学学費値上げ実力阻止ノ

中教審路線粉砕ノ 産・軍・学協同粉砕ノ

日帝「反革命」糾弾粉砕ノ

日帝「反革命」糾弾粉砕ノ

中韓人民の反帝闘争を支持

朝鮮人民の反帝闘争を支持

**II 8・25実行委の呼びかけによる**  
 〈 8・25ベトナム八月蜂起27周年記念 〉  
 インドシナ革命戦争支援集会  
 への闘う労働者・学生の参加を  
 訴える



8・25ベトナム八月蜂起二七周年記念・インドシナ革命戦争支援集会  
 日時 8月25日 午後5時30分〜9時  
 場所 千駄ヶ谷区民会館  
 主催 8・25実行委 \*03(813) 6111  
 内 728

ベトナム人民連帯全国労学総決起集会

日時 8月25日 午後1時〜3時

場所 未定

主催 ベトナム人民連帯・全国労学総

決起集会実行委

□ベトナム人民の勝利への大攻勢万才！

南ベトナム共和臨時革命政府の七項目提案

断固支持！

□アメリカ帝国主義のベトナムにおける強盗

行為・皆殺し作戦糾弾！

アメリカ帝国主義・傀儡チュウ政権打倒！

□日本帝国主義・田中政府の侵略加担・協力阻止！

日本のベトナム出撃基地化阻止！

安保粉碎・米軍基地撤去・自衛隊沖繩派兵阻止！

□代々木・革マルの欺瞞的「インドシナ人民

支援」「国際反戦闘争」と対決し、米帝追

撃・日帝打倒をめざして、巨大なベトナム

反戦闘争を闘いぬこう！

□ベトナム戦争——世界史を創造する

人民、反動の帝国主義

闘う労働者、農民、学生、市民諸君！

今、われわれの眼前で何が繰りひろげられているか！

それは、ベトナム・インドシナ人民の世界史を創造する輝かしい雄姿であり、いかなるものもおしとどめることのできぬ民族解放と社会主義のための革命戦争である。

それは、又、危機を深化させ、没落の運命にあるアメリカ帝国主義、その傀儡 チュー政権の、又、それに協力する日本帝国主義の不正の限りをつくした醜態な姿で

あり、自己の特権的利益の確保、植民地主義的野望のための侵略的、反革命的な強盗戦争である。

本年三月三十日、遂に、解放勢力は、十九世紀中葉からの帝国主義の植民地支配の歴史に終止符をうち、ベトナム全土解放をめざす大攻勢を開始し、今やベトナム戦争は決定的に重要な極面を迎えている。

解放勢力の攻勢と蜂起は、北部二省で開始され、次々と米軍、サイゴン軍を撃破し、今や多くの南ベトナムの農村と都市を解放しつつある。

だが、「戦争のベトナム化」政策が破綻し、内外にわたる政治、経済危機をかかえこんだアメリカ帝国主義。ニクソン政府は、パリ会談における南ベトナム共和臨時革命政府の正義の七項目・二項目明確化提案に一切ほろかわりし、いよいよ狂暴な軍事的エスカレーションに熱中し始めた。

数百波の爆撃、連日三千トンの爆弾投下、北ベトナム全港湾機雷封鎖、雨期を目前にした堤防・ダム破壊、全土の都市・町・村・工場・学校・病院・道路・橋の破壊——いまやアメリカ帝国主義は、全世界人民の米軍撤退。ベトナム人民連帯の声を無視し、公然と皆殺し作戦に熱中し始めている。

◻ ベトナム革命戦争を擁護し、日・米帝国主義と対決することは日本労働者人民の国際主義的責務だ！

しかも、「米軍が極東の平和に寄与するためベトナム戦争の補給、修理などを極東地域でおこなうのは当然だと思ふ」(五月一日衆院本会議)といった佐藤発言にみられるように、アメリカ帝国主義の野蛮な強盗行為の最大の協力者は、日本政府——日本帝国主義なのである。勿論、田中政府においても変りはない。

日本政府——日本帝国主義の積極的協力の下に、沖繩・本土の全米軍が連日ベトナムへ直進している現実——ここにこそ、沖繩返還協定にもとづく72年沖繩施政権返還と日米安保条約・日米反革命同盟にかける日・米帝国主義のどす黒い侵略・反革命の野望の一端が明確に示されているのではないか。

ベトナム人民連帯・アメリカ帝国主義糾弾・日本帝国主義の侵略戦争加担・協力阻止！のベトナム反戦闘争の爆発がこの日本の地において決定的に立ち遅れていることを、日本労働者人民は恥としなければならぬ。

ベトナム人民が見事にアメリカ帝国主義の70年代世界反革命戦略、ニクソン・ドクトリンの一角を突き崩しているように、日本人は、当面、自衛隊沖繩派兵阻止闘争を中心課題とした沖繩闘争とベトナム反戦闘争を強固

に結合させ、ニクソン・ドクトリンのもう一つの柱、沖繩返還をめぐる日米安保同盟の再編・強化を完全に破壊させねばならない。

人類史上最大の帝国主義とベトナム人民の民族解放と社会主義のための激突——われわれは、この死闘を、チエ・ゲバラが警句を発したように古代ローマの野獣と奴隷闘士の死闘の見物者ではありえない。

◻ 米帝追撃・日帝打倒をめざすベトナム反戦闘争の巨波を！

二七年前の一九四五年八月、ベトナム人民は、第二次世界大戦の中で、帝国主義間対立の間隙をつき、日本帝国主義が敗北するとともに、全国でいっせいに蜂起した。8・19ハノイ、8・25ユエ、サイゴンの都市蜂起を中心とした全土の都市・農村の蜂起、八月革命は遂に2ベトナム民主共和国をもたらしたのである。

われわれは、ベトナム情勢がもつとも重大な局面をむかえている今日、このベトナム民族の長い革命の歴史の最も輝かしい一頁である八月革命を記念し、とくにサイゴン蜂起の日を記念して「インドシナ革命戦争支援集会」を開催することの重要性を考え、全ての闘う労働者、学生、諸戦線がこの集会に参加されることを訴える。

革命的左翼諸戦線が思想的・政治的・組織的危機にあり、プロレタリア国際主義の原則に立ったベトナム反戦

闘争が決定的に立ち遅れている現在、反動的「自主独立」と日本帝国主義との城内平和をいんべいするための日共の欺瞞的「インドシナ人民支援」や「帝国主義とスターリン主義の代理戦争」をやめさせるため、ベトナム解放勢力の武装解除を願うような革マル的「国際反戦闘争」と分決したこの集会の圧倒的成功は、70年代日本階級闘争の発展に極めて大きな意義をもつに違いない。



< われわれは、全国各地で、われわれと共通の問題意識をもって、闘いを組織している青年労働者、学生が多数存在していることを随分しています。これらの活動との連絡、交流及び相互批判等を行なうことを通じて、更なる闘いの前進をはかってゆきたいと思ひます。

この通信欄を、そのための一絶石として大いに利用されんことを訴へます。

氏 名： \_\_\_\_\_ 年 令： \_\_\_\_\_ 才

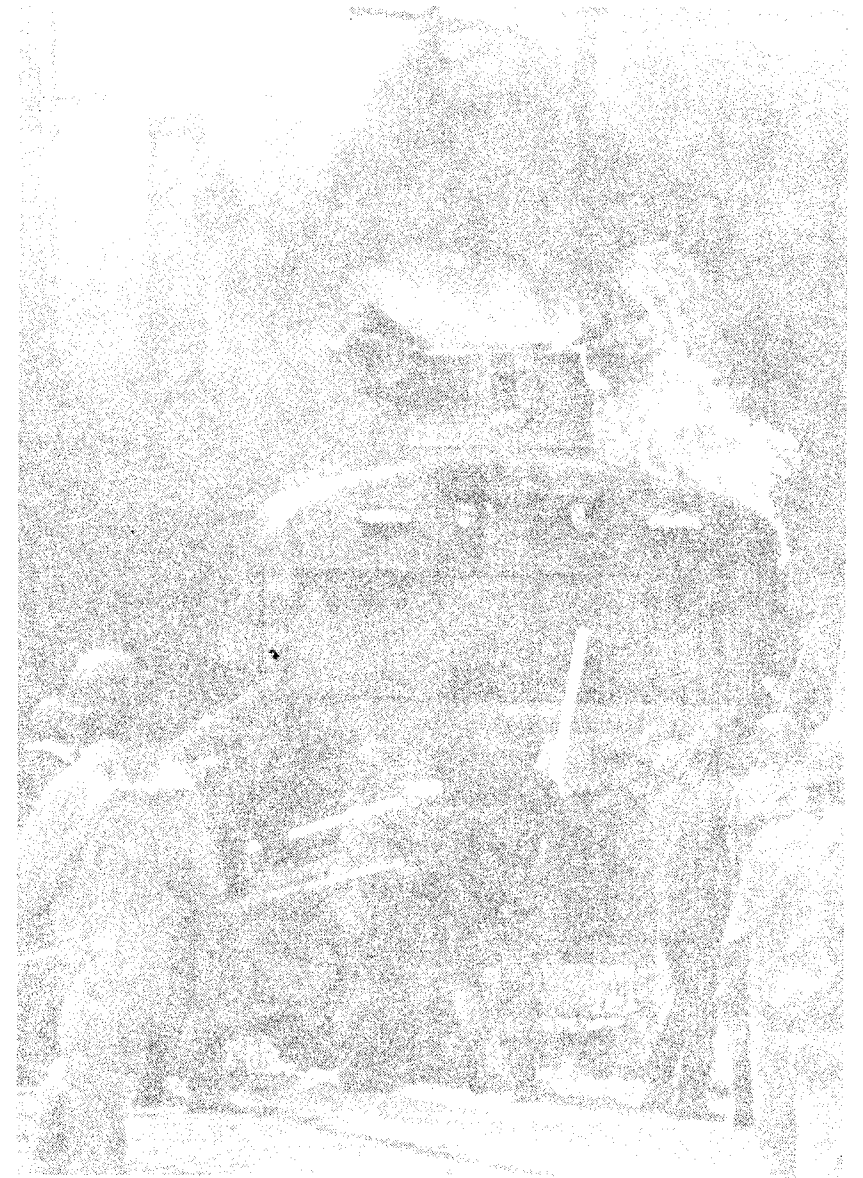
住 所： \_\_\_\_\_ 〒 \_\_\_\_\_

職 業： \_\_\_\_\_ 所属団体名 \_\_\_\_\_

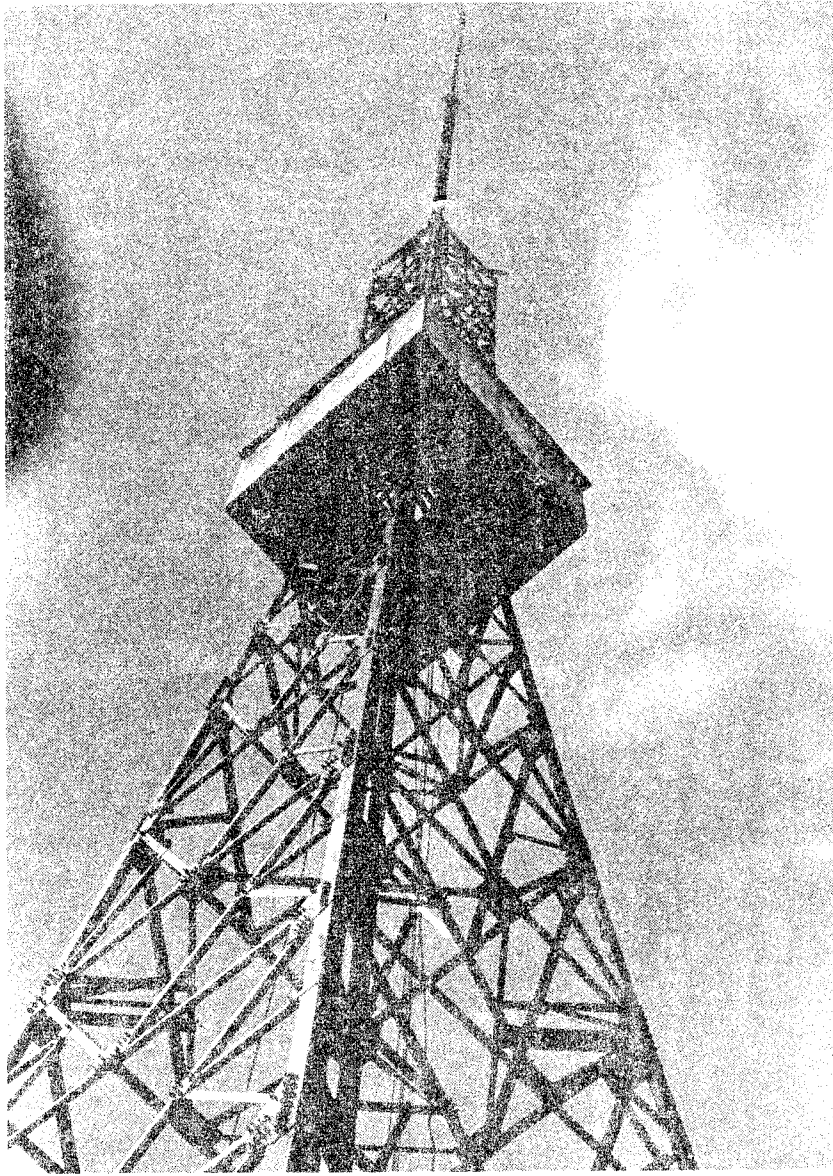
切  
り  
と  
り  
切  
り  
切  
り

— 通 信 欄 —

※ 既ページもご利用ください。



5.7 北熊本にて、派兵阻止闘争の先陣をきる



三里塚岩山に立つ60m大鉄塔

### Ⅲ 観念的反スタ主義の新たな破産

——ベトナム革命戦争に敵対する革マル派の理論的根拠——

安原 史郎

目次

- 序 インドシナ革命戦争と日本労働者級・革命派
- ① 革マル派「反帝・反スタ戦略」の破産とその根拠
- ② アメリカ帝国主義を讚美し、チュウ政権を擁護する革マル派
- ③ ベトナム革命戦争に敵対する革マル派
- ④ 日帝心臓部の反動的平和を願望する革マル派

### 序 インドシナ革命戦争と日本労働者階級・革命派

「いまこそ神聖な抵抗戦争に最大限の貢献をなすべきときである」(四月十五日、南ベトナム解放民族戦線中央委員会。南ベトナム共和臨時革命政府アピール)

「全国の同胞と戦士諸君！  
わが人民の抗米救国の事業は正義の事業である。わが人民の侵略に反対する頑強な伝統と団結の力は無敵である。同胞と戦士は祖国のため、民族のため、平和と正義のために勇敢に前進しよう。

われわれはかならず勝利する。アメリカはかならず敗北する！

平和・統一。独立・繁栄のベトナム万歳！(四月十六日、ベトナム労働党中央委員会・ベトナム民主共和国政府アピール)

この力強い、勝利と新たな闘いの決意は、孤島をのみこむ津波のごとく、侵略者アメリカ軍とチュウ傀儡軍を圧倒し、いよいよ破局に迫いつめつつある、輝しいベトナム人民の団結と英雄精神がほとばしっている。

三月三十日以来、開始されたベトナム解放武装勢力の大攻勢は、北部戦線においてクアンチ省・クアンチ市の解放。革命委の樹立、中部戦線ではビンディン省のほぼ

完全な解放、またアンロク市の突入からサイゴンへの肉薄、メコンデルタでの攻勢……と南ベトナム全土を、否、全世界さえも揺したのであった。この大攻勢は「最後の勝利」に向っての進撃であり、実に一世紀以上にも及ぶベトナムにおける帝国主義の侵略と植民地支配に終止符をうち、特に史上、及び世界最強の、しかし、ベトナム人民の英雄的闘いを屈服させることのできなかつた侵略者アメリカ帝国主義をベトナムから、そしてインドシナから放逐する追撃戦の段階を切り拓いたと言うことができる。それは次の諸点に顕著である。

まず第一点に、この大攻勢の中で、サイゴン軍の主力師団の半数に壊滅的打撃あるいは大損害を与え、第五六連隊のように丸ごとの解放勢力側への寝返り、投降、あいつぐ兵士の脱走という事態に迫いこみ、サイゴン軍を消耗させ、唯一「徴兵制」という名の「兵隊狩り」によって維持しているサイゴン軍の無力さをさらに明らかにしたことである。

同時に、農民の強制收容所にほかならない戦略村、また「民間防衛隊」などの末端の反革命機構を崩壊させ、「都市部九〇%以上、地方九六%」とチュウ自ら豪語した「平定計画」の無惨な姿を露呈させた。そして、非常大権をねらい、高校生まで徴兵し、すべての反政府運動を暴力的に圧殺して、攻勢をくい止めようとするチュウ政権をさらに危機的状況に迫いつめたのであった。これ

が第二点である。

以上の二点は必然的に、「サイゴン軍の自立化、チェー政權の安定をねらうとする「ベトナム化」政策の完全な新たな（ラオス境交作戦の潰滅的失敗に続く）破綻を意味するものであり、しかもその「ベトナム化」政策を沖羅返還政策とともに重要な根幹とするアメリカ帝国主義の七〇年代世界反革命戦略「ニクソン・ドクトリンを徹底的にゆさぶり、アメリカ帝国主義「ニクソンを絶対絶命の淵に、さらに人民戦争の「泥沼」の深みへ追いやって」と、これが第三点である。

広島型原爆の何十個分にも相当する大量爆撃、特にスマート爆撃、貫通弾、化学爆弾など明らかに対人殺傷爆弾の新たな登場とそれによる工場、病院、学校、堤防、ダムへの破壊攻撃という「皆殺し作戦」「生物絶滅作戦」「生態学的環境破壊作戦」そして五月八日、機雷による北ベトナム港灣封鎖というアメリカ帝国主義とニクソンの最後の狂犬のようなあがき。しかし、人類史上でもまれな残忍非道の行為こそ、ベトナム人民の勝利に恐怖した醜惡な帝國主義者の反動的な本質を見ることができよう。第四点は、まさに、このことよって「米ソ会談」で見せた、そして多くのブルジョア新聞が感動的に描いてみせたニクソンの欺瞞的な「平和の使者」という衣を切り裂き、血にまみれた「虐殺者ニクソン」をあばき出したことである。「平和の使者」ニクソンは言う。

「墓地で私は十二歳の少女の写真を見た。この少女は名をターニャと言う。彼女の日記に戦争の悲惨な歴史が

書いてある。地上のより強固な平和のために働きながらも、われわれはターニャやその他のすべてのいたるところにいたターニャのこと、彼女の兄弟、姉妹のことを思い起こそう。一人の子供たりともターニャのような生活を送らせないようにするため可能なすべてのことをしよう。」（五月二十八日、ニクソンのモスクワでのテレビ演説、毎日新聞より）

そして同じ日、同じ時刻に、「虐殺者ニクソン」は「ベトナムにいたる何千、何万のターニャ」に爆撃の雨を降らせているのだ。この事実ほどニクソンのペテン師ぶり、二枚舌ぶりを雄弁に語るものがあるだろうか。

さらに第五点目は、非年七月、パリ会談において、南ベトナム共和臨時革命政府の提出した「七項目提案」及び、そのうちの二項目が明確化された提案こそ、ベトナム問題の解決をもたらす唯一のものであることを、すなわち、正義と進歩はベトナム人民の側にあることをサイゴン政權下の南ベトナム人民に示し、かつアメリカ本土人民をはじめ全世界の人民に明らかにし、口先で「平和」をとさえつつますます狂暴化するアメリカ帝国主義政府——ニクソンに突きつけていることである。アメリカ本土の反戦闘争はますます激化し、ブルジョアジーの中からさえアメリカ軍の即時撤退を公約するマクガバンが大統領候補として登場するなど、ニクソンの追いつめられた状態は明白である。「すべての進歩的人民はニクソンを糾弾している」。もちろん、ニクソンは追いつめられ

ればられるほど、狂暴で残忍な本性をさらけ出すだろう。しかしそれは、人民戦争の「底なし沼」に沈むだけであり、「ベトナム人民は、たとえ闘争が五年、一〇年、あるいはもっとも長期間つづこうとも、その正義の、必勝の闘争を持続する十分な決意と十分な力をもっている」（五月十日、ベトナム民主共和国声明）ことは、今度の大攻勢でまたまた証明されているからである。

ベトナム、インドシナ人民の偉大さは一九世紀後半フランスの植民地支配に抗して決起して以来実に、百年にも及ぶ。三つの帝國主義侵略者——フランス、日本、アメリカとの民族解放——革命戦争を系統化してきたことであるが、しかし単にそのことに尽きるのではない。世界史上に不滅の輝きを放っているのは、わずかな国土と数千万の人口しかもたないベトナム人民が、日本帝國主義、フランス帝國主義を駆逐した上、さらに史上、及び世界最強の帝國主義——アメリカ帝國主義の巨大な経済力と軍事力を存分につぎこんだ物量作戦に支えられた新植民地主義支配と侵略。反革命戦争に一步も屈せず、解放した北部における「革命の根拠地」建設の闘いと、南部における、人民戦争を持続。発展させ、さらにラオス、カンボジア人民と単一の戦線を形成し、数十万のアメリカ帝國主義軍隊を「泥沼」に引きつづり込み徹底的に疲弊させ消耗させ、「奇跡」と呼ばれた人民の「創意工夫」と不屈の英雄精神で、あらゆる種類の侵略、反革命戦争を打ち破ってきたことにある。それは、帝國主義の新植

民地主義的支配に対する、プロレタリアートの指導のもとに民族解放と社会主義を結合する永続的革命戦争の輝かしい勝利を意味するものであり、したがって「第二、第三のベトナムを！」を合言葉にした、南アメリカ、アラブ、アフリカなどの民族解放——革命戦争の牽引者となっている。またベトナム人民の闘いは、世界資本主義の腐朽性、寄生性の象徴たる「ドル危機」を、したがってIMF——GATT体制の危機をも極度に進化したのみならず、ベトナム戦争を「民主主義の防衛」という美名のもとに正当化することさえ破綻し、黒人差別ともかからず、アメリカ本土の爆発的な反戦運動、黒人解放闘争を引き起こし、さらにフランス五月革命、西ドイツの学生運動の急進化など帝國主義心臓部での階級闘争の激流をまきおこしたのである。これらの事実は層層的にあらわらばまさに次のことを意味する。ベトナム——インドシナ革命戦争は、アメリカ帝國主義とスターリン主義を柱とする戦後世界支配体制を特に新植民地主義を粉砕して帝國主義心臓部での革命の敗北にもかかわらず、スターリン主義の誤った指導と闘いつつ中国革命戦争を勝利に導いた中国人民、またそれに引き続いて闘いぬいている朝鮮人民とともに、巨大な反帝統一戦線を形成し、世界革命戦争の最前線を堅持している、ということである。

労働者運動を小ブル的に歪めるスターリン主義は、第二次世界大戦の危機を遙して、現代修正主義、社会帝國

主義へと成長した。すなわちフルシチョフ、トリアッチ主義、あるいはそれに「自主独立」を加えた代々木「共産党」、チトー主義などがそれであったが、これに対して、スターリン主義指導下の中国革命のジグザグを克服してきた中国共産党は、国際共産主義運動では「中ソ論争」によってフルシチョフ主義からはっきり訣別し、国内においても、文化大革命において、劉少奇などのフルシチョフ主義への屈服を粉砕し、プロ独下の階級闘争を堅持し、「ベトナム人民の信頼できる後立て」に世界革命の根拠地建設の闘いを前進させてきた。

この世界革命の新たな波の担い手こそ、スターリン主義の発生と不可分に結びついていて挫折した世界革命、旧植民地・半植民地圏の民族解放闘争に継承し、その闘いの中で現実的にスターリン主義に対する革命的実践的批判を開始していることを確認しなければならぬ。もちろん、われわれは、旧植民地、半植民地諸国の革命的な諸共産党労働者党それ自身を、世界共産党と規定し、没主体的に、没マルクス主義的に振舞ってはならない。重要なことは、それらの共産主義者・革命家たちが、民族解放・社会主義のための苦闘を通して「特殊」な形で実現してきた、現代マルクス主義と世界革命の普遍的内容を、帝国主義心臓部の共産主義者が、把みとり、それから学び、そして、帝国主義打倒の実践によって更に発展させていくことである。一般に、観念的反スタ主義者が言うこれら諸党の「限界性」とは国際共産主義運動その

ものの限界であり、それは他ならぬ帝国主義心臓部において腐敗した旧コミンテルン系共産党に代わる新たな国際主義の旗を掲げたマルクス主義政党的未確立に大きく起因するのであり、このことに無自覚に、批判することは、「評論家」にしかできないことではないだろうか。ベトナム—インドシナ革命戦争を最前線に中国・朝鮮を貫く強大な反帝統一戦線という新たな世界革命の波は、不可避的に、帝国主義心臓部での激闘へと持ち込まれるが、それは同時に、コミンテルン—スターリン主義によって敗北せしめられた世界革命、特に革命の敗北によって延命した帝国主義の戦後支配体制に現代過渡期世界を根底的に止揚するべく、レーニン主義の革命的再生たる新たな革命党建設の闘いをも突きつけてこざるをえないのである。

このことは、一九六五年、アメリカ帝国主義の北爆開始にもかかわらず、さらに前進するベトナム人民の闘いに呼応して全世界の帝国主義心臓部を揺した激闘の指導的担い手が、他ならぬ、「新左翼」と呼ばれる、新たな共産主義者のグループであったことに、最も特徴的に示されていると言わねばならない。それは、日帝心臓部においても例外ではない。いやそれどころか「アジアの吸血鬼」としてアジアへの侵略革命以外に延命の道をもたない日本帝国主義は、アジアの目醒め、民族革命の巨波を真正面から受けざるをえない。したがって、現在、アメリカ帝国主義が、ニクソン

・ドクトリンへの転換を余儀なくされ、日本帝国主義との反革命同盟を再編、強化しつつ乗り切ろうとしていることは、世界最強のアメリカ帝国主義でさえなしえなかった民族解放・社会主義の闘いの圧殺という、重すぎる任務を日本帝国主義に負わせるものであり、インドシナ人民の破竹の大攻勢は、アメリカ帝国主義の惨たんたる状態よりもさらに無残な日本帝国主義の末路を準備していると言える。アジアにおける侵略—反革命戦争は、たとえ世界最強の帝国主義たるアメリカ帝国主義にとっても「局地戦争」だとしても、日本帝国主義にとっては「総力戦」的性格を意味するのである。日本帝国主義にとってアジア侵略反革命は、同時に「死の飛躍」でもあるのだ。

そしてこのことを本能的に感じる日帝ブルジョアジーは、一九六五年日「韓」条約締結以後、本格的に開始されたアジアへの膨張とともに、アメリカ帝国主義との反革命同盟を強化しつつ、かつ、アジアでの侵略反革命戦争を遂行するに足る反革命治安体制「国民総動員体制」熱狂的排外主義・国家主義の育成に向けて、必死の策動、プロレタリアート人民への攻撃を開始してきている。

ベトナム反戦闘争を契機に、六七年十・八羽田闘争以来、日本革命的左翼が全力量と全能力を注ぎこんだ、そして、日本列島を根底から揺した大衆的暴力闘争こそ、日帝の唯一の延命の道たるアジアへの侵略反革命と対決し、挫折せしめ、それをめぐるブルジョアジーとの階級

攻防戦に勝利しぬくこと、すなわちアジア人民の反帝闘争に直面し、不可避に形成される日本帝国主義の戦略的危機を文字通りの階級危機へと現出せしめ、日本帝国主義の最後の命綱である「城内平和」を突き崩し、インドシナ、中国、朝鮮を貫く反帝統一戦線と結合して世界革命戦争の主戦場を日帝心臓部に切り拓き、日帝を打倒し、米帝を放逐する内乱の端緒、革命戦争の起点としてあつたということが出来る。

今、この数年間の死闘が切り拓いた階級闘争の高みに立つことによって、一九五十年代後半、日本革命的左翼が代々木「共産党」に対して「世界革命・暴力革命・プロレタリア独裁」の旗を掲げて登場し、スターリン主義批判にその根拠をおいたことの、革命的意義も、またその大きな観念的欠陥をも、とらえることができる。この数年間に、全貌をあらわした、日本共産主義運動の危機的状況は次の三点に収約されるだろう。まず第一に、代々木「共産党」がますます議会主義・平和革命路線「自主独立」路線を純化し、かつ「沖縄全面返還要求」、日帝による釣魚台略奪への加担、中国共産党に対する「大國主義的干渉、社会植民地主義」なる悪口雑言、連合赤軍事件などにおける「毛沢東盲従」国民の敵「なる排外主義的宣伝など、公然たる社会排外主義へ急速に転落しつつあること。特に注意しなければならないのは、全共闘運動が教えたように、その昂揚期、階級闘争の本来の暴力性があらわになるとき明確に反革命として登場した

ことである。十一回大会以降、黨員資格の大幅な緩和、「新日和見主義」の発生などは、代々木「共産党」のさなる右翼転換を示す徴候に他ならない。

第二は、日本革命的左翼に支配的であつた観念的反スターリン主義の破産、特に、それは革マル派の醜態で反動的末路である。現代世界を「帝国主義とスターリニズムが相互依存、相互反撥する世界」として、真のスターリン主義批判を放棄しそれを超歴史的、超階級的存在にまつりあげ、同時にそのことによつて帝国主義を美化するという観念的世界観。また、トロツキー以下の悪質なトロツキズム日本版として、それに、小ブル的人間解放論、「疎外革命論」と「党共産主義の母胎」論との融合を理論的表現とする、革マル派の自己増殖運動に階級闘争を解消し、おしとどめるという革命論。この二つは互いに補完しあい、体系化され、革マル派の合法主義、「蜂起を組織する」ことの否定たる民同追随、民族解放闘争、農民闘争へのべつ視という政治的品格を弁護しているのである。革マル派のこのような体質は、新左翼運動でも常に右翼的部分を代表していたが、六七年・七八以降の熾烈な階級攻防戦のさ中に、東大安田決戦から、右翼日和見主義に転落し、その後入管闘争、三里塚闘争、部落解放闘争に公然と敵対し、早稲田大学における反革命的制圧をはじめ、革命的左翼に対する反革命的襲撃にまで至り、現在においては、中国、朝鮮、インドシナ人

民への敵対排斥主義的傾向を強め、一方では、切り拓かれた大衆的暴力闘争の地平を「武装蜂起思想主義」として清算し、その醜態な姿をさらけだしている。

第三は、六七年・七八以降の死闘の中で、観念的反スター主義など左翼反対派の性格の限界と破産が宣告されたにもかかわらず、その克服を、レーニン主義の再生、ブルジョアズムの確立へ向けて闘いを組織化できず、プラグマチックな対応のあげく崩壊するか、ますます混乱と分解を深めている日本革命的左翼の現況である。その典型的な姿を示しているのが中核派である。入管闘争の過程において観念的反スター主義の破産をはっきりと突きつけられ、その反動的末路を示す革マルとの党派闘争の中で、立脚点たる観念的反スター主義をいよいよ空洞化させ、「自己批判運動」「暴動路線」「KKKK連合粉碎」などによつてプラグマチックに乗り切らんとしてきたが、今日ではさらに一方では「スターリン主義を、プロレタリア世界革命に敵対する反革命として本質的に規定」(前進588号)し、かつ他方では「スターリニストの強力な影響下に展開されている」「ベトナム—アジア人民の闘い」(同上)を、「スターリニストの歪曲」「究極的解決—勝利を達成することができない」などとケチつけを行い(中核派が最も批判する革マル派の「ポスト・ベトナム」論とどこが違うのか)ながらも、それを民族解放—革命戦争と、「帝とスターの代理戦争」などと言つていた過去(といつても数年前)の「前科」は都合よ

く忘れて、認めざるをえない、という混乱した姿を見せられている。中核派はこのような混乱を、ベトナム労働党、あるいは南ベトナム解放民族戦線、共和臨時革命政府の評価を、つまりそれらは「本質的には反革命」である、スターリン主義者」なのか、それとも、革命の味方なのか、という点を、また、現在のベトナム革命戦争の政治的軸たる「七項目提案」に対する評価に対して、沈黙をまもることによつて、かつ「内乱」「革命的蜂起」なる空語を叫ぶことによつて無理矢理破綻を阻止しているにすぎない。ただ彼らが革マル派と自己を革命的に区別せんとすればするほど、彼らの綱領的理論的基礎、黒田哲学と観念的反スター主義はますます無思想性を代表していくのである。

観念的反スター主義を克服し、真のスターリン主義批判が、今こそ問われる時代はない。スターリン主義批判とは、単なるその理論の批判に終わることはできない。スターリンの誤りをスターリン主義にまで高めあげたもの、スターリン主義を現代過渡期世界の日和見主義フルシチョフ・トリアッチ主義にまで発展させた、世界革命の歴史、その上に立つ、現代世界そのものを批判しなければならぬ。スターリン主義、現代修正主義批判にあたって、レーニンがカウツキー主義を批判する際の方法論的態度「(1)社会排外主義はどこから出てきたのか? (2)なにがそれに力をあたえたのか? (3)どのようにそれとたたかうべきか?」(「第二インターナショナルの崩壊」)

そして付け加えておくならばレーニンはカウツキー批判の前提として帝国主義批判をおいていたこと、これらの視点をわれわれは学ばねばならない。

孤立したロシア革命の中で発生したスターリン主義は、第一次大戦後、三〇年代、第二次大戦後の世界革命の敗北の右翼的総括を通じて、レーニン主義との折衷的性格、ジグザグ路線を捨てたり、帝国主義国家及び「労働者国家」の労働貴族官僚の利害を代表し、過渡期世界の反動的な固定化を意味する「平和共存戦略、議会主義、平和革命」を主要な内容とする現代過渡期世界の日和見主義—フルシチョフ・トリアッチ主義(及び代々木「共産党」の宮本主義)へと完成した。一九五六年、フルシチョフによるスターリン批判、「モスクワ宣言」「モスクワ声明」こそ、その象徴である。

われわれが、革マル派の観念的反スター主義をとりあげ批判するのはそれが日本革命的左翼を色濃く支配してきた観念的スターリン主義批判の、最も完成され、体系化されたものであり、その批判はまた観念的反スター主義の反動的な実践的帰結を余すところなく暴露するからである。またこの論文で、特に彼等の自称「ベトナム反戦闘争」論をとりあげたのは、いうまでもなく、ベトナム—インドシナ革命戦争に対する態度こそ、日本革命的左翼の重要な試金石にはかならないからである。ベトナム革命戦争の前進の中で、革マル派の観念的反スター主義の新たな破産が暴露されている。①アメリカ帝国主義を讃美

し、チェー政権を擁護し、②ベトナム—インドシナ人の革命戦争に敵対し、③日帝心臓部での反動的平和を願望する、という最も反動的末路に至らざるをえない、革マル派の理論的根拠があげられるだろう。もちろん、それは単に革マル派の批判にとどまらず、多かれ少なかれ、観念的反スタ主義に影響されているがゆえに、ベトナム—インドシナ革命戦争の革命的意義を充分に理解できない革命的左翼諸党派の批判を含むものであり、かつ、真の革命派の階級的責務をも鮮明にするものであろう。

### 1 革マル派「反帝・反スタ」戦略の破産とその根拠

革マル派の「ベトナム反戦闘争」論批判の前に、まず、悪名たかい「反帝国主義・反スターリン主義世界戦略」の全貌を確認しておくことが必要である。この「反帝・反スタ」戦略と反動的「ベトナム反戦闘争」は、結合しているのである。

それでは革マル派は現代世界をどのように把握しているだろうか。この点こそ核心点である。なぜなら現代世界の認識の仕方は、同時にその変革の立場、その方法と内容をも規定するからである。以下は、「日本の反スタ—リン主義運動 2」の八激動する国際・国内情勢とわが同盟の組織的任務及び八前衛党組織建設のために—組織現実論の展開からの引用である。

ギ—である。そしてこれらの総体につらぬかれて本質」がスターリニズムなのである。そして、「一九五六年の上からのスターリン批判とハンガリア革命の血の弾圧以後急速に深まった現代スターリニズムの「左」(毛沢東主義)と右(フルシチョフ主義)とへの分裂、そして「社会主義への多様な道」の名における右翼スターリニズムの七花八裂」という「クレムリン官僚の政策に助けられてあまりにも長く延命させられた現代帝国主義の腐爛に対応した現代スターリニズムそのものの破産」が暴露されている。

(4) 一方、「二大陣営」に分割された戦後世界体制—「一国社会主義」ソ連邦が軍事力をもって地理的に拡大し東西に緩衝国を確保しつつ形成されたスターリニスト陣営と、これに軍事的、政治的、経済的に敵対して再建された戦後帝国主義との、いわゆる「冷戦構造」によって「資本主義国、とりわけ敗戦帝国主義(ドイツ、イタリア、日本)における戦後危機の革命的危機への転化が圧殺されるとともに」「対ソ連軍事戦略にもとづいて、「アメリカ帝国主義はその政治経済構造の内部に軍事的要因をはじめから内在化し、それと国家独占資本主義的諸政策および資本輸出とを両輪として」「自己の存在を確保し」「アメリカ帝国主義の決定的な経済力を物質的基礎として」「ドルを基軸通貨とし、ポンドを補助的基軸通貨とした国際通貨体制を形成し、そうすることによってブロック経済の矛盾を国際的な基軸で国家独占

(1) 「一九一七年のロシア革命を結節点としてきりひらかれた世界革命への過渡期は、レーニン死後のソ連共産党とその路線の衰質、一九三〇年代のスターリン・テルミドールを決定的な契機として完全にゆがめられた」

(2) 第二次大戦後、「スターリンがチャーチルやルーズベルトとともにヤルタでかわしたかの「密約」によってつくりだされた戦後世界体制(東ヨーロッパとアジアの一部とに軍事力を背景として地理的に拡大したソ連「社会主義陣営」と「民主主義的帝国主義」陣営との二大体制への、現代世界そのものの分割)、いわゆるヤルタ体制」が成立し、「たとえ「冷戦」時代(一九四五—五三年)とか「平和共存」時代(一九五四—六〇年)とかの段階的特殊性があったとはいえ、そもそも戦後世界体制は基本的に帝国主義とスターリニズムに二分分割され、それらの間の種々のかたちでの相互依存と相互反撥において歴史的に運動してきたのであった」

(3) スターリニズムとは「ソ連圏という強大な物質的基礎を獲得し各国共産党を実体的基礎としている」「二〇世紀現代における怪物」であり「世界革命への過渡期においてレーニン死後の、とりわけ一九三〇年代のスターリン・テルミドールを結節点として」ソ連官僚制国家が出現し、さらにスターリニスト圏が形成され、そしてこれらを物質的基礎として各国共産党とそれに指導された一切の運動は変質した。このような事態の根底にありそれを規定しているのが「一国社会主義」のイデオロ

資本主義的に「解決」(つまり擬制的に解決)してきたのであった」しかし「ドル危機によってゆすぶられ、「スターリニスト陣営の分解と没落に対応して、いまや帝国主義陣営も、全体として、いまだかつてない動揺にさらされ、崩壊の危機に直面させられている」

(5) つまり、現段階における国際情勢は「もはや一つの「陣営」を構成することさえできないまでに分解し多極化し、それによって同時に内部矛盾をますます激化させつつあるソ連圏と、金の二重価格制への移行によって国際管理通貨体制が実質上崩壊した点に象徴されるように、これまたそれ自体としての世界体制を形成しえなくなっている今日の帝国主義陣営とが、相互に依存しあっているながらも同時に相互に反撥しあい敵対している」が「全体として没落を開始し崩壊の途を突進しつつある」「現代世界はようやく激動を開始しつつあるかみえる」

(6) しかし、「現代帝国主義とスターリニズムとに基本的に分割されている現代世界そのものを根底からくつがえし変革しうる可能性を本質的にもっている国際プロレタリアート・勤労大衆」は「にもかかわらずそれを現実化するだけの組織化された主体的な力をなお成熟させてはいない」それは特に「わが反スタリニズム的共産主義運動の微弱さのゆえに、決定的にたちおくれしている」

このマルクス主義の唯物史観とは全く無縁な革マル派

の歴史観。世界観の諸特徴は次のようにあげられるだろう。

その第一は、歴史の原動力を階級闘争に求めるのでは「帝国主義とスターリニズムの相互依存、相互反撥」によって、それも「帝国主義者とスターリニスト」という一握りの人間の思惑や意志によって歴史が創造され、世界が動いているかのようにとらえる、徹底した観念論、二元論、ブルジョア歴史観、世界観だということである。「スターリンがチャーチルやルーズベルトとともにヤルタでかわしたかの『密約』によってつくりだされた戦後世界体制」という驚くべき理解、あるいは「モスクワ」「北京」「ハノイ」「ワシントン」とかで表現される、政府首脳意向と動向がすべてである革マル派の「情勢分析」など、ブルジョワ新聞と同じレベルの観念的世界観である。

その第二は、スターリン主義をプロレタリアートの中に流入したブルジョア・イデオロギーの一種というようにとらえな<sup>1</sup>ただけでなく、いさいの階級規定を欠落させ、「スタ圏」を物質的基礎とし、スターリニストの「反プロレタリア政策の本質」など、超歴史的に「スターリニズム」なるものを指定し、自己運動させていることである。スターリン主義を「二〇世紀の怪物」と超歴史的、階級的存在にまで高めあげることによって、スターリン主義批判を全く放棄し、「裏切り」「欺瞞的」等々の弱々しい反撥を示しているにすぎない。したがって、中国

革命はスターリニスト革命、中ソ論争はスターリニストの内輪もめと、歴史的現実から切り離された、スターリニストなるものの意志によって説明され、その歴史的、階級的意義など一切否定されてしまうのである。その第三は、そういう超歴史的、超階級的存在としてスターリニズムを指定することによって、逆に、戦後の帝国主義が古典的帝国主義とは違って「スタ」との相互依存、相互反撥によって、つまりスタが存在するかぎり、延命していくかのようにとらえている点である。戦後の帝国主義が、世界革命の挫折の上にIMF体制に基く世界統一市場と、国際反革命同盟の維持によって一時的に延命しているにすぎず、同時にそのことによって寄生性、腐朽性を極度に深化させ、死滅しつつある資本主義という性格をますますあらわにしているにもかかわらず、「対スタ」のための「軍事的要因」を内在化したり、国家独占資本主義政策によって「操制的に解決」されるかのように帝国主義を美化するのであり、帝国主義の本質たる侵略、したがって民族の抑圧も「経済進出」とか「新植民地主義的進出」とかに限定することによって事実上、否定されることになる。

第四は、スターリニズム万能論であり、「スターリニズム」に革命を「去勢する」能力を無制限に与え、かつ、「スターリニスト」と人民を機械的に切り離すことによって、「現代世界の根底的動揺」や「帝国主義の危機」を説明する時には「人民」や、一部の頑固派の「スタ」

が登場し、「帝国主義の乗り切り」を説明するときには、スターリニストが登場すると言った具合である。このような帝と「スタ」、及び「スタ」と「人民」の二元論によって、現代世界を「帝とスタ」の共存体制に描き出し、新しい世界革命の前進を否定するのである。

第五は、プロレタリア人民は「スタ」の歪曲によって無力化されているととらえ、したがって現代世界を根底的に変革する主体を「反帝・反スタ」戦略の支持者、つまり革マル派に限定していることであり、その量的拡大に、革命の成熟度をみるという超観念論である。

そこでは、革マル派が、論理主義的に観念的に、てっぺんあげた革命観、世界観によって現実の世界を解釈し、「悲劇だ」「相互癒着だ」「腐敗しきっている」等の絶望的嘆きを対置しているにすぎないのである。

したがって「帝国主義とスターリニズム」とに基本的に分割されている現代世界そのものを革命的に変革するための戦略、現段階における世界革命戦略」としての「反帝国主義・反スターリニズム戦略」は、第一に、革マル派自身が言うように「反帝・反スタ」戦略の一契機としての「反帝」は、帝国主義段階におけるプロレタリアートの普遍的課題としての「反帝」そのものではない。「反帝」と「反スタ」とは論理的に同時的な戦略をなす。「日本の反スタ運動」<sup>2</sup>ということによって、現代過渡期世界を根底的に止揚する闘いの「帝国主義打倒」という最も中心的課題を永遠の未来においやり、第

二に、「各国の特殊な政治経済構造のもとで、それに規定されながら、うちだされた戦略・組織戦術・戦術などを物質化するための闘いは、まさにそれらには「反帝・反スタ」世界革命戦略が現実的に適用されているがゆえに、各国革命の単なる個別的実現（「国革命主義ないし民族主義的な遂行」ではなくして、その普遍的実現となる）（同上）。要するに単に「日本帝国主義国家権力の打倒」にゆがめるのではなく、「世界革命の一環」として「反帝・反スタ」を適用しなければならない、として、「反帝・反スタ」の前衛党建設に、すなわち革マル派の自己増殖に、現実の階級闘争と全く切り離れた「革マル」によって、階級闘争の諸課題は「スタの裏切り」を証明する手段にしかすぎない）意識の変革に解消する。経済主義者たることを擁護するものでしかないのである。つまり、帝とスタとに分割され、それらの相互依存、相互反撥によって激動しているかにも見えるが、実は「平和共存」の現代世界こそ、革マル派の存在基盤なのである。現代世界という「悲劇」の主人公として登場し、嘆きあい、お互いに慰め合うというのが、革マル派のすべてである。

しかしそれは、挫折した世界革命がベトナム・インドシナ人民を先頭とする旧植民地・半植民地国の民族解放——革命戦争が帝国主義の戦後世界支配体制を突破し、かつそのような世界革命戦争の主戦場を帝国主義心臓部



に切り拓くべく、闘いが否応なしに開始されている今日、革マル派の反帝・反スタ/戦略なるものは、そのような世界革命の新たな巨波を否定し、その帝国主義心臓部への波及を阻止せんとするものであり、城内平和の維持に必死の帝国主義ブルジョアジーにとって、涙が出るほどうれしい「救いの手」をさしのべることを意味するのは当然である。

その表現が、六七年十・八以降の大衆的暴力闘争に対して「革命闘争と大衆闘争の区別と連関」とか「改良闘争→反政府闘争→反権力闘争→革命闘争」などという、硬直した段階論のあてはめによって反対し「武装蜂起盲想主義の破産」等々と宣言し、敵対していることが、何よりも、そのことを示しているのではないだろうか。

以上のような革マル派の「反帝・反スタ」戦略の反動的な本質を示すものこそ、彼らのベトナム革命戦争に対する態度である。ベトナム問題も「現代世界の悲劇」を証明する以外のものではなく、ベトナム・インドシナ革命戦争そのものが否定され、ベトナム戦争が「終結」するかのよう描き出されるのである。しばらく彼らの言うところを聞いてみよう。

(1) 「そもそもベトナム戦争の勃発なるものは直接的には中国とソ連邦とのあいだの分裂が決定的となったまさに

それは、まさしく現代帝国主義と現代スターリニズムとが、相互に依存しあいながら演じている現代の悲喜劇以外のなにものでもありえない」  
中ソの対立——米帝の対スタ圏軍事侵略——米帝の軍事の敗北とドル危機——スタとの取引——ベトナム戦争の終結。一九六八年、革マル派はこのようなベトナム戦争の「終結」を願望したのであった。

革マル派のこの願望も、また「六ヶ月以内にベトナム戦争を終結させる」と公約して大統領に就任したニクソンの願望も、ベトナム人民の不屈の英雄的精神の前には、はかない夢であつたことはすでに歴史的事実である。ベトナム革命戦争は終結するどころか、質的には遊撃戦から正規戦が主軸となり、かつ量的にはインドシナを単一の戦場とするインドシナ革命戦争へ発展し、アメリカ帝国主義にジョンソン時代のマクナマラ戦略からニクソン・ドクトリンへの転換を余儀なくさせ、それさえ粉碎しつつあるというのが、現状にはかならない。このことは、革マル派にとつては一大事である。なぜなら「帝とスタが相互依存・相互反撥する現代世界」の崩壊は、同時にそこに存立基盤をもつ革マル派の崩壊をも意味するからである。それゆえ、次のように、再び「ベトナム戦争の終結」を願望するのである。

(3) 「『ベトナム化』政策にもとづいた米軍の南ベトナム

その時に、この分裂にくさびをうちこみ、アジアにおける「反共」軍事体制をより一層強化するとともに、さらに東南アジア・中近東・アフリカなどの後進国および植民地に対する帝国主義的権益を確保し、それらの労働者、勤労大衆の搾取と収奪をますます強化することをねらつたところのアメリカ帝国主義そのものの本質を赤裸々に示したものであった」(「日本の反スターリン主義運動と国際国内情勢とわが同盟の任務」)

(2) 「一九六八年初頭以来、激烈に展開されたテト攻勢。そしてこの闘いの中核部隊として南ベトナム解放民族戦線がそれとは別に新たにつくりだされた民族民主平和連合などと組織的に提携することを宣言して、軍事上、政治上、経済上でアメリカ帝国主義に從属化しているキュー・キの軍事的ポナバルチスト政権に対して政治的にも攻撃をかけたこと。こうした軍事的および政治的攻撃に敗退したアメリカ帝国主義は、まさにそのことによつて現代帝国主義陣営の盟主としてのその政治的威信を低下させ、軍事的威力と優位を失墜させないわけにはいかなかった。そうすることによつてアメリカ帝国主義は同時にまた、そのアジア軍事戦略の支配体制の方向転換をなすべきことをも強制されたのである。」

「『ジョンソン声明』に端を発し、一九六八年秋のアメリカ大統領選挙を目前にひかえてベトナム戦争を「終結」させようとして開かれていたパリ会談、そのただなかで、またその後で展開されている、このような事態。

からの段階的撤退とサイゴン軍への肩代り、これを前提にしたパリ「和平会談」でのベトナム戦争の政治的收拾、このようなプランにもとづいて米帝は敗退したベトナム侵略の「名譽ある解決」の道を確保しようとしてきた」(解放二三四号)

(4) 「クアンチ陥落にひきつづき、機雷封鎖に対応する北ベトナム・解放戦線の軍事攻勢の強化に直面したキュー政権は、非常大権の獲得をめざしながら、議会によつて否決され、軍事的劣勢のみならず、政治的基盤の崩壊状況をも露呈させたのであった。

こうした事態に直面した米帝は、未曾有の軍事力を集中して軍事攻勢を北ベトナムに浴びせ「停戦条件」をめぐってハノイを孤立させながら、「現状停戦」の線でハノイを屈服させ、前線に投入した政府軍を南ベトナム国家権力の発動をささえる実体的保障として再編したうえで「自由選挙」にこぎつけることを目標に、軍事的外交的冒険を強行しているのだ」(解放二三六号)

(5) 一方、「『反共国家』としてのサイゴン政権維持のために時間かせぎを意図する米帝の軍事・外交攻勢の重圧は強大なものになろうとしている」(解放二三六号)

その上、「ニクソンの運命策動に対し陣營をなさず分極化するスターリニスト陣營がこぞって屈服する動きに直面させられ」(二三六号)「テト攻勢」人民戦争」路線の破綻をのりきろうとする」北ベトナム。解放戦線などの「ベトナム。スターリニスト」は「和平交渉」米帝から「完全撤退」をとりつけるための譲歩を意味する「民衆解放政府方式」を打ちだし、「あくまで対スターリニスト圍軍戦略体制の崩壊を食いとめ」「反共国家」としての南ベトナムを存続させ、新たな軍事侵略の拠点を残そうとする米帝が、その最低線を「反共の防波堤」

「中立政權」においてのを見てとり、「祖国統一」の実現以前においてその「非同盟中立」政策、米帝との間の「政治的。経済的交流の保障」を大きく描きだし「人民戦争」の軍事的成果を背景に米帝の「名譽ある撤退」を迫っているのだ」

(6)

「こうしていまや、帝國主義者とスターリニストは、ふたたび直接交渉をも織りこみながら「停戦。撤退後の南ベトナム政權の将来を決定する自由選挙を運営する機関」の実体構成をめぐるかけひきを焦点に相互闘着的な軍事。政治攻勢をくりひろげようとしているのだ」しかし、これは革マル派の頭の中だけの話である。そ

れはさまざまな事実の隠蔽と歪曲によって成り立っている。もちろん実際には、観念的世界観に合わせて、現実の世界は解釈され、不断に新たな歴史を創造している現実の階級闘争も歪められて反映するのではあるが。

## 2 アメリカ帝國主義を讚美し、チュ — 政權を擁護する革マル派

「反帝。反スタ世界観」による歴史の偽造。事実の歪曲がまず、いかにアメリカ帝國主義を讚美し、チュイ政權を擁護するものであるかを見ていこう。

その第一は、南ベトナムを独立国家と規定し「二つのベトナム」論の立場に立っている点であり、第二はそれを根拠としてアメリカ帝國主義の侵略反革命戦争を、対スタ圍への対心として、南ベトナム「反共軍事政權」の強化あるいは防衛のためのテコ入れというように把握している点である。そして第三に、ニクソンの「ベトナム化」政策を、それが戦争の終結をもたらすものであるかのように美化している点である。

革マル派は現在、ベトナム戦争の歴史を次のように語る。

「ところで、今日のベトナム侵略戦争は、かかる米帝のアジア支配体制のインドシナ半島における崩壊的危機をくいとめようとする米帝の絶望的な試みにはかならな

い。対ソ連圍のアジア軍事戦略の支配体制の最前線に位置する「反共軍事国家」南ベトナムの「ベトナム人民の解放闘争においつめられた」解体的危機、これをくいとめるための絶望的な試みが、六一年以来本格化した米帝のベトナムへの軍事侵略なのである。そして、それはかのジュネーヴ協定というかたちでの帝國主義者とスターリニストの妥協によるベトナムの南北二分断こそを歴史的な出発点にしているのだ。」(解放二三八号)

すぐ気がつくのは、先に引用した「日本の反スタ」では、アメリカ帝國主義の侵略戦争を、中ソ対立に引きをうちこみ、反共軍事体制を強化する、という攻撃的なものとしてとらえていたが、「解放」二三八号ではそれを、ベトナム人民の解放闘争による南ベトナム「反共軍事国家」の解体的危機をくいとめる、防衛的な性格のものへと、さらに反動的に修正されている点である。つまり「二つのベトナム論」は「解放」二三八号では完全に前提とされているのである。そして、ジュネーヴ協定によって「南北分断」がなされたかのように歴史を偽造しているのである。つまり、①一九四五年ベトミンを先頭にした八月蜂起によってベトナム民主共和国が建設されたこと、②それに対してベトナムの再度の植民地化をねらったフランス帝國主義の侵略戦争が開始され、しかもすでに一九五〇年より、アメリカ帝國主義は、フランスに、武器。経済援助を開始し、さらにサイゴンに軍事援助顧問団を設置し、一九五四年には戦費の八〇%を負

担するなどこの時から、アメリカ帝國主義のベトナム侵略反革命が露骨に行われていることを全く隠蔽し、③ジュネーヴ協定は、「ベトナムについては、北緯十七度線を臨時軍事境界線として、ベトナム人民軍とフランス連合軍は、それぞれ北と南に撤退し、集結する。またこの境界線からそれぞれ五キロ以内の地域を非武装地帯とする。この協定実施以後、ベトナムへの軍隊、軍事要員の導入や武器の持ちこみは禁止され、軍事基地の建設や軍事同盟への参加なども、すべて禁止される。

そして、この協定成立から二年後の一九五六年七月に国際委員会の監視のもとに南北統一のための総選挙が行われ、そのための交渉が一九五五年七月から南北ベトナムの代表者の間で進められる」という内容のものであり、アメリカ帝國主義がこの協定を踏みにじり、軍事顧問団を送り込み、ゴ・ディン・ジエム傀儡政權の手を通して、あらゆる人民の闘いに大量投獄。虐殺をもって圧殺し、南ベトナムの植民地支配体制をつくりあげたということ、を、「スタ」つまりベトナム労働党を先頭とするベトナム人民が、帝國主義者と妥協して南ベトナムの独立を容認したかのように、そしてその南ベトナムの防衛のためにアメリカの「軍事侵略」があるというように歪曲している点である。たしかにジュネーヴ協定は、平和共存路線による帝國主義への過少評価に基いて、南ベトナム人民の武装を解除してしまうことを意味するのであり、事実、アメリカ帝國主義の反革命的介入によって、南ベト

ナム人民の闘いは大きな打撃をうけたのである。しかし、このことによつて、アメリカ帝国主義の南ベトナムの侵略と植民地支配は少しも容認されないし、まして、ゴ・ディン・ジエム政権及びそれ以後の南ベトナム政権が独立国家であることは証明されないことは明白だろう。

にもかかわらず「反共自由主義イデオロギー」を理念とするボナパルチスト権力として南ベトナム国家権力が形成された」（解放二三八号）のであり、アメリカ帝国主義とは「従属的な同盟関係」にあると強弁するのである。

南ベトナム政権が、アメリカ帝国主義の膨大な経済援助と軍事力によつてのみ維持されている事実は、ニクソンでさえ「チュニ政権への援助をやめるわけにはいかない。われわれがチュニ政権を見放せば、南ベトナムは共産主義者に乗つとられることになる」と告白する通りである。「トラのオリ」などと呼ばれる政治犯の収容所だけでなく、まさに解放勢力と物理的に切断するための農民の強制収容所にはかならない「戦略村」、また都市における巨大な軍事警察機構、まさに南ベトナム全体を一個の「強制収容所」と化すことによつて、それも、都市とそれらを結ぶ道路の周辺地区という「一点と線」だけをからも維持しているにすぎない。

そこには「反共自由主義」のひとかけらもない。南ベトナムにおいて弾圧の対象となつてゐるのは共産主義者だけであろうか。ブルジョア的にしろ言論・集会・結社

等々の自由が仮にも認められてゐるだろうか。すべて否である。例えば、ゴ・ディン・ジエムの出した一〇・五九法令は「破壊活動防止」と称して、闘う人民を正規の裁判なしに軍事法廷で死刑を宣告することのできるものであり、これによつて多くの活動家が虐殺されていったのである。チュニ政権下でも、チュニ政権に反対するすべての反政府運動の活動家を「ベトコン狩り」と称して大量に投獄し虐殺してゐるのである。それは六八年から七〇年五月までなんと四万六千人以上を逮捕し、二万人以上を虐殺したという。

このような事態を背景とした、昨年の大統領選挙ほど「茶番劇」という言葉がぴったりするものはない。アメリカ政府・大使館・CIA等々の強力な後押しによつて、最初からチュニの「当選」が決定されており、そのゆえに、グエン・カオ・キでさえ立候補をとりやめ、しかも人民に銃をもつて投票にかりだす、そして予定どおり、チュニの圧倒的多数の信任。これこそ、チュニ政権が、アメリカ帝国主義に依存する全くの傀儡政権であることを示すものである。そしてチュニもまた、アメリカ帝国主義の利害のためにはいつでも見捨てられるだろう。かつて、ゴ・ディン・ジエムがそうであつたように。

ここでも革マルは、事実の偽造者である。だが問題なのは、チュニ政権はボナパルチスト権力と云ふことによつてアメリカ帝国主義のベトナムに対する侵略と植民地的支配を隠蔽している点にある。たしかに革マル派

は「軍事戦略」とか「侵略戦争」という言葉を使つてゐる。しかし、それには次のような注釈がついてゐるのである。

「南ベトナムについては、帝国主義者に隷属させられた古典的植民地とか、帝国主義の新植民地主義が完全に貫徹された結果としての半植民地、あるいは一定に貫徹されてゐるものとしての後進国という諸範疇のように植民地主義との関係から論ずるのは一面的である。帝国主義の盟主としての米帝の対スターリニスト圏戦略体制との関係において論じられなければならない。スターリニスト圏の形成という条件に規定され、スターリニスト圏の動向を措定した米帝の侵略策動は、したがつて古典的帝国主義の植民地主義的侵略とは区別されなければならない」（解放二三六号）

たしかに、「古典的侵略」、すなわち民族ブルをも圧殺し、併合や軍事的支配をも貫徹せんとするような侵略、植民地支配と現代の、民族ブルジョアを買収することに、形式的に「民族の独立」を認め、「経済援助」を通して搾取と収奪を行うという「新植民地主義」との区別はなされなければならない。だが、革マルの言う区別は、そのような帝国主義の本質とも言うべき

侵略と対スターリニスト圏に対する圧力としての「侵略」を区別する、いや、実は前者を後者にすりかへることによつて侵略を否定するのである。「二〇世紀の怪物」ニスターリニズムはここでも超歴史的、超階級的存在として登場

し、アメリカ帝国主義を助けるのである。

ベトナム戦争の勃発は、スタの攻勢によつてスタ圏の分裂にくさびをうちこむはずの南ベトナム「反共」軍事政権が危機に陥り、それを援助するためにアメリカ帝国主義が「軍事侵略」を行うことによるものだ、と云うのである。そしてまた逆に「中ソの対立」とベトナムのスターリニストによつてベトナム戦争は「終結」させられようとしている。帝国主義者によつて、また同時に革マル派にとつて「スタ」は思いのままに利用される。このような論理的破綻を「ベトナム・スターリニスト」と「ベトナム人民」を使いわけることによつて、からも阻止してゐるにすぎないのである。「南ベトナム」「反共」軍事政権の崩壊的危機や、アメリカ帝国主義者の危機をもたらずの「ベトナム人民の闘い」、逆に、アメリカ帝国主義の戦争拡大をもたらすのは「スターリニスト」と云うように。

このような二元論については次章で詳しく論ずるとして、問題は革マル派のこのようなベトナム戦争に対する把握は、帝国主義の強盗の論理と一致しているという点にある。例えば、佐藤榮作はどのようにニクソンを擁護するだろうか。

「ベトナム紛争はなぜ起つたか。これは申すまでもなく、ベトナムの北からの侵透、これに対して南ベトナムが独立を守りたい、この立場において自衛的な紛争。たかいたかが展開された。かように私は理解しておりますが、

その自衛的な立場に立った南ベトナムが自国の独立を守るためにアメリカに援助をもとめておる……したがって私は（アメリカが）内政干渉したとか、あるいは（ベトナムの）主権を侵害したとか、かようには考えておりません」（一九六七年、衆院外務委）

何とも、まあ見事に一致していることか、革マル派の論理が、アメリカ帝国主義を讚美し、チュー政権に救いの手をさしのべることを、実質的に意味するものでしかないことは一目瞭然である。

「アメリカ帝国主義とその手先たちはわが国を意識的に分裂させてきたが、かれらはベトナムの国はひとつ、ベトナム民族はひとつ、という真理を變えることはできない」（四月十五日、南ベトナム解放民族戦線中央委員会、南ベトナム共和臨時革命政府アピール）

それは、アメリカ帝国主義のニクソン、ドクトリンと、その主要な軸たる「ベトナム化政策」に對する、革マルの評価を見れば、いよいよ明白である。

革マル派によると「ベトナム化政策」の内容は、①米軍の段階的撤退とサイゴン軍への肩代り ②ベトナム戦争のパリ会談における政治的收拾 ③南ベトナムⅡ「反共のとりで」の防衛であり、「停戦・撤兵後の南ベトナムの将来を決定する自由選挙を運営する機関」。その最低線は「中立政権」であると言う。ここでは簡単な事実を示すだけで十分である。まず①に關して、「段階的撤退し、サイゴン軍と肩代り」をするのに米軍ではなくて、

その一部は米地上軍であって、米空軍、海軍は逆に強化され、機動戦型反革命体制として再編強化され、ジョンソン時代をはるかに上廻る大量爆撃が行われている事実である。②に關しては、パリ会談を拒否し、大量爆撃によって、ベトナム人民を屈服させようとしているのはアメリカ帝国主義であり、「ベトナム戦争の政治的收拾」とはアメリカ帝国主義が七項目提案をのみ、全米軍をインドシナから撤退させることによってのみありうるという事実である。③に關して、全く米軍撤退が実現するかのよう美化しているのが、さらにアメリカ帝国主義者が「自由選挙」「中立政権」を保障するかのよう描きだしているが、ニクソンが彼の「八項目提案」において主張しているのは「国際監視下での選挙」であり、すなわち、あくまでアメリカ帝国主義はベトナムに介入せんとする立場を崩していないのである。

このように革マルが美化する「ベトナム化」政策なるものの具体的内容は、①米地上軍の縮小と、機動戦型反革命体制の構築によって、常時の総力の大量投入を可能とする ②米空軍、海軍による、大量爆撃を中心とする支援体制の強化 ③チュー政権、とくにサイゴン軍の飛躍的強化、以上であり、それはベトナム—インドシナ人民の不屈の闘いによって「ドル危機」や「反戦闘争の激化が生みだされ、手直しを余儀なくされたものであるが、それは決して侵略反革命戦争の縮小ではなく、新たな形態による侵略反革命を継続、いや拡大するものとし

であるのだ。一九七一年三月の「ラオス侵攻作戦」や、最近の大量・無差別爆撃による「皆殺し作戦」をみれば、明らかではないだろうか。いやニクソン自身、米軍を完全撤退するなど口にも出したことはないのだ。七十一年の外交教書でも「米軍がただちに撤収し、南ベトナム国民の自主的行動にまかせることはアメリカにとって災厄な道である」と断言しているのである。

### 3 3 ベトナム—インドシナ革命戦争に敵対する革マル派

革マル派の「スターリニスト万能論」による帝国主義の免罪、危機の解決、及びプロレタリアート人民の去勢化、それからくる現代過渡期世界の反動的永遠的固定化、つまり、「スタ」が存在するかぎり「没落」しようとして「激動」しようとはかく永遠に続く「帝とスタに分割された現代世界の悲劇」のくりかえし（また、そうであることによつて革マル派の存在も永遠に保障されるという、もちろんはかない願望）——このような世界観がベトナムにおいては、アメリカ帝国主義の侵略戦争・民族抑圧を免罪し、南ベトナムを独立国家とする「二つのベトナム」論として、また、アメリカ帝国主義は「スタ」との相互闘着のかけひきを行いながら、アメリカ軍を完全撤退させ、ベトナム戦争の收拾をはかるという、アメリカ

帝国主義の「ベトナム化」政策讚美論としてあらわれたが、次にもう一つの側面、「スタ」の歪曲によるベトナム人民の闘いの去勢化、結局ベトナム革命戦争の否定もしくは敗北論としてあらわれるのである。つまり、ベトナムにおいても「ベトナム・スターリニスト」を超階級的・超歴史的に把握し、ベトナム人民を「スタ」と「一般民衆」とに分離し、「一般民衆」は闘っているが「スタ」が民族主義的に歪曲し、アメリカ帝国主義と妥協しようとしている、あるいは、ベトナムの「スタ」が一時的に攻勢にでても、中・ソの「スタ」の内部的対立や「対米接近」で結局、話については、ベトナム戦争は收拾される。そしてやはり「現代世界の悲劇」はくりかえされるといふものなのである。

例えば、解放二三八号の次のような分析を見よ。「ベトナムの民族解放戦線・民族民主平和連合は大約三つの層からなっているといえるであろう。第一に農民、一般民衆、第二に民族ブルジョアジー・インテリゲンツィア、第三にスターリニスト」この分析は、明らかに政治的潮流によるのではなく、階級もしくは階層による区分を示している。「スタ」が超階級的に措置されていることは明白ではないか。さすがに革マル派は「スタ」が「ヘゲモニーを握っている」と認めざるをえない。というよりそれを超歴史的に、その根柢を問うことなく「スタのヘゲモニー」を規定することにより実際ベトナム人民の民族解放—革命戦争を

のものを否定しようとするのである。(恐らく彼らは、プロレタリアが少数しか存在しないこと「資本主義の未発達性、その「悲劇」の根拠を求めざるをえない。今、引用した部分で、プロレタリアートが解放戦線、民族民主平和連合に含まれていないのは、そのことを言外に言いたいらしい)

このように「スタ」が指定されるや否や、たちまち革マル派の「反帝。反スタ」世界観に合わせて、その万端の力を発揮する。それは次の通りである。

① 人民は「燃えあがる反米感情と民族意識をバネにたたかぬいて」いるが、「スタ」がいるために「当面の反米帝。反チュ」闘争は当然民族主義的に歪曲され、ベトナム解放闘争は反米帝に重点をおいた民族解放戦争としてたたかわれることになり、「反戦。反米帝のたたかいはプロレタリア的におし進め、まさにこの闘いの力によって同時にボナバルチスト権力を打倒していく展望は、完全に彼岸化されている」

② ベトナム人民の大攻勢は、「スタ」による軍事的なアメリカ帝国主義との「相互隔離」であり、「破綻した『人民戦争』」の技術主義的対応にすぎない。

③ 結局「スタ」は、「七項目提案」「民族和解政府方式」というアメリカ軍の完全撤退をとりつけるための譲歩、妥協、かけひきを行おうとしており、アメリカ帝国主義は「名譽ある撤退」を行い、ベトナム戦争は終結する。

の分割」がなされ、帝国主義による民族的抑圧、併合、植民地支配が不可避的に存在するも、それを粉砕して「資本主義国家」として民族国家を形成することはほとんど不可能となる。それは植民地、半植民地国においては、ブルジョア階級の力は決定的に弱く、かつそれも帝国主義に買収されることによってますます弱められるからである。帝国主義と結びついた封建勢力の支配に抗して「耕す者に土地を」という農民の「土地革命」の要求に一切答えることができないからである。それは唯一、プロレタリアートの指導のもとに労働同盟を基礎にして、世界プロレタリア革命の一環として、つまり帝国主義心臓部のプロレタリア社会主義革命と結合することによって、帝国主義の侵略・民族的抑圧に抗し、帝国主義と結合した封建勢力を粉砕して「土地革命」を推進し、農村を根拠地とした革命戦争によって、民族解放は闘いとられ、しかもそのことによって、資本主義的国家の形成とはならず、社会主義革命へと連続的に発展するのである。また帝国主義心臓部のプロレタリア革命もあらゆる排外主義と闘い、植民地・半植民地国の民族解放闘争と結合することによって勝利は可能となるのである。

こうしたことを一切理解できない革マル派は、現実の帝国主義の民族的抑圧下にあっても「民族自決権にふまえることから出発しながらそれをのりこえていく」「インターナショナルリズムに立つてプロレタリア的に変革する」というように、意識変革の民族意識の否定を要求す

まさに、ここで革マル派は、その正体をさらけだしてしまうことになるのだ。それを順次、検討していこう。

まず、第一点は反米帝の民族解放の否定である。革マル派が、「民族主義的歪曲」の根拠として「ベトナム。スターリニスト」が「民族自決権を原理とし、原則にまつりあげ」「しかもそれを革命の第一段階(民族民主主義革命)として固定化している」(「解放」二三八号)からだとしている。

ところで革マル派は民族自決権を次のように理解する。「民族自決権は、産業資本主義段階においてその行使によってブルジョアの民族国家を形成する。そうしたブルジョアの権利にはかならない」

どうやら彼らは自決権を、資本主義国家を形成する権利、というように理解しているらしい。これはとんでもない誤りである。

「民族自決権は、政治上の意味での独立権、抑圧民族から自由に政治的に分離する権利をもつばら意味するのである」(レーニン「社会主義革命と民族自決権」)

もちろん、それがブルジョアの権利、つまりブルジョア民主主義的権利であるというの当然である。すなわち資本主義的経済体制と少しも矛盾せず、それを強化する、という意味において「ブルジョアの」なのであり、資本主義国家を形成することを即意味するのではない。なるほど産業資本主義段階においては十分その可能性はあるが、しかし帝国主義段階において「列強による世界

るのである。すなわち、それは被抑圧民族に帝国主義の民族抑圧という現実を忘れる、という要求にほかならない。

それは抑圧民族のプロレタリアートと被抑圧民族のプロレタリアートの任務を同一視するものであり、排外主義への屈服である。実践的には、それは植民地国においてもプロレタリアートの増大の資本主義の発達を要求するものとなり、結局は植民地・半植民地国では革命はすべきでないという結論にまで至るのである。(黒田寛一の中国革命への批判を見よ！)

「スタ」が民族自決を革命の第一段階(民族民主主義革命)として固定化しているというのも嘘である。ベトナム労働党、レ・ズアンは次のように述べている。「民族民主革命を完成させるため、南部の同胞と肩をならべてたたかいたが、わが北部の人民は党の指導のもとに、フランス植民地主義者に対する抵抗闘争の勝利のあと、すでに一九五四年から社会主義建設にとりかかった。これは党の最初の綱領の厳格な実践であり、われわれの時代における民族解放運動の抗しがたい傾向——民族民主革命が資本主義的発展の段階をとびこえて社会主義革命に直接的にすすむ——と一致するものであった。これは、民族解放の事業の完全勝利、真の独立、さらには帝国主義と植民地主義のかせのため遅れた状態にとどめおかれた人民の唯一の道であった。

過去一〇年以上にわたってつづいている社会主義革命

は、まだほんの初歩的成果をあげたにすぎない。しかし、これらの成果は、それにもかかわらずじょうに重要であることに変わりはない。そうした成果は、政治、経済、社会、文化のあらゆる分野において北部の様相を根本的に一変したし、また一変しつつあり、国全体をとおして民族民主革命を完成させるより強力な基地へと北部を転化させた。社会主義を建設し、アメリカ帝国主義の破壊戦争を完全に失敗させ、抗米救国のためたかかう大前線にとつての大後方の任務を果たしながら、わが人民はわれわれの時代のもっとも偉大な真実、すなわち現代において民族独立、民主主義、および社会主義は不可分であるとの真実を生き生きと実証している」(「ベトナム革命の基本問題と主要な任務」)

ベトナム労働党の強固な指導のもとにベトナム人民の民族解放—革命戦争によつて解放されたベトナム北部は、果して、「民族民主主義革命に固定化」され「ブルジョア的的民族国家」が形成されたらどうか。否である。北ベトナムが、ベトナム革命戦争の後方として、最も巨大な「解放区」「根拠地」としてあるという事実は誰も否定できない。つまりベトナム民族解放戦争は、北ベトナムを最大のひとつとする解放区という「赤色政権」と、南ベトナムの都市及びその周辺、道路を掌握しているチヌー政権、アメリカ帝国主義の支配する「白色政権」との革命戦争として、勝利的に遂行されているのである。中国革命の最も大きな特徴の一つである、「農村」を

根拠地とする革命戦争は、より端的にベトナム革命戦争において表現されている。ところで、同じ半植民地、植民地国でありながらベトナムと中国(毛沢東「赤色」)政権はなぜ存在することができるのか(に示された諸条件では次の決定的な差違が存在する。その一つは、中国は単一の国家権力によつて統轄されていたのではなく、各国帝国主義、及びそれと結びついていたのでなく、各国し、かつそれらが互いに抗争していた(抗日戦争の時代においても、日帝はアメリカ帝国主義、及びそれと結合した蒋介石政権とも闘っていた)が、ベトナムにおいては、アメリカ帝国主義という、史上最強の帝国主義を敵としていること、二つ目は、中国が広大な国土をもっていたのに対し、ベトナムは小国であること、である。

しかし、まず、最初の弱点を補うものとして、戦後の「労働者国家」の群としての成立、特に中国革命戦争の勝利によつて、中国が「大後方」としての位置と任務を担っていること、第二の弱点を補うものとして、人民の創意工夫による遊撃戦争、及びラオス・カンボジアにおける国際根拠地、三国人民の反米帝民族解放武装勢力による単一の戦線の構築があるといえるだろう。(この意味においても、ベトナム・インドシナ革命戦争は中国革命戦争の直接の継承者である)

革マル派はこうした事実を、南ベトナムを独立国家と規定する「二つのベトナム」論によつて、いさゝい隠蔽しているのである。そして再びスタを持ちだすことによ

って次のようにアメリカ帝国主義の民族抑圧を弁護し否定する。

「そしてこの『民族的抑圧』として映ずる現実の背後には、つぎのような問題がある。すなわち、対スターリニスト圏の前線に位置する『反共国家』として米帝によつて育成され、その国家権力は法的・形式的には独立しているとはいえずその発動は米帝によつて完全に規制されているばかりか、その国家意志までも規制されている南ベトナム—さらには対スターリニスト圏アジア軍事戦略体制の崩壊の危機をのりきるための米帝の軍事侵略に全面的にさらされてきた南ベトナムの特殊性という問題にはかならない」(「解放」二二六号)

そして「米帝の軍事侵略を規定する対スターリニスト圏軍事侵略を暴露することを通じて」、反戦・反米帝闘争は展開されなければならないと、主張するのである。これは明らかに「アメリカだけが悪いのではなく、このような防衛戦争を引き起こした、北ベトナムの武力侵入がもっとも悪い」とする反動的ブルジョアジーの主張する論理と同一なのである。(ブルジョア商業新聞でさえ、こうした見解はとれないのである)このような論理で行われる「反戦・反米闘争」なるものは、革命戦争反対を意味する小ブル的平和「闘争」でしかないことは誰の目にも明らかではないだろうか。

さて、第二点目、人民戦争≡革命戦争そのものの否定である。彼らは、今なお果敢に闘われているベトナム人

民の大攻勢を次のように理解する。

「解放」二二六号によると、それは、「ベトナム。スターリニスト」の「テト攻勢」≡「人民戦争」路線の破壊を「技術主義的」にのりきろうとする「反プロレタリア的模索」であり、「カンボジア侵攻以来の一時的なカンボジア、聖域、からの後退—「ベトナム化」計画の一環である「解放区」「競合地区」への政府軍の「平定作戦」」によつて追いつめられ、さらに「ニクソンの悪命策動に対し陣営をなさず分極化するスターリニスト陣営がこぞつて屈服する動きに直面させられ」「北ベトナムの『社会主義建設』の混沌と疲弊」を打開するため民族和解政府方式」という「『人民戦争』の軍事的成果を背景に米帝の『名譽ある撤退』を迫る」ための、アメリカ帝国主義との「相互隣着的な軍事・政治攻勢」だと言うのである。まさに、アメリカ帝国主義の「ベトナム化」政策—ニクソン・ドクトリンが着々と成果を収めつつあるとしているのだ。ところが「解放」二二四号は次のように述べている。重複するが再度引用しよう。

「『ベトナム化』政策にもとづいた米軍の南ベトナムからの段階的撤退とサイゴン軍への肩代り、これを前提にしたパリ「和平会談」でのベトナム戦争の政治的収拾、このようなプランにもとづいて米帝は敗退したベトナム侵略の『名譽ある解決』の道を確保しようとしてきた。しかしこのようなプランはハノイの三月攻勢のまえにサイゴン軍の脆弱性が一挙に露呈することによつて、また

パリ「和平会談」で「七項目提案」をゴリ押しするハノイの強硬な態度とによって、その現実的破綻をつきつけられたのであった」

矛盾しているようにみえるが革マル派にとってはそうではない。アメリカ帝国主義の「ベトナム化」政策の破綻は、実は一時的なものにすぎない。なぜなら、アメリカ帝国主義が「米中接近・米ソ会談を通じた中・ソスターリニスト官僚へのはたらきかけ」や「スターリニスト陣営の内部分裂と無力化をみすかし」た「新たな侵略拡大」(いずれも二三四号)によって、たちまち「ベトナム・スターリニスト」は屈服してしまうのだから。まさにアメリカ帝国主義は偉大である。ニクソンもこれほど自慢はしないだろう。

そして解放二三六号の「南ベトナム政権の崩壊的危機」と標題された第二章は驚くべきことに内容は正反対、すなわち「北ベトナム。解放戦線の軍事的強圧や」「『平定計画』が崩壊しつつある」が南ベトナム政権は「崩壊的危機」でもなんでもないのである。それは「軍事ポナパルチスト権力」の危機でなく、チュウ政権の危機、それも地主階級と民族ブルの「非常大権」をめぐるくいちがいや、「プロレタリア層」を政府軍に投入しすぎた、その反撥による動揺程度なのである。(「非常大権法案」はチュウ政権の現に実行している警察・軍隊による反革命弾圧体制、強制的な戦争動員体制の法的表現に合理化にすぎず、チュウ政権の危機とはそのような点にあるの

争を計画的に組織し、系統的に実践することを否定し、改良の量的拡大や、単なる意識の変革に「共産主義者」の量的拡大に解消するのである。革マル派の「自己増殖運動」の犯罪性は明らかである。それを植民地・半植民地圏に適用するならば、「武装した反革命」に帝国主義軍隊に対して、人民の全くの武装解除を意味するだけでなく、帝国主義の民族的抑圧を粉砕し民族解放を闘いとる任務を否定し、帝国主義者の反人民性を免罪することになるのだから。しかし、帝国主義心臓部において、階級闘争の平和的、合法的段階ではその犯罪性は隠蔽されざるをえない。

つまり、ブルジョアジーは国家権力を通じてプロレタリアートを暴力的に支配し資本主義的奴隷制を維持している、という暴力的階級支配が、労働力が商品化され、個々の資本家と労働者との間の貨幣(商品交換)関係として隠蔽されている以上、さらにプロレタリアートの一部が、帝国主義の超過利潤によって買収されている場合においては、それを質定的にはあれ(改良主義)否定的にはあれ(経済主義)合理化する思想ほど、ブルジョアジーにとって都合のよいものはないからである。つまり、ここにこそ革マル派が日帝心臓部に存在する根拠があるのだ。

革マル派のベトナム革命戦争に対する態度ほど、日帝心臓部の反動的平和こそ、彼らのぞむものだということを暴露するものはない。

ではなく、ベトナム人民の大攻勢によって都市部をアメリカ帝国主義の軍事力に頼って暴力的に制圧することでも余命を保っていたが、それさえ危うくなり、ますますアメリカ軍への依存を強め、さらに反人民的な弾圧に狂奔せざるをえなくなっており、それはまさにチュウ政権の「ベトナム化」政策——ニクソン・ドクトリンの破産の直接的表現にほかならないのだ)

また、テト攻勢直後の一九六八年においては、「ベトナム人民軍によるテト大攻勢が敢行され帝国主義軍隊はこれに根本的に敗北した」(日本の反スタ運動 2)と言いつつ、もう忘れた頃と判断したのか、テト攻勢は失敗、「人民戦争」路線の破綻などと言いだしている。

そして、革マル派は「人民戦争」路線が思想的にも組織的にも温存し固定化せざるをえない小ブルジョアの眼界を前面化させた必然的な破綻」と決めつけている。ここにあるわれているのは、植民地・半植民地圏における民族解放闘争が、農民の「土地革命」と結合した、革命戦争(人民戦争)として展開されることが理解できないだけでなく、都市部における反帝民族解放と無縁なプロレタリアートの意識の変革という合法主義者、経済主義者ぶりを全面的に暴露しているのである。経済主義とは単に政治闘争を否定するのではなく、社会主義革命への結節環たる政治的課題(帝国主義心臓部においては、「蜂起——労働者権力樹立」植民地・半植民地圏においては「反帝国主義・民族解放」)に向けて政治闘争、経済闘

争を計画的に組織し、系統的に実践することを否定し、改良の量的拡大や、単なる意識の変革に「共産主義者」の量的拡大に解消するのである。革マル派の「自己増殖運動」の犯罪性は明らかである。それを植民地・半植民地圏に適用するならば、「武装した反革命」に帝国主義軍隊に対して、人民の全くの武装解除を意味するだけでなく、帝国主義の民族的抑圧を粉砕し民族解放を闘いとる任務を否定し、帝国主義者の反人民性を免罪することになるのだから。しかし、帝国主義心臓部において、階級闘争の平和的、合法的段階ではその犯罪性は隠蔽されざるをえない。

つまり、ブルジョアジーは国家権力を通じてプロレタリアートを暴力的に支配し資本主義的奴隷制を維持している、という暴力的階級支配が、労働力が商品化され、個々の資本家と労働者との間の貨幣(商品交換)関係として隠蔽されている以上、さらにプロレタリアートの一部が、帝国主義の超過利潤によって買収されている場合においては、それを質定的にはあれ(改良主義)否定的にはあれ(経済主義)合理化する思想ほど、ブルジョアジーにとって都合のよいものはないからである。つまり、ここにこそ革マル派が日帝心臓部に存在する根拠があるのだ。

革マル派のベトナム革命戦争に対する態度ほど、日帝心臓部の反動的平和こそ、彼らのぞむものだということを暴露するものはない。

この七項目（二項目明確化）提案こそ、ベトナム戦争を平和的な手段で解決する唯一の道であり、「真の独立と平和のためにたたかう全ベトナム人民の意思をあらわしてあり、また、アメリカと世界の諸国民の平和への熱望にも合致するものである」（ベトナム民主共和国政府声明七二年二月五日）

「もしアメリカ政府が、ベトナム問題の平和的解決を欲するならば、アメリカ政府は、以上のべた二つの問題を基点として七項目提案にこたえなければならぬ」（ベトナム民主共和国臨時革命政府声明七二年二月二日）

しかし、七項目提案の実現は、侵略者アメリカ帝国主義を放逐し民族解放を実現するというベトナム革命戦争の勝利の表現であり、アメリカ帝国主義のベトナムの植民地支配の喪失だけでなく、アジア反革命支配体制の軍事的拠点の喪失、瓦解、及び「ベトナム化」政策を根幹とするニクソン・ドクトリンの破産崩壊を意味するのであり、アメリカ帝国主義の「死の苦悶」を一層激化し、没落へと加速させるものとしてあるのだ。そうであるがゆえにアメリカ帝国主義——ニクソンは、七項目提案に一切答えることができず、パリ会談を放棄し「皆殺し作戦」。機雷封鎖によって侵略反革命戦争をさらに拡大しつつ、他方、欺瞞的な「八項目提案」なるものによって、「平和」を望んでいるかのように見せようとしているのだ。それでは、先の二つの基本点について、ニクソン「八項目提案」はどのように答えているであろうか。

労働者人民の広範な反米感情をばナショナリズムの立場から固定化させることなく、インターナショナリズムに立ってプロレタリア的に変革しつつ、米帝の軍事侵略を規定する対スターリニスト圍軍事侵略を暴露することを通じて反戦・反米帝闘争へと労働者人民を広範に組織化し、まさにこの力をもって同時にボナパルチスト権力を打倒する——南北ベトナムの革命的統一をもめざしつつ……」（「解放」二三六号）

このように革マルの言う「ベトナム問題の革命的解決の展望」はまさに、ベトナム革命戦争への公然たる敵対を宣言するものなのだ。

それは実際には次のことを意味する。

「米帝のベトナム侵略、カイトイ政権の米帝にあやつられた戦争の遂行というこの現実への対応は『民族独立』という侵略者米帝をたたきだし民族解放を闘いとリプロレタリア革命へ前進するという任務にまで高められることなく実現されねばならない。労働者・人民の広範な反米感情をば、そのような国際主義的立場に高めることなく、帝国主義の民族的抑圧を隠蔽しつつ、米帝の軍事侵略は実は中国を大後方とした「北ベトナム」や解放戦線などの「スタ」の「武力侵入」や「人民戦争」に対して、南ベトナムの独立を守るためであるかのように宣伝することを通じて、ベトナム人民に武器を捨てるように呼びかける小ブル的平和「闘争」に労働者・農民を広範に組織化し、まさにこの力をもって同時に、ボナパルチスト

第一の点については「合意後六ヶ月以内のアメリカ軍の撤退であり、第二の点については「合意後六ヶ月以内の国際的な管理の下での大統領選挙」である。つまり、「合意後六ヶ月」であるからアメリカ軍はまだ存在しており、かつ「国際的な管理の下」での「大統領選挙」が昨年のチー一人の大統領選挙の茶番の再現になることは誰にでもわかることである。そして、このような「合意」はほかならぬベトナム人民がチュー政権、及びアメリカ帝国主義に屈服して、民族解放革命戦争を放棄することを意味しており、それより「六カ月後の撤退」を約束するというのは、実際、ベトナム人民の革命戦争が続くかぎり、アメリカ軍がベトナムを占領し続けることを意味するのである。つまり、ニクソンの八項目提案とは、侵略反革命戦争のさらなる拡大を隠蔽するためのものにすぎないのである。

にもかかわらず、革マル派はこのニクソン提案が、アメリカ軍の完全撤退、南ベトナムの中立、自由選挙を約束しているかのように描きだしているのだ。しかも、それを臨時革命政府の七項目提案と同一であるかのような宣伝こそ、アメリカ帝国主義の侵略反革命戦争の拡大を弁護し、容認し、ベトナム人民の民族解放革命戦争に敵対するものであると、断言しなければならぬ。

「米帝の軍事侵略、ボナパルチスト権力の米帝に規制された戦争政策の遂行というこの現実への対応は『民族独立』に固定化されることなく実現されなければならぬ

権力を擁護する——ベトナム革命戦争の根拠地「北ベトナム」をも粉碎しつつ……」

#### 4 日帝心臓部の反動的平和を願望する革マル派

アメリカ帝国主義を讚美し、チュー政権を擁護し、ベトナム革命戦争に敵対するものでしかない革マル派の「ベトナム解放闘争」なるものからくる「ベトナム反戦闘争」がどのような「闘い」となるかは、すでに想像がつくが、それを革マル派自身の言葉で確認していこう。

「解放」二三八号によると「日本におけるベトナム反戦闘争の任務」とは次のとおりである。

- (1) 「米帝の軍事支配」及び「スターリニストのヘゲモニーのもとにある」ベトナム人民の「苦悶」を「うけとめ」「主体的に自らの課題とする」ことが出発点
- (2) 「スターリニストの主導権下でたたかい続けるベトナム人民と呼応し、日本の地から米帝の軍事侵略に反対し、それを阻止していくたたかいをつくりだしていくこと」
- (3) 「その過程で中ソの反プロレタリア的に対応をも暴露し」「文字通り国際主義にのっとったプロレタリア的反撃を日本の地から組織し、これを基礎にこのたたかいを国際的に拡大し、もって米中ソの結託による第





「死の宣告」を与えるものであり、そうであるがゆえに日本帝国主義は、アメリカ帝国主義との反革命をより侵略的かつ反革命的に強化しつつ、アジアへの侵略反革命戦争へ向けて、まっしぐらに突進せざるをえず、その最初の突破口として、自衛隊の沖繩派兵——沖繩の侵略、反革命前線基地化があるということを全く理解できず、「日本国憲法第九条によって自衛隊の海外派兵ができず、またそれだけの軍力を保有してはいないから」（「日本の反スタ運動 3」）、「参戦国化以外のあらゆる形態での侵略加担にいま狂奔している」と単に「米極東軍事戦略体制」にくみこまれてから反対というものでしかないのだ。かつ、彼らがベトナム反戦闘争と結合せんとしている彼らの沖繩闘争を見るならば、

「核基地つき、自由使用」という形態で沖繩返還が実現され安保条約の適用下にくみこまれるならば、それは必然的に同時に、本土への核もちこみや本土からの米軍の自由出動を合法化することとなり、かつ「日米共同作戦」地域も拡大されることとなる」（「共産主義者」二六号）などと沖繩返還を、安保条約の実質的強化するための口実という程度にしか理解されず、結局、沖繩闘争は、「反基地」闘争の、それも改良闘争に矮小化されてしまうのだ。

日本帝国主義が、アメリカ帝国主義と反革命同盟を強化しつつ、その世界支配体制の下でのみ、アジアにおける侵略、反革命を延命の道としていることを、そしてそ

ロレタリアート人民の国際主義的任務を鮮明にすることができるのである。

革マル派の「ベトナム反戦闘争」はこのような任務を否定し、「大切なことは、現代世界のこの激動と冷静に対決し、これを変革しうる革命主体の創造」をめざして「不断に場所的闘争である」と（「共産主義者」二六号）革マルの自己増殖運動を擁護、かつ保障するために、ベトナム革命戦争と日帝心臓部のプロレタリアート人民の闘いとを結合することを恐れ、その「城内平和」をまもるといふきわめて反動的・小ブル的平和闘争を意味しているのである。

以上にわたって、われわれは革マル派のベトナム革命戦争に対する歪曲・敵対をあばくことを通じて、彼らの「反帝・反スタ」世界観及び戦略の正体を暴いてきた。すなわちそれは「スターリニズム」を超歴史・超階級的な「怪物」へ祭りあげ、それに万能の力を与え、つまり帝国主義の侵略・民族的抑圧を「対スタ」圏として免罪し、かつ、帝国主義の危機が「スタの内部分裂と屈服」によって解決してしまうかのように描き、「帝とスタの相互依存と相互反撥」によって現代世界が「激動」しつつも永遠に「悲劇」をくりかえすという観念的世界観であり、それは、現代過渡期世界を突破する、新たな世界革命の波を否定し、それと日帝心臓部の階級闘争が結合することを阻止せんとするものであり、かつ革マル派の

れが、アジア人民の巨大な反帝統一戦線への「死の飛躍」であることを隠蔽し、日帝が「米極東軍事戦略」の一翼を担うことによって「帝国主義者としての未来が約束」（「解放」二三四号）されるかのように革マル派が描いていることこそ、たとえ「新植民地主義的侵略」と言おうとも、日帝の侵略・反革命を否定もしくは弁護するものなのである。

それゆえ、ベトナム革命戦争が革命戦争たることを否定せんとする彼らにとっては必然的ではあるが、ベトナム反戦闘争を、ベトナム革命戦争と日帝心臓部の階級闘争を結合する環として闘うのではなく、逆にそれを阻止し、日帝心臓部での反動的平和を弱々しく願望することしか意味しないのである。

ベトナム反戦闘争とは、アメリカ帝国主義の侵略反革命戦争に反対し、ベトナム人民の民族解放——革命戦争をとくに「七項目提案」を断固支持するものでなければならぬ。そのような立場に立つてはじめて、日本帝国主義のアメリカ帝国主義の侵略反革命戦争への加担・協力こそ、再度のアジアへの侵略反革命戦争へ進みつつある日本帝国主義の本質を暴くものであり、そのようなアジアへの侵略、反革命体制をめぐって熾烈化する階級攻防戦を勝利的に完遂すること、すなわち、侵略・反革命を挫折せしめ、城内平和を突破し、世界革命戦争の主戦場を日帝心臓部に切り拓き、日帝を打倒し、アメリカ帝国主義を追撃し、アジアからたたきだす、という日本ア

合法主義・自己増殖的運動・右翼日和見主義組織論を合法化するものである。

そしてまた、そのような観念的反スタ主義「スターリン主義批判」の放棄こそ、帝国主義の美化と不可分であることを明らかにしてきた。そうであるからこそ、われわれの勝ちとるべきスターリン主義の革命的批判は、世界革命の挫折のもとで延命してきた現代帝国主義批判、すなわち、世界革命の潮流をうけつぎ、今まさに世界革命戦争の最前線を築いている、旧植民地・半植民地国、とくにベトナム——インドシナ革命戦争を先頭とするアジア人民の反帝統一戦線に代えた、日帝心臓部での、内乱と革命戦争を準備し、計画する任務、代々木共産党に代わる新たなボルシェヴィキ党へと血肉化しなければならぬのである。

そしてまた、そのような闘いを勝ちとるべく誕生し、苦闘してきた日本革命的左翼の十数年の歴史と、その任務がまさに前人未踏の闘いであるがゆえに混乱し混迷している現在、日本プロレタリアート・人民が勝ちとった「蜂起の萌芽」「内乱の端緒」たる激闘の総括を通じて突破しなければならぬ任務として存在しているということをも深く刻みつけねばならないのである。

革マル派のまさにベトナム人民に敵対する「ベトナム反戦闘争」や、代々木「共産党」の唯一自らの「真の国政革新」をめざすなどという議会主義ぶりを隠蔽するための「インドシナ人民支援闘争」と訣別した、新たな世

界革命の波にベトナム。インドシナ戦争を支援し、結合した国際主義的なベトナム反戦闘争こそ、今、火急の間を求めている。五月二十八日、南ベトナム共和臨時革命政府外相グエン・チ・ビン女史は次のように語っている。「日本政府は、沖縄は返還されたと主張しているが、沖縄はベトナム以外で最大のベトナム侵略のための米軍基地であるという状態は変わっていない。このことは、法蔵が、米国の広島原爆以上の惨禍を及ぼしているベトナムにおける重大な戦争エスカレーションに加担していることを意味し、その責任は重大だ。」

より以上に、日本プロレタリアート人民。日本革命的左翼の責任は重大であるといわねばならない。日本革命的左翼の飛躍をかけてアメリカ帝国主義——ニクソンの残忍な大量爆撃による「皆殺し作戦」。機雷による海上封鎖を糾弾し、ベトナム人民の英雄的闘いを支援し、「七項目提案」を断固支持し、かつ、日帝の戦争加担を阻止するベトナム反戦闘争を直ちに組織し、アジアへの侵略——反革命戦争への第一歩たる沖縄への自衛隊派兵を阻止する闘争と固く結合し、日帝打倒。米帝追撃へ、さらに前進しよう。

＝発売中＝

レーニン研究会政治機関誌

ボルシェヴィズム通信

5 号

主 張 米中会談をめぐる新しい世界革命の前進と日帝  
心蔵部におけるわれわれの重大な任務

論 文 プロレタリアートの階級闘争の戦術に関する覚書

1971.9.18 発行 定価 200

6 号

主 張 昨年下半期の内外情勢の特徴と沖縄・三里塚諸  
闘争の幾つかの教訓

1972.2.10 発行 定価 250

増刊号

自衛隊沖縄派兵実力阻止・天皇訪沖阻止 全国討議資料

1972.3.15 発行 定価 150

## IV 南北朝鮮共同声明とそれを支持するわれわれの基本的見解

(はじめに)

七月四日、朝鮮民主主義人民共和国と「韓国」によって、南北共同声明が発表されたことは、朝鮮人民の祖国統一、民族解放、朝鮮革命という、偉大な事業のうえで、歴史的な意味をもつものである。

それは、過去一貫して、朝鮮人民の自主的統一運動を破壊することで南部朝鮮植民地支配をほしきままにしたアメリカ帝国主義と、自らの支配の延命をはかってきた朴「政権」、また日「韓」条約以降、ますます露骨に経済的、政治的支配をおし進め、更なる支配の強化を、朴アメリカ帝国主義との結合をもってなそうとする日本帝国主義にとって、政治的破綻を意味しており、そのことにより、朝鮮人民と、これらの勢力との対決が新たな段階におし進められたからである。われわれは、ここに、この声明が、朝鮮人民が祖国統一運動として展開した闘いの成果として克ちとられたものであることを確認し、支持の態度を明らかにするとともに、新たにたらされた、朝鮮半島における階級闘争の進展に対し朝鮮人民と共に闘うべく、日本の労働者人民が担うべき任務を確定してゆく作業をなさねばならない。

われわれは、南北朝鮮共同声明に関して次のことを確認しよう。

ても買ぬかれている点である。(金日成三原則)

抗日パルチザン戦争、抗米祖国解放戦争と北部人民を指導し、以後の「社会主義国家建設」へのとりくみも、祖国統一をめどとした反米の岩として構築してきた事実と、今回の声明を通してアメリカ帝国主義のアジア支配の再編(ニクソン・ドクトリン)への野望と全面的対決へ進んでいることの中に見ることが出来る。

③

(4) われわれは、六〇年四月人民蜂起・民族解放—祖国統一運動の徹底的弾圧者として登場し(六一・五。一九軍事クーデター)以後も「勝共統一」「国連(II)アメリカ侵略軍の武力)による統一」を掲げ、自主的統一運動の弾圧者であった朴「政権」が今回の「共同声明」合意にふみきらざるをえなかった背景に、対外的・対内的な危機の深さを見てとることが出来る。

対外的には、ベトナムにおける米帝の敗北と、訪中に表われるニクソンの政策の二面性が徹底した反共を国家骨子とし、ベトナムに大量の派兵を行った朴「政権」に矛盾を集中させ、孤立させている。それとともに昨年の中国の国連復帰によってもたらされた事態は、国連での「朝鮮問題」再討議と、アルジェリアを中心とした、中国「北朝鮮」侵略者規定、「韓国」を朝鮮の唯一合法の政府とする決議等々の撤回、「朝鮮統一復興委員会」(H

① 「韓国」が朝鮮の唯一の合法政府であるという虚構をデッチあげること、国連をその道具とし、朝鮮侵略戦争(朝鮮人民にとっては祖国解放戦争)をおし進め、以後も、南部朝鮮占領を「合法化」してきたアメリカ帝国主義にとって、朝鮮民主主義人民共和国の実質的承認(六・二七米國は初めて正式名称を使用する)は朝鮮革命の承認と自から侵略者として承認することに他ならない。このことは国連における、前決議(中国、「北朝鮮」侵略者規定と国連軍の派遣決議)の撤回の可能性をますます濃くし、アメリカ帝国主義の朝鮮侵略の「合法性」を最終的にはぎとり、より直接的な対決を朝鮮人民との間にもちこむものである。

七月五日に「米國務省は「現に駐留している約四万のアメリカ軍が「韓国」に、力の立場」を与えている」として米軍撤退計画が全然ないことを再度強調している。」「(朝日新聞)というように、声明発表の翌日に出された米國務省の見解がそのことを示している。

またこのことは、ベトナムでの敗北以後、アジア人をしてアジア人と闘わしめるというニクソン・ドクトリンの実施の困難性を示してあまりあることである。

② 朝鮮民主主義人民共和国政府、朝鮮労働党の祖国統一と朝鮮革命に対する原則的な対応が、今回の声明において

NCURDの解体、外国軍隊の即時撤退を骨子とする決議の採決の可能性を現実のものとなさせ「韓国」の存在そのものの基盤をゆさぶっている。

また、このような対外的危機を背景にしつつ国内ではより非和解的な階級矛盾が激発している。ペトナム戦争への参加、「北進」政策による軍事経済の肥大化、日本アメリカ独占資本による国内経済の全面的破壊は、労働者農民の生活を、どん底におとしこめ、衛戍令、国家非常事態宣言や、国家保衛法採決にみられるように朴「政権」を追い詰め全面的対決段階に入っている。

(四) それゆえ、朴政権の「共同声明」同意は、これらの危機の一挙的出現を回避し、国内の階級支配の強化再編をはかるための時間かせぎの譲歩であることは理解できる。

声明後、統一革命党再建の名目での死刑執行が相次ぎ、その理由を「南北間の平和的統一を模索している今、国論の統一が緊急でありこれを害するような行為は厳しく罰せられねばならない」などとするところからそのことは理解できる。

(五) しかしながら、朴「政権」のこのような意図を乗りこえて、南部朝鮮の階級闘争が激化するのには必至である。

朴「政権」の統一は、この政権が外国帝国主義の結合ぬきに自立しうる要素はないが故に妥協的中間的なものとならざるをえず、もり上る南部人民の統一の要求と意

志に対して、その限界とその欺瞞性を露呈せざるをえないからである。

④

(四) 日本帝国主義は朴「政権」との癒着を深め、朝鮮民主主義人民共和国敵視と、「北進」軍事経済の中で、南部朝鮮人民からの強搾取—収奪をなしたアメリカ帝国主義に代る地位を獲得せんとしている矢前であるが故に、これらを可能にできた日「韓」条約の基礎をゆるがす、この声明は大きな動揺を与えている。南部における階級闘争の激化に対しては、日本資本の利権を守るために、より露骨な介入の可能性をもたらしている。

(五) この声明はまた、在日朝鮮人民に大きな民族の自覚を与え、祖国統一運動、ひいては民族解放運動への決起をもたらし、朝鮮民族の革命的団結へと導びいている。このことは、日本帝国主義の対外侵略と結びついた国内での民族抑圧政策に対決してゆくものであり、日「韓」条約以降の日本政府と朴「政権」による韓国籍強要をテコとした、徹底的な差別・抑圧・追放政策とに対決していくものである。一万人規模の在日朝鮮人民の支持集会在次々に開かれ、また、民団指導部の動揺にもかかわらず在日南北朝鮮の両組織の集会も開かれている。

われわれは以上のことから、この南北朝鮮共同声明が、朝鮮民族統一運動の更なる高揚をもたらし、南部朝鮮に

おける人民と帝国主義勢力との対決を激化させるとともに、また日本国内における、朝鮮人民と日本帝国主義の矛盾をより激しくさせること、朝鮮革命の現実性を近づけるとともに、また、日本帝国主義の侵略と反革命に対決すべき日本労働者階級の任務をますます重要なものとさせていることは明らかにしたと思う。

われわれは、南北朝鮮共同声明支持の立場をより鮮明にし、朝鮮人民の自主的平和的祖国統一運動を支持するとともに、在日朝鮮人民とともに、日本帝国主義の侵略と民族抑圧に抗する闘いを構築しなければならない。

- 南北朝鮮共同声明支持！ 朝鮮民族の自主的・平和的統一！ 朝鮮革命勝利！
- アメリカ帝国主義を朝鮮南部から追放せよ！ 米軍撤退・米軍基地撤去！
- 朴反共軍事「政権」打倒！
- 国家非常事態宣言、国家保衛法等によるファッショ的独裁支配粉砕！
- 反共法等による南部朝鮮人民の思想、言論、出版政治活動の自由の剝奪粉砕！
- 反共法等による死刑虐殺糾弾！
- 日本帝国主義の南部朝鮮侵略阻止！

- 日「韓」条約粉砕！ 朝鮮民主主義人民共和国即時承認！ 日本政府による朴反共軍事「政権」てこ入れ反対！
- 日本独占資本の南部朝鮮人民からの強搾取・収奪粉砕！

・ 入管体制粉碎！ 出入国法案粉碎！ 民族教育権を奪う外国人学校法案粉碎！

・ 在日朝鮮民族の団結支持！

# V 社共の加担を許さず、釣魚台（「尖閣列島」）の日本帝国主義による略奪を阻止しよう！

沖縄施政権返還を機に沖縄人民への差別、強制支配が全面化し、対立が非和解的になる一方、「沖縄は終った」のムードづくりと共に釣魚台略奪の野望が強行されんとしている。中国の領土・漁場・石油資源を自衛隊の軍事力を持って略奪する直接の侵略行為が、台湾と沖縄を結ぶ反共の、インドシナ―中国―朝鮮人民虐殺の軍事網への自衛隊の直接的のり出しが開始されたのだ。資本と国家権力のより露骨な収奪、奴隷化に対する不満、怒りを拡散させ、資本家どもの為の「国益・国防」「法と秩序」の意識の下へ労働者人民をかりたてる攻撃が強行されている。天皇訪沖の挫折をまきかえす「尖閣列島は日本のものだ」「領土を守れ」「石油を守れ」の大キャンペーンとして。

略奪と反共の、侵略・反革命の戦争の準備を奴等は急いでいる。内部に対立を持ちながらも。  
労働者の仲間たち！ 学生の諸君！ 我々と共に、釣魚台略奪阻止の旗を高く掲げよう。社共の加担を許さず略奪の野望・強盗の論理に怒りを！  
闘いをまき起せ！

1 略奪の野望を見破り怒りを組織せよ！！

釣魚台は台湾の北東一六〇キロの中国の大陸棚の先端に位置する小さな島々だが、周辺は広い大陸棚の為、豊

富な漁場として昔から現在にいたるまで中国漁民の重要な生活の場であった。又、近海を含む東海（「東シナ海」）一帯の海底油田の存在が明らかになっている。

この釣魚台の領有権を臆面もなく主張し、沖縄施政権返還を機に派兵する自衛隊の軍事力をもって略奪し、沖縄と台湾を結ぶ海底軍事ケーブルが通る軍事上の要を抑え、自衛隊の制空、制海圏を台湾のごく近く、さらには台湾海峡にまで拡張して、中国漁民を漁場から追い出し、中国人民をおどそうとする日本帝国主義のみにくい姿に我々は直面している。

さらにこの醜悪なる本性は石油資源を巡って極点に達する。六八年に一带の海底油田の存在が明らかになるや日本帝国主義は領土略奪の野望をむき出しにしてきたのだ。

十五年戦争といわれる中国への侵略戦争に突入し、日本人を殺りくの戦争へとかかりたててあり、さらに中国東アジアをめぐるアメリカ帝国主義との強盗戦争へと戦火を拡大した時、日本帝国主義が、まっさきにマラヤ、ヴェトナム、インドネシア等の大油田をその血に汚れた手中を収めようと南進したことを思いおこさねばならぬ。

今、アメリカ帝国主義の「ドルと核の傘」の下で復活した日本帝国主義も、九九%を輸入にたより原油の確保に略奪には血まなこになっているのだ。  
あの悪名高い「マラッカ海峡防衛論」に侵略——反革命

つかわれ、しぼりとられ、中国人民の正当な抗議・要求と闘いの矢おもてに立たされることを拒否しよう。庄殺者、略奪者として動員されることを拒否しよう。

「本土」——沖縄の人民は、ここで団結を強化しよう

## 2 強盗の準備を許さないぞ！！

この釣魚台の領有権を臆面もなく主張する日本帝国主義の権力者どもは「根拠」とは何か。

佐藤政府は、二月八日、「外務省の統一見解を発表し、「日本固有の領土であることは疑いがない」と反論を加えた。この見解によると、(1)尖閣列島は明治二十八年一月に、日本領土に編入する閣議決定をした。

(2)同二八年五月の下関条約で清国から割譲を受けた台湾及び澎湖諸島には、尖閣列島は含まれていない。(3)サンフランシスコ平和条約でもわが国が放棄した領土の中には含まれず、第三条によってアメリカの施政権下におかれ、これが沖縄返還協定によって、そのまま返還されることになった——としている（3/23読売）

盗人たけだけしいとはこのことだ。  
奴等が(1)、(2)でぬけぬけと主張していることは、戦争と略奪の論理だ。

「明治二十八年一月」とはどんな時期だったのか。一八

の軍事をマラッカにまで拡張しようとする策謀や、インドネシア、ヴェトナム、「中近東」の油田へと延びている日本帝国主義のどす黒い手を見よ。この手が、日「華」日「華」協力委八佐藤と朴、蔣の結託、日本帝国主義の中国、朝鮮への侵略——反革命の推進機関を母体とした「三国民間共同開発委」という姿をとって釣魚台に延びているのだ。

マスコミは声をそろえて「尖閣列島は日本のものだ」と略奪と排外主義、反中国の大キャンペーンをはっており、社会党、代々木「共産党」も全面的に加担している。このキャンペーン攻撃は「尖閣列島を守るのだ」と自衛隊の沖縄派兵を合理化し、沖縄人民の日本軍上陸阻止の闘いを思想的に解体しようとするものだ。同時に中国共産党、中国政府の積極外交の展開で守勢に立たされた日本帝国主義が「日中平和共存」ムードをおおる二面政策をとりつつ反中国策動を一举に拡大するものなのだ。

沖縄ではまかれていた「国益擁護」論に「尖閣列島開発」のバラ色の未来像も「本土」資本の導入と系列化、海洋開発を中心においた基地産業の育成以外の何ものでもなく、沖縄人民を基地の下に苛酷に縛りつけ、アジアへの侵略——反革命にまっさきにかかりたてんとする日本帝国主義の排外主義の攻撃の思うつぼなのだ。

我々は、中国人民の漁場を奪い、石油を奪い、領土を奪い取る日本の支配階級どもの野望を決して許さない。支配者どもを肥えふとらせるためにかり出され、こき

九四年（明治二十七年）七月、もっとも狂暴な帝国主義に成長してきた日本は朝鮮、台湾の支配権を手中におさめアジアを全面的に、じゅうりんする足がかりを略奪せんと、当時中国人民を支配していた清王朝に対して宣戦布告なき強盗戦争の戦火を開いていった。日本軍は清軍を打ち破り、台湾を占領し、中国人民、朝鮮人民を蹂躪していった。この侵略戦争の真只中で、閣議決定された、領土の編入、とは何を意味するのか。略奪である。台湾出兵、琉球処分から台湾植民地化の過程で釣魚台は略奪されたのだ。

奴等が(3)で主張していることは、上まえをはねられていた強盗が山分けにあずかった時の論理だ。

サンフランシスコ条約の規定は、単独講和に強盗どものとりひきの産物であり、日本帝国主義の侵略とかぎりない暴虐をうけ、これと闘い、打ち破った中国人民の要求と一切無縁な所で決定されたものである。この規定をもって中国人民から略奪してきた釣魚台を日本の領土などと言うことはできないのだ。

勝ち残ったアメリカ帝国主義と生きのこった日本。支配者どもが結託し、過去の略奪を正当化し、中国人民の要求をふみにじって、釣魚台を米軍の制圧下、「日本の潜在主権下」に奪い去ったのである。これが現実だ。

この徹底した強盗の論理をもって日本の労働者人民をかりたて、日本帝国主義は中国人民との再度の激突に足を踏みこもうとしている。

史上最強を誇ったアメリカ帝国主義の敗勢・帝国主義世界支配の没落のはじまりの中で、安保——日米同盟をより侵略的、反革命的により強化し、日本帝国主義が前進するインドシナ——中国——朝鮮の革命闘争のまっただ中に主要な敵の一つとしておどろ出んとする構図がここに擬縮されている。

一切の強盗の論理を許さず、釣魚台の略奪を阻止しよう。

### 3 領土略奪に加担する社共は強盗の仲間にと転落した!!

「尖閣列島が日本の領土であることをもっと広く国民に理解してもらわねば……」（福田外相）という政府の意図を受けて、御用新聞、マスコミどもは朝日、毎日の社説にみられるように強盗の論理、排外主義、反中国の大合唱を行っている。「統一と団結」のスローガンの裏で、労働者の闘いと団結の強化を妨害し、労働者の代表のような顔をしている社会党、代々木「共産党」が、この問題に対してどのような態度をとったのか。奴等は、「尖閣列島が日本の領土であることは疑いない」と、万国の労働者階級、被抑圧民族の団結を破壊し、日中国人民の間に分裂を持ち込み、日本の労働者人民を腐敗させ、日本帝国主義の資本家ども、支配者どもと「団結」して

しまったのだ。奴等は領土略奪に加担することによって「日中友好」「インドシナ人民支援」と口さきでおおいかくしてきた、その本性をますますあらわにし、強盗どもの仲間へとまっしぐらに転落していったのである。

代々木「共産党」はハレンチにも「赤旗」紙上で政府のキャンペーンに手をかし、こともあろうに中国を「社会植民地主義」だとわめきちらし、反中国のキャンペーンの最先頭に立っている。「赤旗」紙上の論理は政府・強盗どもの論理と全く同一であり、ごていねいに「尖閣列島の領有の明確化は、日清両国の支配層が朝鮮支配をめぐって争った日清戦争（一八九四—五）と時期的に重なっていた」（三月三十一日）と説明している。ここで代々木は「釣魚台は『無地主』であったので先に占有しただけであり略奪ではない」と言っている。「無地主」の「先占」だって？ 帝国主義の世界分割の論理ではないか。「先占」されたアフリカ各地は住民が生活する「無地主」だったんだそうだ。釣魚台は、日清戦争以前も断じて「無地主」ではなかった。中国漁民の生活の場であり、中国の領土であったことが示している。明、清王朝の文献も日本の文献もそのことを示している。

この見解の中に現在はもちろんのこと戦前、共産党がそれと闘い敗北した「侵略」の現実が一片も出てこないのは奴等の墮落の深さを示している。

領土略奪への加担、これは、帝国主義との和解を求め、学園においては闘う学生を権力に告訴し、言論、出版の

自由を売り渡し（京大新聞、京大出版会への処罰の要請）人民が資本家ども、支配者どもの暴虐に対して武器をもって立ち上ることに敵対し（火炎ビン処罰法への積極的賛成）てきた奴等の行きつく先なのだ。

強盗どもの仲間へ転落した社共の腐敗をなげくのはよそう。

### 4 中国人民と連帯し、沖縄人民とともに釣魚台略奪を阻止しよう!!

我々は略奪を阻止するためにプロレタリア人民の最先端にたつて闘い抜いていかなければならない。

奴隷のごとくこき使い、肥えふとっていく資本家どもに、差別をもちこみ生活を破壊する支配者どもに、反動と侵略と戦争準備の暴挙を続けてきた佐藤政府にかぎりない怒りを持つ労働者のみなさん。

支配者どもの有能で柔順な手先へとしたてあげられていくことを拒否し、労働者人民と共に闘いに立ち上った学生諸君。日本帝国主義による釣魚台略奪の野望に対し、台湾の漁民は怒りの闘いを開始している。中国共産党と政府は、中国人民を代表し、非難の声明を発表し、闘いを開始している。アメリカ、香港、フィリピン等々に住む中国人民は抗議の闘いに立ち上った。朝鮮人民と共和国政府は日本政府を非難している。在米中国人民の闘い

に黒人団体が連帯を表明している。

全中国の労働者階級、被抑圧民族と団結し、在日中国人民の闘いと連帯して、闘いを強化しよう。沖縄人民と団結し、派兵阻止闘争と結合して闘おう。

在日中国人、朝鮮人に対して、就職差別、福祉行政等における差別を加え、政治活動、生活と権利を闘い取る活動を入管令、外登法を軸に圧殺している日本帝国主義は、本格的にアジアにのり出すにあたって、更にこれを強化せんとしている。出入国法案である。われわれは侵略と略奪を許さず、これにかり出されない立場を貫き、この法案を葬り去らねばならない。

5/6、7北熊本で切り拓かれた派兵阻止闘争の突破口に続き日帝による釣魚台略奪を阻止しよう!



# VI 8月公判に起ち、9月結審の策 動を打ち砕こう！

## 動揺する井波を追いつめ、差別 者に判決を出させるな！

全国の労働者・青年のみなさん！  
闘う仲間たち！

日々、職場で職制によるしめつけをはねのけ、格差査定・職階制・差別賃金・差別労務管理に対して、労働者の団結とほこりをかけて闘い続けている労働者のみなさん！

臨時工・社外工として、働く仲間から分断され、低賃金・長時間労働、保障なし、いつでも首を切られる不安定な仕事をしいられていた現象。この現実に対してつもりつもつたうらみといきどおりの中から自分たちの団結の力で生活を闘いとうとうとしている労働者のみなさん！

低賃金と物価高（政府はまた公共料金を大巾に上げようとしている）で共稼ぎをしい、低賃金で不安定な仕事をおしつけ、さらに労働基準法の改悪で母性保護規定（生理休暇・出産休暇など）を骨ぬきにする事によって（これには優性保護法改悪Ⅱ中絶禁止立法化もからんでいる）、結婚↓退職↓パートの道をしい、そしてパートの悪い現実を合理化する。この生活破壊と分断支配の攻撃に対し、団結して差別賃金を許さず、生休・産休・保育所をかちとる闘いに起ち上った婦人労働者のみなさん！

ピンハネ。使い捨ての危険な重労働に対して、安全と生活を闘いとるべく団結して起ち上った出稼ぎ、日雇労働者のみなさん！

1 差別を許さず労働者の団結と力を強めよう！

資本金・支配者どもは、労働者の中にさまざまな差別と分断を持ちこみ、ひとにぎりの上層の部分を買収することによって、労働者の怒りをたぶらかし、力を拡散させ、団結をさまたげています。このことによつて奴等は、労働者をこき使ひ、しぼり取り、やりたいほうだいに労働者を支配する力を守り、強めようとしています。

国家権力・国営暴力団の力を背景としながら、そして、労働者・人民の意識を資本金どもの利益でまとめアジアへの侵略・反革命にかりたてようとしているのです。全国にちらばっている（関西地方が中心）六千部落・三百万人の被差別部落の人々に対する差別と偏見は、この労働者の中に持ちこまれ、存在している差別のもつとも重大なものひとつです。

六〇万在日朝鮮人・五万在日中国人や「復帰合理化」生活破壊によって大巾に増えつつある在「本土」沖繩人に対する差別と偏見もそうです。

資本金どものこの武器を奪い、労働者の団結と力を強める闘いを押し進めようではありませんか。

2 支配者どもは部落差別で無実の石川青年を殺そうとしている！

現在、部落の青年・石川一雄君は、無実の罪で10年もの間拘留所につながれています。さらに、東京高等裁判所は、この秋彼に死刑の判決を下し、殺そうとしています。これが、支配者ども・警察・検察・裁判所の悪らつな部落差別であり、労働者・市民の部落民に対する差別的偏見と予断を利用した差別事件、差別裁判であることを明らかにして、この差別裁判を糾弾し、石川君を取り戻す闘いへの結集を訴えます。

3 差別的偏見と予断による不当逮捕

昭和38年5月、埼玉県狭山市で女子高校生、中田善枝さんが行方不明となり、家には身代金を要求する脅迫状がとどけられました。警察は、犯人を40人でとりかこみながらとり逃し、これに対して非難がおこり、善枝さんが死体となって発見されるや、それは大きな世論になりました。ちょうど、この年の3月には吉展ちゃん事件がおこり、警察は同じように犯人を目の前にしながらとりにがしていたのです。

この世論に対し、日本の支配者は、警察庁長官を事実上クビにしたばかりでなく、国会でも取り上げ、生きた犯人をとらえることを至上命令としました。

こんな場合、警察が使う手はひれつて見えすいています。「本部は地元の前科者や素行不良者をシラミつぶしに調べ上

る」と、差別によって教育・就職の機会を奪われ、不安定な職を転々とせざるをえない部落の青年に目をつけ、人々の注意を向けさせました。一方近くの部落の豚屋からスコップの紛失届を出させ、その石田豚屋に入入りしていた者を中心に部落の青年に対する集中的な見込捜査を行ったのです。石川君はこれの中で、ささいなことを理由に別件で捕えられました。

どの新聞もその日から石川君を犯人あつかいにし、地元の「埼玉新聞」は、石川君の出身部落を「特殊地帯」と書き、「悪の温床」ときめつけ、石川君が部落民であるからこのような犯罪を犯したのだといわんばかりの主張をのせたのです。「底知れず不気味な石川、善枝ちゃん殺し／ホッとした地元、捜査の苦勞実りそう……」目の前にいたとは、／恐ろしさに絶句する村人たち(朝日)等はまだおとなしい方なのです。

この許すことのできない差別宣伝は警察がねらったところでした。部落民ならどんな悪いことでもやりかねないという差別観念は、人々の心を強くとらえています。従って証拠不十分であっても、部落民だというだけで犯人だという先入観を持ってしまふのです。現に、最初は捜査に協力しなかった近所の人たちが、部落に対する差別的な偏見と予断にもとづいた見込み捜査をはじめるとともに、協力するようになってきたのです。

見られるように、裁判所ははじめから捜査当局とグルになつて石川君を犯人にしたてあげたのです。このことは、半年というスピード裁判の過程と判決文にみられる部落民に対する差別的偏見と予断にもみられます。

弁護団は証拠のひとつひとつを取上げ、デッチ上げを明らかにしたにもかかわらず、浦和地裁の内田裁判長は弁護団の提出した証拠を全くとり上げず、検察側の証拠もろくに調べもしないで、「自白」を唯一の材料として、しゃにむに死刑判決を強行したのです。

このような法廷指揮は、まさに差別裁判長内田が石川君をはじめから「犯人」あつかいしていることであり、あきらかに部落に対する差別的偏見と予断をもっていることを証明しています。

また、判決文においても、犯行の「残忍さ」を強調しておいて、「別件」をひきあいに出し、石川君を「反社会的な不良」としてえがきだし、それを彼の生いたち・環境に部落と結びつけています。

このような考え方にもとづいたスピード判決は、事実をきちんと調べたものではなく、石川君を「犯人」にしたてあげた差別裁判にはかなりません。

### 6 あきらかになる権力の差別と石川君の無実

昭和39年9月の第二審のはじめに、「おれは殺していない」と叫んでから8年間、石川君は真実のため闘ってきました。

### 4 差別で教育を奪われた石川君に、デマと拷問でウソの「自白」をデッチ上る。

警察は攻めたてれば吐く式の野蛮なやり口で石川君を攻め上げました。拘留期限の延長をくり返し、いったん釈放後、即時逮捕し、川越警分室という密室にとじこめ、食わせず寝かせず休ませずの苛酷な拷問を加えたのです。そして、石川君が差別の結果教育すら奪われ(小学5年で中退)初歩的な法知識も持たないのいいことに、デマで弁護人不信をあおり(一方で弁護人が部落差別に全く理解を持たなかったこと、その結果、石川君の精神鑑定を要求したり、石川君が無実を確信できなかったことも第一審を通じて石川君が弁護人を信用しなかったことのひとつの原因)、殺すぞと脅迫する一方で、10年を出してやるという甘いさやきをもって、ついに誘導によるウソの「自白」をデッチあげたのです。

そして、そのウソの「自白」にあわせて証拠を工作し、一人の部落の青年をついに殺人犯にしたてあげたのです。この捜査当局のやり口は差別そのものといえます。

### 5 差別的偏見と予断にみちたスピード死刑判決

別件逮捕、たびたびの拘留延長、再逮捕を認めたことに

獄中の石川君を孤立させることなく、百万人署名や真相報告会、国民大行動、そして一方では浦和地裁占拠闘争などの闘いが、権力・裁判所の差別と石川君の無実をあきらかにすべく推められてきました。

百万人署名の達成などにみられるこの闘いの前進の前に、一審の死刑判決に差別判決をうのみにして、事実も調べることなく早期に死刑判決を出そうとしていた東京高等裁判所はじりじりと追いつめられています。

たとえば、「自白」によって発見されたという時計が、実は善枝さんのものでなく、警察によってねつ造されたニセモノであることがあきらかになっています。また、死体を芋穴に逆吊りにしておいたという「自白」も事実でないことが警察医の証言でもあきらかになっています。

さらに、この4月の公判で、石川君が書いたという地図が実に警察が引いた線の上を鉛筆でなぞったものであることがバクロされ、事件当時の中田家の家族関係の冷たさ、複雑さも、善枝さんの姉の登美恵さん(身のしろ金をもって犯人とはなしている)の変死(この事件では重要な関係者が四人も変死している)をめぐってあきらかになっています。

6月の公判では、主任弁護人の証言で、面接の制限や、ニセ弁護士が「自白」をさせようとしたことなど、捜査当局が無実の石川君を「犯人」にしたてあげようとしたようすがバクロされました。そして、中田健治(兄)が一審での証言をくつがえして、重要な「物証」である万年筆・ピニールのふろしきが善枝さんのものであると断言できないといいだした

のです。

7 眞実を恐れ、結審を急ぐ差別裁判長井波

このように、公判が進むにつれ、「**「自白」**」が警察にいられたウソの「**「自白」**」であり、「**「物証」**」が警察が捏造したニセモノであることがあきらかになってきておられます。そして、権力警察、検察・裁判所が許すことのできない差別者であり、部落民に対する差別偏見と予断を利用して無実の石川君を「**「犯人」**」にしたてあげたことを、労働者、人民は少しづつ知りはじめてきています。（裁判所が「**「中立」**」のような顔をして、いつも資本家ども、支配者どもに有利なように裁判することは、あらゆる闘いの中で労働者、人民が感じとっていることですから）

これを恐れた裁判長・井波は、検察側自分たちにも有利な証言を誘導したり、石川君・弁護団の追及にたじろぐ証人に助け舟をだしたりしているのです。（たとえば昨年11月、甘言と泣きおとしでウソの「**「自白」**」をデッチアゲた関・元調査部長のひきょうなごまかしに対して石川君が「**「あなたはウソをついているのではないか」**」ときびしく追った際、動揺する関に対して「**「ウソではないと答えなさい」**」と誘導）

そしてじりじりとスケジュールを後退させつつも、11月に定年退官になるまでに判決を出し、闘いの前進をこたえていくとめようとやっきになっています。

8 解放同盟と共に差別裁判糾弾の闘いに起

と

部落解放同盟は、4月の全国婦人集会、5月の全国研究集会、6月全国青年集会をもち、7月には国民大行動（14日には大阪に到着した）を組織して、さらに部落大衆の怒りと力を結集し、公判闘争にも、三千、五千と大衆的な決起をかちとっています。

井波11月退官という焦点をむかえながらも、われわれ労働者・学生の闘いは非常にたちおくれいているといわねばなりません。

たちおくれを克服し、同盟とともに、差別裁判を徹底的に糾弾する闘いに起とうではありませんか。

差別裁判をとりけさせ、無実の石川君の即時釈放をかちとろう！

9 部落差別と闘う労働者の戦列を

解放同盟を中心とした部落大衆の行政に対するねばり強い闘い、借金をしながら、鍋・かまをたたきわって食費をこしらえ市役所に何日もすわりこんで住宅・教育・仕事を要求するといった血のにじむ闘いが続けられてきています。

それにおされた政府は、40年、部落差別をなくすことは「**「国の責務」**」であり「**「国民的課題」**」であることを明記した「**「同対答申」**」を、44年、その財政的うらづけとな

る「**「特別措置法」**」を制定しました。

現在、差別を拡大しながらも、解放運動をねむりこませようとする政府に対して、この二つを武器にした要求闘争と、その中で、差別と闘い、資本家ども、支配者どもと闘う部落の労働者・住民をつくり出し、組織する闘いを結合させて前進する方向が追求されています。

しかし、一般の労働者は、教育、マスコミ、習慣などの力によって、しらすしらすのうちに差別する側に立たされ、差別政策に利用されているのです。（三池闘争の中で炭労が解同を左翼暴力団あつかいしていたこと、解放教育と労働条件の要求を対立させた矢田教育差別事件、代々木によってもあおられている「**「部落だけがよくなる」**」という意識など）

部落差別が、部落民を死においやり、かぎりない苦しみと迫害を加えると同時に、労働者・人民を分断支配し、闘いと団結をひきまくる資本家ども、支配者どもの武器であることを本心に理解すれば、われわれは闘わないわけにはいきません。

労働者、人民が自らの力と団結で生活を闘いととり、資本家ども、支配者どもを打ち倒すために、あらゆる抑圧された人たちの利益を代表し新しい社会の主人公になるために、部落大衆の闘いに連帯し、部落差別と闘う労働者の戦列をつくり出そうではありませんか。

10 8月公判闘争に起ち、9月結審の策動を

打ち砕こう！ 動揺する井波を更に追いつめ、差別者に判決を出させるな！

6月の公判では、解放同盟の野本中央執行委員が証人として法廷に立ち、この裁判が部落差別による犯人デッチあげをゆるし、これに加担する差別裁判であることを明らかにし、検察側・差別裁判長井波を追及しました。

7月の公判で、弁護団側から、石川君の無実裁判の差別性を明らかにして、9月結審の策動はもろろん、井波が自分で判決をかくことを打ち砕く強力な証拠が提出されました。

死体の解剖、死体のそばにあった玉石、こん棒、死体を埋めたあとの残土、脅迫状と石川君が不当にも逮捕される直前に書いた上申書の比較、検討などを内容とする鑑定書はことごとく、石川君が犯人ではありえないことを証明しています。

この動かぬ証拠を提出されて検察側、井波は大あわてです。

証人として呼ばれていた筆跡鑑定人高村は、自分の鑑定に石川犯人説の有力なきめ手が実は、差別によって教育を奪われ「十分に」字をかけなかった石川君に、脅迫状を手本に字の練習をさせ、その字と手本の脅迫状を比べて似ている字を集めるといふむちゃくちゃで差別的なものであることがバクロされることを恐れて病気を理由

に逃げだしているしまつです。  
 (1)審理打ち切りに反対し、(2)警察・検察のにぎっている  
 全証拠を開示させ、(3)弁護団申請の民間証人を採用、審  
 理させ、(4)犯罪事実を構成する客観的事実を審理させる、  
 というごくあたりまえの要求が、今では、差別者井波を  
 追いつめる武器となります。

27日、解放同盟の人たち、労働者の手によって地域、  
 戦場でねばり強く集められた50万の署名が井波にたたき  
 つけられました。(一〇〇万の署名が達成されており、  
 二〇〇万署名にむけ闘いが続けられています。)

6月、7月の二度にわたって、闘う部落青年に成長し  
 た石川君から闘いのアピールがあり、元気に闘っている  
 ようすが伝えられました。

井波は、闘いの前進のまえに、どうしても調べなけれ  
 ばならないことがあれば10月まで取り調べてもよい、退  
 官後に判決を書くこともありうる、9月には十回くらい  
 公判が必要だと動揺をかくしきれず、一歩ゆずったよう  
 にみえます。しかし、これは、闘いのつまりをそらせ  
 ようとするきたない手で、追いつめられた井波はひらき  
 なおって狂暴になり、うしろにひかえているどす黒い支  
 配者どものもくろみを国営暴力団機動隊をつかってお  
 しとおそうとするにちがいありません。現に、7月には  
 傍聴団の団長を退廷にし、公判が終ったのちに総括集會  
 をおこなっていた部隊を機動隊がとりかこんで、デッチ  
 アゲ逮捕を行なうなどの弾圧をかけてきています。

油断せず、動揺する井波をさらに追いつめる闘いにた  
 ち、無実の石川君を今すぐとりもどそう！  
 8月公判闘争に結集しよう！

8月26日・29日、東京高裁前・小日比谷公園へ結集しよ  
 う！

狭山差別裁判徹底糾弾、石川青年即時奪還の叫びで東京  
 高裁をゆるがそう！  
 差別裁判取り消し、無実の石川君即時釈放の要求を井波  
 にたたきつけよう！

9月結審策動を打ち砕き、井波に判決を出させるな！  
 公正裁判を要求する！

### 1 事実を直視することから始めよ！！

今、われわれは、信じられない程悲痛な事件を受けと  
 っている。それは、連合赤軍指導部による十四人の戦士  
 に対する血の粛清事件である。

ブルジョア国家権力は、この事件を知るや、手をうっ  
 て狂喜し、絶好の機会とばかりに、彼等の腰巾着ども、  
 ブルジョア学者、評論家どもを総動員して、又悪辣なマ  
 スコミ操作を行ない、事実を歪曲し、「革命と無関係の  
 犯罪者集団、連合赤軍、過激派」等々がなりたて、そ  
 して、連合赤軍の戦士達のあの銃撃戦の意義の枉殺、革  
 命的左翼の政治的孤立化、それへの一層の大弾圧を画策  
 している。

しかも、日和見主義者どもも、警察、マスコミの反動  
 キャンペーンに口車をあわせ、おのれの「身の潔白」を  
 国家権力に証明するためにやっきになっている。

そして一方、真にプロレタリア解放を志す戦闘的労働  
 者、活動家たちは、この悲惨な事件を知って、驚き動転  
 し、意気消沈している。

確かに、この瞬間、われわれの全戦線で、漠然とした  
 戦慄と動揺が支配していることはまぎれもない事実だ。

われわれは、無念にも、警察報道、ブルジョア・マス  
 コミ以外の手段で、この事件に関する信頼するにたる詳  
 細な事実関係を未だ完全には入手しえていない。

## VII 「連合赤軍粛清事件」に対して、 真の共産主義者のとるべき態度 とは何か

だが、三月八日森恒夫の前橋裁判所あて上申書が警察の手を経てではあるが既に公表され、一定の事実が否定できないものとなっている現在、この「粛清」問題について、真の共産主義者のとるべき態度とは何か、それは、今日の日本共産主義運動、われわれの闘いにとって何を意味しているのか、そして、先進的労働者、活動家がひるまず断固進撃すべき道とは何か、を明示することは、われわれの緊急の責務となっている。

われわれは、この問題について「困ったことだ」とし、事件の本質を何ら切開せず、「人の噂も……」に任せては絶対にならない。

この事件に「ほうかむり」的態度をとるもの、或いは、没主体的におのれの彼岸に片付けるもの、こうした連中は、必らずや、将来の日本階級闘争の厳しい現実によって、しつぱ返しをくらうに違いない。

権力の非道な弾圧に屈することなく、極寒の山岳で革命への情熱を燃し続けた若き戦士達の文字通りの悪戦苦闘の足跡——この悲惨な事件を直視し、その本質に肉迫し、わが日本共産主義運動に孕まれた危機の最も集中的表現として自己切開し、労働者階級解放の未来のための教訓とすること、これは、新左翼運動の真の革命主体への飛躍を闘いとらんとするわれわれにとって避けて通れぬ課題である。

わが会は、二月二十二日東京、京都での連合赤軍統撃戦連体集會や『ボル通三月臨時増刊号』で、革命的プロ

レタリアートは、権力の反革命攻勢の下で、銃撃戦を断固支持すべきであること、だが同時に、連合赤軍の路線上の軍事観念論は、団結——批判——団結の原則で厳しく批判し、それを教訓化し、乗り越えて進撃すべきであることを訴えたが、この事件についても何ら躊躇することなく、事実を直視し、「反面教師」として教訓化する姿勢が貫かれねばならない。

## 2 権力・その腰巾着、日和見主義の反動大合唱と闘い、革命的左翼の赤旗をふれ!!

われわれは、「粛清事件」を検討する際、次の三つの扱い方に反対し、闘わねばならない。

第一は、当然のことだが、この事件を「戦士達は一体何の目的のために身を挺して苦闘したのか」という問題と切断して扱うこと。

あくまで「重要なのは、革命の問題であり、革命の思想であり、革命の目的であり、革命の感情であり、革命の質なのだ」(カストロ)

闘う労働者は、現在の警察、マスコミによる戦士達の目的、理想を歪め、無視した全ての報道、革命的左翼への無制限の弾圧を準備するためのキャンペーンを糾弾し、それと闘う必要がある。

敵は、ありもしない多くの事実を捏造し、一つ一つの報道に彼らの革命運動への嘲笑と憎悪を含めている。

例えば警察の執念深い演技はこうだ。

遺体をすでに発見していながら、或る遺体だけをわざわざ埋めておいて、翌日記者団を呼び寄せてから掘り返して見せるといったやり口である。

又、梅内恒夫も処刑されると報道しながら、事実とは違っていたことや、又補導され山岳アジト発見の糸口となつたという中村愛子の抱いていた子供は、「森恒夫の子供」として最初報道されたにもかかわらず、事実は山本順一の子供であったこと、こうしたことをとりあげてみるだけでも、どれだけこの数週間うちにデマ報道がなされているか推測がつく。

敵は、おのれの卑劣な女性観、金錢観等の価値観にのつとつてことさら「男女関係」「金錢関係」の問題をと

りあげ事件を獵奇化し、「もはや革命と無縁の狂気の犯罪者集団」ときめつけ「過激派」恐怖心を煽りたて、労働者人民と革命的左翼を分裂させ、両者を対立させんとしているのは明白であり、われわれは、かかる敵の攻撃に断固たる反撃を組織しなければならぬ。

更に、見過してならないのは、この事件について、階級協調の道たる小ブル的絶対平和主義の態度を示した社会党は当然としても、代々木「共産党」の態度である。

代々木「共産党」は連日にわたって「赤旗」紙上で、ブルジョア新聞以上の一大反動キャンペーンを始めた。

その許すべからざる反動性はまず「毛沢東盲従暴力集団を糾弾する」「海越えてそそのかす」「中国の干渉者は『人民戦争万能』論を日本共産党に押しつけようとして失敗すると、日本共産党を、議会主義、修正主義と攻撃してきた。山口県の福田一派や、盲従分子は、それに迎合して日本共産党攻撃に浮身をやつした。その結果が『連合赤軍』へと発展していった」(三月十四日「赤旗」)というように代々木「共産党」は、「自主独立論」でもって、プロレタリア国際主義の原則を、各国共産党、共産主義者の相互干渉にまで墮落させただけでは飽き足らず、現在日本帝國主義者ですら手控えざるをえなくなっている「反中国キャンペーン」を披瀝し、排外主義、反革命イデオロギーを播き散らしていることである。

その反動性はさらに、暴力一般が、必然的に連合赤軍、粛清問題のごとき事態を招来させると主張することによ

ア、人民の武装、革命的暴力に反対し事実上、現在のブルジョア独裁、ブルジョア暴力を承認していることである。先進的労働者人民の武装解除を勧うことで今日の事件を論評する日和見主義者とも断固闘わねばならない。

おれわれの反対する第二の態度は、「肅清事件」を、良心的犯罪であれ、悪意あるものであれ、××病、集団ヒステリーと規定し、純粋心理学的生理学的事象に解消してしまふ態度である。

これは、或る人間の「死」の主體的客體的意味を問う際、「生命活動の停止」という答えが全く無意味であるのと同様だ。この事件の政治的社会的本質を解明するものではない。

最後に、自己の日和見主義を暴露した新左翼諸党派の「もっともらしい」態度にも反対し、闘う必要がある。

即ち、連合赤軍「肅清」問題は、「武装蜂起思想集団の行きつく先を自己暴滅したもの……わが反スターリン主義革命的左翼はかかる武装蜂起思想集団とは無縁である」(革マル派)、或いは「小ブル代行政主義」、「プチブル急進主義の破産と敗北、その戦略——戦術の目に見える公然たる破綻である」(革労協)というような単純な論評、自己の日和見主義的、合法主義的実践を全く棚にあげ、とりわけ、新左翼運動を色濃く蔽い始めている小ブル政治を一切不問にした没主体、欺瞞的論評、安易な「総路線の誤謬——肅清」の宿命論的図式である。

対立)政治、軍事路線上の対立等々と推測しうる。

革命党の団結に忍びこんだ非プロレタリア的政治は、普段さほど問題にならないものであつても、いったん、その党が國家権力との存亡を賭けた緊張関係に置かれた時、その非プロレタリア的政治は、悪魔のように成長し、その党の団結を内から喰ひ破るものである。

だから、肉体の死を日夜背に負つていた連合赤軍戦士達にとって、生活態度、活動態度の未成熟性、女性同志の問題、同志間の恋愛、子供問題等が、重大な規律維持上の困難な問題としてあつたに違いない。

しかし、勿論、かかる問題は強制や命令、処刑によつて解決されるべきものではない。

戦闘への一般的動揺にしても、人間が社会的動物であり、生まれ育つた資本制社会の環境に深く影響されているものである限り、或る人間が、数回の学習会や会議への参加、短期間の政治的実践だけで、固い意志と自己規律をもつた革命家、共產主義者に改造された等と判断する方が間違ひであり、ましてや、この事柄を不問にして、戦士の動揺を命令や強制で「解決」しようとすることは絶対に許されぬものである。

又、困難な革命運動の実践の中で生み出された同志間の信頼に立つかぎり、同志の間の階級上の対立も、強制主義で臨むべきものではない。

想定しうるいざれの事態にしても、連合赤軍内部の対立は、労働者解放の為に生涯を捧げんとした革命家、其

やはり、今回の事件は、「人民内部の矛盾の処理」の問題、革命党の党内闘争、党派闘争の問題を独自の契機として抽出し、おれわれの「作風」のあり方として主体化され、論評されるべきである。

さて、おれわれは、ブルジョア、マスコミからの報道によるが、少くとも次の事実是否定しえぬ客観的事実として認め、論を進めることにする。

第一は、十四名の戦士の「死体」の存在、  
第二は、死体の状況、二名は全身にわたる刺し傷、  
他の七名は、全身殴打、凍死、餓死の状況、

第三は、数名の連合赤軍からの離脱と自首、  
第四は、森恒夫の「上申書」、十四名の内二名は死刑、  
他七名は「総括」の際死亡、

但し、「総括」や「死刑」の理由については多かれ少かれ歪曲されて伝えられていると推測しうるので採用しない。

### 3 連合赤軍指導部、森——永田一派による「肅清」は絶望的誤まりである。

山岳の連合赤軍の規律維持上の困難は、戦士達の生活態度、活動態度上の未成熟性、「勝利の確信」が持てぬゆえの動揺、(未だ自覚的に理論化されていない路線上の

産主義者間の対立であつて、直接的、実体的な革命と反革命、裏切り者と革命家の対立ではありえず、だから当然にも、革命の同志を確実に死においやる「総括」や「死刑」は誤り、全く絶望的誤りである。

この瞬間、労働者階級が生み出している種々の階級的団結形態、その中で最高のそれとして闘いとられるべき前衛党の団結、その外的表現としての規律とは、一人一人の黨員の究極目的共産主義社会への意識性、主体性に基礎を置き、それに基づく協業におけるところの労働主体諸個人の結びつきであり、組織性としての思想的、実践的統一性のことである。

もはや今日、過去が現在を支配する資本家階級は既に、「真諦」と「変革」の旗を放棄しており、当然にもその「理論」と「実践」は分裂し、実践の指針たり得ない理論、理論の二律背反に陥ちこんでいる。

だから虚偽の理論——目的と虚偽の実践に裏打ちされた彼等の階級的諸組織、例えば資本家政党や軍隊等の人間の結びつきは、常に金権的、派閥的、なれあいの団結であり、その団結、規律維持の方法は、旧日本軍の無意味で野蛮なビンタやリンチの習慣を想起する迄もなく、例え普段は「腹芸政治」で蔽われていても、そこには強制主義と命令主義を内包しているものである。

彼等の団体の掲げる「自由」とか「平等」とか「人間性」とかいった甘ったるい「人間主義」と、「リンチ制度」とは、メダルの表と裏である。

それに対して新たな真理の代表者であり、新たな世界の創造者たる労働者階級の前衛組織の人間の結びつき——団結は、人類史上最も合目的実践的革命的実践に裏打ちされることによって、一切の資本的団結、金権的、派閥的、慣れ合い的団結や、封建的、農民的団結、例えば地縁的血縁的団結と無縁でなければならぬし、その団結——規律維持の方法は、どんなに困難な情勢でも強制主義、命令主義が採用されてはならないものである。

共産主義者、革命家たらんとする人間を常に資本主義社会は墮落させようとする——だからこそ革命党の内部では、不断に、文字通り不断に、相互批判による思想闘争を追求することによって、人間を根本的に改造し、思想的統一性（画一性ではない）を組織化し、その結びつき——団結を労働者的にし、一層強固に打ち固める必要があるのである。こうした鉄の団結こそ蜂起の党の建設と存立の当然の与件となるものである。

経済主義者や大衆運動主義者の組織が分裂を繰り返して、混沌としていく大きな原因はまさにこの事を忘れ去っているからに他ならない。

「われわれは積極的な思想闘争を主張する。なぜならそれは、党内と革命団体内の団結を達成し、それらの組織を闘争に有利なものにする武器だからである。あらゆる共産黨員、あらゆる革命家は、この武器を使わなければならない。ところが、自由主義は、思想闘争を否定し、無原則的

な平和を主張する。その結果は、頹廢した卑俗な活動状態が生まれ、党と革命団体内のある一部の組織やある一部の個人を政治的に腐敗させることになる。……革命的な集團組織内部での自由主義は、きわめて有害である。それは団結を破り、相互の結びつきを弱め、仕事を消極的にし、意見を分裂させる腐蝕剤である。それは、革命の陣列から厳密な組織と規律を奪い、政策の徹底的貫徹を不可能にし、党の組織と党の指導する大衆とのあいだにかきねをつくる。これは非常に悪い傾向である……」（毛沢東「自由主義に反対する」）

こうした見地に立って、森——永田一派による血の粛清行為とその背景にある思想的頹廢は厳しく批判されなければならない。

第一に、革命の同志の間の対立の処理の形態を、思想闘争、相互批判によらず、直接的に革命と反革命の具体的な対立の処理の形態と実質的に同一化し、多くの若い革命家をもはや二度と革命運動に参加しえぬ無原則的な、「死」の処罰をおこなったこと。

第二に、純粋に処刑方法一般だけをとり出して、森——永田一派は、プロレタリア革命勢力に絶対許されぬ腐敗しきった残酷な方法を「採用」している。

反革命の処刑でも、又、万一、過去の同志で反革命に転向した者の処刑が必要な場合でも、処刑方法は、プロレタリア革命勢力としてふさわしい規律に基いた方法が自覚的に採用されるべきである。

山崎、吉岡等に対する処刑はなぶり殺しであり、厳格な規律維持の名による最大の無規律行為であり、もはやそこでは、かつて日本軍、帝国主義者による中国民衆への「三光作戦」のやり口と根本的差異を発見し難いではないか。

第三に、森——永田一派の思想的頹廢の核心は、あれやこれやの理論の誤りに先行して、彼等が、人間を改造し、世界を改造する又必ずや改造しようという確信を完全に喪失していることであり、革命党内の同志を改造しようる確信、真のマルクス主義は必ず勝つという確信なくして、幾百万、幾千万の人間を改造し、社会主義を組織する確信は一体どこから来るのだろうか。

森——永田一派は、およそ次のようにして、善意の敷石で舗装された「地獄への道」へ迷いこんだに違いない。赤軍派、日共革命左派の各々の路線上に孕まれていた軍部の觀念性、「単なる軍事的見地」は、森——永田一派の手で、「銃のみの一致」による、即ち、革命の戦略、革命の政治を全く不問にした両組織の合同によってより一層成長した。

生死を賭した統率戦の決定、文字通り鉄の団結が不可欠、行動の一致から覚的一致への衝動とあせり、若干の戦士の徹底した主観的軍事への疑問と動揺、更にそれに赤軍派と日共革命左派の容易に止揚できぬ総路線上の対立が拍車をかける、こうした事態の中で、森——永田一派は純粋規律主義に転落していった。

一人の血の「粛清」は、団結強化に向わず逆に団結解体の方向へ、増々、恐怖政治による純粋規律主義へ！最大の無規律へ！

森の上申書はこういう。「……端緒についた革命戦争の党建設、その内実としての『共産主義化』の闘いは、敵権力に対する銃を軸としたせん滅戦以前に、我々自身に死にもの狂いの闘争を要求していた」

革命観が異なるとはいえ、ベルンシュタインの「究極目的は無、運動が全て」や黒田「党共産主義の母胎論」と酷似した「……革命戦争の党建設、その内実としての『共産主義化』の闘いは……」という主張は、労働者階級の支配階級への組織化の為の戦略——戦術と切断された軍事の自己目的化即ち軍事無政府主義が、現在の自己の実践自体に共産主義の現実化を夢見る、或いは、「集團リンチ」の悪魔的儀式自体に革命実践の存在証明を必死で獲得しようとする心理状況をもたらしていたことを物語っている。

又、「我々自身に死にもの狂いの闘争を要求していった」という森の「主体性」を装った没主体的（指導者としての）言葉は、恐怖政治による最大の無規律たる純粋規律主義の心理的背景が、「死を前にして指導者も被指導者も皆『平等』」といった極端な水平主義であったことを示していると言えるだろう。

以上の考案を前提にするなら、今回の事件は、軍事観念論が、墮落した革命的暴力を産み落し、それが連合赤軍内部の規律維持の方法、指導方法の問題に投影したと言えないことはない。

われわれは、革命の未来を切り拓く現在の階級闘争の深化、非和解的、軍事的発展を誰よりも擁護し、その為には犠牲を惜しまず闘うからこそ、逆に、誰よりも公然と最も戦闘的左翼内部の軍事問題の観念性、実践的混乱を批判してきたし、同時にそれと闘わず、軍事それ自身に腰をぬかし、実践的混乱に屈服し、革命的軍事を放棄する日和見主義、新しがりやに於いてその本質は変らぬ六十年代左翼的傾向とも闘ってきた。

もともとわれわれは、わが国の資本主義的現実に眼をかつて見開くべきである。

われわれの未だ手のとどかぬ日本中の到る所で働く人々、労働者、農民、漁民、知識人、学生達が、資本制的奴隸所有者、帝国主義者に対して、日常的に、たくましい腕を振り上げ、戦闘宣言を布告し、苦闘しているではないだろうか。

雲上の王国の「現代革命論」をこの地上に押しつける前に、まずこの資本主義が不可避に生み出す客観的現実としての階級闘争の全ての現われに注目し、それと結びつき、依拠し、その細流を大河へと組織化すること、その戦闘宣言の「真理」を党として自覚的に取り出し、学ぶこと、又、部分性そのままの階級闘争を文字通りの階級

### 4 『肅清事件』を日本共産主義運動の再生の機としよう

眼目は、連合赤軍指導部の資質に、単なるその誤りに今回の事件の原因を帰着させるところにあるのではない。最近の軍事観念論の傾向は、この数年間の日本階級闘争の深化とともにその指導部に問われた「日本革命の軍事」の課題に、真正面から答えんとし、非道な権力との格闘を通してそれを模索してきた部分の「成長に伴う病」であるが、今回の事件は考えられない程悪化していたことを明瞭に示している。

又、革命的左翼総体の作風の在り方として受けとめるならば、連合赤軍も、今日の新左翼戦線で種々の形態をとって露骨化し始めた小ブル浮動的政治、例えば暴力的党派、党内闘争主義を克服しえなかったことをも示している。

自覚せる労働者は、新左翼諸党派の先進的部分、大衆への命令主義、強制主義の態度や常態化し始めた暴力的党派闘争主義の中に、第二、第三の同志殺し、血の肅清が胚胎していることを見抜くに違いない。

わが会は、レーニンの党建設、「代行主義」は必然的にかかる事態を招来させるといったサンジカリズム的宿命論の視点とは厳格に分袂した視点から、即ち、新しい社会の経済、政治、文化、思想、倫理の組織者たる労働

の闘争、階級の戦争へと発展させるために闘うこと、これが空想的社会主義とも機械的唯物論とも異なる戦闘的唯物論としてのマルクス主義者の最も根本的な姿勢でなからうか。

ここにこそ、プロレタリア階級闘争の組織化における武装闘争、遊撃戦、武装蜂起の、一言でいえば、革命の軍事の「技術性」と「政治性」が生きづいているのではないだろうか。

注 最近、赤軍派の一部の人々が「反米愛国」とか、「人民民主主義革命」とかを唱え始めているが、この傾向は過去のわれわれの内部にあった「単純日帝自衛」や「最大限綱領主義」、「党—革命的統一戦線反帝統一戦線」の欠如といった偏向への裏返し誤謬であり、その主張は例え若干の偏向、欠陥があつたといえ六十年安保闘争以来日本階級闘争をけん引してきた革命的な共産主義運動の遺産の安易な清算であり、又、実践上、増々反代々木左翼反対派政治に戦術左翼への道を掃き清める可能性をもった傾向であるが、その詳しい批判的分析は次の機会に譲ることにする。

者階級の可能的諸力をこの現在において意識化し、現実化するものとして前衛が前衛たりうる根拠があるという視点から、自己の活動態度を規律化する闘い、小ブル的作風を克服する闘いの一環に、命令主義、強制主義、暴力的党派闘争主義の克服の課題を据え、それを、単なる革命技術の問題ではなく革命の根本的政治問題として、真の前衛党建設の一里塚として主張し、闘ってきた。われわれのこの主張と闘いを、一部の人々は「空想的だ」といった「批判」と嘲笑で迎えた。

なるほど、盲目の党派闘争の処理が習慣化し、体質化し始めた現在、革命的左翼の陣営からそれを一掃する闘いは非常に困難な任務には違いないが、しかし、根本的問題は、その現実を否定し、困難であれその克服の道、真の前衛党建設の道を歩むのか、それとも革命運動の小ブル的弱点の現実に屈服し、追従し、そして「現代過渡期世界の党派闘争」等と「理論化」し、破滅の道を歩むのかとしてある。

今日の盲目の暴力的党派闘争主義は、単に、敵を増長させ、味方の団結を弱め、闘う労働者を失望させ、「反党主義」に固定化させているだけではない。

それは恐るべき両刃の剣である。革命を反革命と、味方を敵と実体的に規定し、虚偽の「反革命」、「敵」に切りつけることによって、その反動で己れの傷を深くしていく。やがて、その剣は、人間から革命の質、革命の魂、革命の感情を奪い取るに違いない。



われわれは、肅清事件を契機とする国家権力の攻撃の洪水の中で、権力に身の潔白を証明する為に武装解除する日和見主義、又、連合赤軍肅清事件を彼岸においやりわれわれの運動の小ブル的政治、作風を不問にする新左翼の一部の傾向と闘い、革命的左翼、共産主義の赤旗を断固守りぬき、労働者人民の真に進むべき道を明示しなければならぬ。わが共産主義運動のみずみずしいと同時に未熟だった幼年期の政治は、現在の階級闘争の底部でまぎれもなく「左翼小児病」へと転化した。

肅清事件を反面教師とし、墮落した暴力、強制主義、命令主義、暴力的党派闘争主義等一切の小ブル的病いその根源から自己切開し、日本共産主義運動を再生させよう！

プロレタリア前衛の真の前衛としての活動態度を自己反省し、規律化し、革命的無私の立場から、全ての真面目な革命家、共産主義者、マルクス主義者と団結し、日本革命を勝利に導く真の革命党を組織する道へ！

マルクス主義で武装した我々の軍隊を工場、職場を基礎に全人民の中に配置し、労働者階級を一層強め、不転の階級闘争の組織化をもって、画策されつつある日米反革命同盟の新たな段階の下での日本帝国主義のアジメ侵略。反革命を粉砕せよ！

あれやこれやの革命の近道論の幻想を排して帝国主義権力の正規の攻囲を！

アジア人民の解放の闘いの声に心え、必らずや、日本プロレタリアートは、今日の不和と不信、幻滅と悲劇をものともせず、しっかりと大地に足を据え、世界史の舞台にその巨大な偉体を登場させるだろう。

最後に、われわれは、もはや革命生活に参与しえぬ四名の若きプロレタリア兵士の革命意志に敬意を表し、心から追悼の意を表します。

### 一、 昨年の三里塚の闘い

一九七一年は三里塚にとつて未曾有の闘いの年であった。一期工事阻止の戦いとして三里塚の六年間の闘いの前半戦の決算であった。昨年一年の闘いの中で三里塚の闘いは拡がり深まりを獲得し、帝国主義権力と対決する戦列の最前線としての位置を不動のものとした。

帝国主義権力のあらゆる武器―法・金銭・暴力―にも屈せず六年間闘い抜いてきた三里塚農民の闘いは、資本と権力の抑圧、暴虐の下であえいている全国の人民を限りなく勇気づけた。全国あらゆる所で、基地・公害企業原子力発電所・ゴミ焼却場反対運動として、土地の強奪と生活環境の破壊に対する人民の反乱がわき上っている。三里塚の周辺でも、燃料パイプライン敷設、成田新幹線建設等に反対する運動が起り、三里塚農民だけの闘いから、周辺そして全国の労働者人民の闘いへとその輪を広げている。昨年三月の第一次強制収用の際に三里塚に登場し機動隊を包囲した「群集」はその具体的な現われであった。そして現在同盟が行なっている岩山大鉄塔一〇万人共有化運動は三里塚闘争の広がりを更に押し進めるものに他ならない。

しかしわれわれが昨年の三里塚の闘いの中で注目しなければならぬのは、その闘いの広がりよりもむしろそ

## Ⅷ 三里塚闘争と革命的左翼

— 若干の総括と更なる発展への視点 —

### 三里塚取香現闘団

の深まりである。その最も先端が九月の第二次強制収用の際の東峰十字路における機動隊殲滅戦である。それは第一次の強制収用阻止斗争までの塹壕、砦死守戦の枠をこえ、外からの攻撃的闘いとして、機動隊を殲滅し乗りこえ駒井野特へと進撃し、砦死守の闘いと結合せんとしたものであった。それは武器の質からいえば以前の質を越えるものではなかったが、武装の質からいえばこれまでに勝ちとられた最高のものであった。それは帝国主義国家権力の暴力装置である機動隊を殲滅することにより、この武装闘争が労働者人民が帝国主義国家権力を打倒し、自らの武装に支えられ自らを支配階級として高める闘いの一環であることを示した。このような高みが可能であったのはこの闘いが、農民の土地生活死守の闘いと強固に結合していたからである。

その意味で九一六の機動隊殲滅戦は闘いの深さそのものではなくその現われであったといえる。九月の闘いの深さは疑いもなく、大木よねばあちゃんの闘いであった。一期工事予定地内で土地と家屋を売り渡さずに最後まで踏み止つたのは、「日本一の貧農」大木よねばあちゃんただ一人であった。「土地を守る闘い」から「土地を取られても闘い抜く闘い」への飛躍は想像を絶する程困難なものであり、小土地所有者としての農民の限界の突破を意味する。これが可能だったのはよねばあちゃんが極零細農民・農業労働者であり同時に、「戦闘宣言」にみられるように、その人生の中で類いまれな戦闘精神を身

につけ、六年間の闘いの中で打ち鍛えてきたからに他ならない。

大木よねばあちゃんに象徴される三里塚農民の土地・経営・生活を奪われても闘う闘いへの飛躍は農民運動史はもちろん日本の階級闘争においてもまれな深さである。それは現在の生活を守るのではなく未来の生活を闘い取ることであり、自覚されているかいないかに拘わらず革命が現実の問題になっていることを示している。生活のための闘いの中から革命を把みとり、しかもそれを生活の闘い、闘いの生活の中で実現していること、これが三里塚の七年の闘いが到達した深みである。これが三里塚の闘いが小土地所有者、小商品生産者としての農民の闘いであり、従って様々な限界、弱さを持ちながらそれを乗りこえて、日本階級斗争の最前線に立っている根拠的理由である。

## 二、九・一六事後弾圧の意味するもの

政治警察は昨年九一六の「三警官殺害事件」の名目で昨年十二月八日から本年八月一日まで十二次にわたりのべ百九人を逮捕し、六十六名を起訴した。政治警察は別件逮捕、二重三重逮捕、一日十・十四時間取り調べ、精神的拷問、マスコミを使つた「全面自供」デマ等々あ

りとあらゆる手段を使い、青年行動隊員、支援学生を、「犯人」としてデッチ上げようとしている。この空前の大弾圧がもはやこれが一殺害事件に対する捜査ではなく、政治警察の大謀略にもとづく革命派壊滅策であることは疑いない。

ある青年行動隊員への取り調べの中で検察官はこう言つた。「九一六は日本のベトナム戦争の始まりだから、お前を徹底的に壊すのだ。これ程階級の本能を明らかにしているものはない。要するに彼は三里塚の闘いが日本の革命の発端であると言っているのだ。確かに支配階級はどんな爆弾闘争よりも三里塚斗争の方を恐れているのだ。それは一地域の農民が生活の中で闘い、それが革命的左翼と結合し武装斗争を展開しているからに他ならない。」

一九四九年に三鷹・下山・松川事件という大謀略をし、くみ、日本共産党・朝連・産別を非合法化、壊滅し、戦後革命運動を最終的に屈服させたことを思い出さねばならない。帝国主義ブルジョアジーは九一六事件を利用して、三里塚芝山反対同盟と全ての革命派をそれによつて壊滅しようとしているのである。支配階級は、革命的左翼の限界、誤つた傾向が全面開花している現在、反対同盟を弾圧し、反対同盟と革命的左翼との結合を断ち切ることに、革命的左翼、革命派総体を壊滅させようとしているのである。この攻撃の意図を見抜き、三里塚農民との強固な結合でこれに応えねばならない。

## 三、三里塚斗争と革命的左翼

革命的左翼と三里塚との結合は一九六八年初頭から始まり現在まで五年間にわたつて続いている。それは六十八年と六十九年全国学園斗争とともに、革命的左翼が広範な人民大衆の闘いと結合しえた貴重な例である。

革命的左翼と三里塚芝山連合空港反対同盟との関係は「支援」という名の共闘としてあり、現実にはその枠を突破していない。革命的左翼が革命党として反対同盟とともにその最先端で闘い抜くと同時に、三里塚斗争を日本革命運動の一環として目的意識的に闘うということは、革命的左翼の未熟さ不充分性故に確固としては行なわれていない。

しかしながら、三里塚の農民は革命的左翼との共闘の中で多くのことを学びとり自らを鍛え上げていった。彼らは、空港公団・政府の背後に帝国主義国家権力としての本質を見抜き、それと闘うには実力を以て闘うほかにいことを学んだ。また空港建設がどういう政治的意味を持つているかを、更にベトナム人民、沖縄人民の闘いとどういよう関連にあるかを素朴にしかも正確に把握した。三里塚の闘う農民は、革命的左翼との共闘なくしてはこのような三里塚の闘いはありえなかつたことをはっきり認

めている。

しかし革命的左翼は三里塚の農民とその闘いの中から何を学びとり、そのことによつて自己をどのように変革したのか？このことは極めてあいまいにしか答えられていない。三里塚の闘いの教訓は、単に三里塚空港反対闘争という個別闘争の教訓としてではなく、日本革命運動総体の問題として教訓化されねばならない。三里塚の七年間の闘いはそれだけの内容を持つた貴重な闘いなのだ。革命的左翼が広範な人民大衆と結合して闘つたもう一つの闘い一六十八年と六十九年全国学園闘争においても革命的左翼は急進的な学生大衆の様々な誤つた傾向と闘い正しく闘いを発展させることができず敗北していつた。全共斗運動後の学生運動の混乱の中で、全共斗運動を教訓化し、その限界を克服し、その戦闘性を継承する所から、われわれの前身は出発した。

現在三里塚闘争の教訓を克ち取ることが決定的に必要なになつている。それなくして、現在一層飛躍しようとしている空港粉砕の闘いを闘い抜くことはできない。それなくしては、空港を粉砕して何を克ち取るのか——三里塚農民にとつても革命運動にとつても何が獲得されたのか鮮明にされえない。二年間にわたつて闘い、空港を粉砕しながら、その後はほとんどの人がもとの生活にかえり、三里塚の反対闘争にすら決起しようとしなない富里の農民の例を思い起さなくてはならない。全共斗運動の真摯な教訓化がわれわれを始めとするマルクス主義、ボル

つていつた部分へと分解した。

六十九年以降明きらになつてきた武装闘争をめぐる誤つた傾向は現象的には次の様なものである。軍事を自己目的化した武装闘争—軍事観念論、軍事における無政府主義—パルチザン主義、戦闘団主義、テロリズム。一撥主義への傾斜、軍事における党の役割について無自覚な暴動主義等々、このような軍事における誤つた傾向は、革命的左翼の政治総体の、その思想性の貧困、誤りの集中した現われに他ならない。

このことを端的に示したのが、昨年九・一六東峰十字路における機動隊殲滅戦であった。あの戦いは、三人の警官が死亡したから、あるいはまた、ゲリラ戦として勝利したから画期的であつたのではない。武器の質からいつても決して高くないあの闘いが武装闘争をめぐる混乱に解答を与え得たのは、武装闘争を支える政治の正しさであり、またそれを正しく体現した軍事路線であつた。

九・一六東峰十字路における闘いは、第二次強制収用阻止闘争の不可決の一環として斗われた。それは駒井野砦死守戦と結合せんとする戦いであり、大木ばあちゃん宅地と農地の取上げに対する前哨であつた。農民の土地と生活を略奪し、破壊しようとする帝国主義国家権力に対して、自らの土地と生活を守るには、帝国主義国家権力を打倒する以外にないことを自覚した農民の闘いであつた。武装蜂起は問題となつていない。また帝国主義を打倒し、それに代つて打ち建てられるべき権力と社会

シエヴィズムによる革命党をめざす部分を産みだしたのと同様に、三里塚の闘いの教訓化は労働者人民の利害を代表し、日本革命を闘いとする革命党の建設にとつて不可欠のものとなつてゐる。

#### 四、三里塚闘争の教訓

##### a 軍事路線上の教訓

昨年、武装闘争をめぐる革命的左翼の様々な混乱、誤りが全面的に開花した時に、九・一六機動隊殲滅戦はその混乱に対する実践的な解答であつた。

革命的左翼は六十七年一〇—八羽田闘争の初歩的な武装から出発し、一貫して武装闘争を維持し発展させてきた。六十八年と六十九年の過程は単に武器の向上とそれを使う人間の量的拡大だけではなく、武装の質そのものの発展を孕んでいた。それは武装闘争が単なる反対闘争、抗議闘争の戦術的にエスカレートしたものから、武装蜂起に向けた武装闘争への発展であつた。しかし六十九年四—二八そして一一—一六と国家権力の巨大な暴力装置に武装闘争が直面すると、革命的左翼は、それでもなお武装闘争を発展させようとした部分、武装闘争を放棄した部分、そしてその両者を右往左往しジグザグ路線をと

の性格も明きらかになつていない。しかし、三里塚における武装闘争とは、農民が生活と生命を賭して帝国主義国家権力と対決し、それを打倒せんとしたものであり、それは一方では地下壟壕戦として現われ、多方でゲリラ戦による機動隊殲滅戦として現われている。

九・一六の闘いから、われわれが学びとるものは何か？それは、軍事における転倒を克服することである。軍事は自己目的化されてはならないし、一人歩きさせてはならない。武装闘争によつて階級闘争が発展するのはなく、階級闘争の発展の表現として武装闘争の発展があること。観念化された武装闘争ではなく、帝国主義の控取、抑圧、反動と闘う人民の闘いと武装闘争を結合させること。

九・一六の闘いの教訓は、武装闘争の質を決定するのは武器の質ではなく、それを支える政治と人間の質であること—帝国主義国家権力と、どれ程鋭く対決し、帝国主義を打倒し労働者権力を打ち建てることに対してどれだけの意識性と現実性を持つてゐるかによつて決定されるということである。

##### b 活動態度—作風上の問題

三里塚における革命的左翼の活動には、二つの顕著な現象がある。一つはいわゆる「内ゲバ」が行われていないこと。三里塚以外の場所では暴力的党派闘争—互いに

殲滅戦にはいつている党派でも、三里塚では反対同盟の下で共闘関係にある。これは、無論一貫して「内ゲバ」を防止する努力を行なってきた反対同盟による所が大きい。

われわれは、三里塚におけるこの事態を更に対象化し教訓化しなければならぬと考える。われわれが暴力的党派斗争主義に反対するのは、それがプロレタリアート人民の利益と真に結合していない党派の利害のための党派斗争におとしこめられているからである。三里塚で諸党派が暴力的党派斗争を行ない得ないのは、それが反対同盟の信頼を失なわせ、恒常的に緊張関係にある敵一権力を利するからである。三里塚以外の学園・職場・集会所で暴力的党派斗争が行われているのは、諸党派の政治が真にプロレタリアート人民と結合しておらず、そのことにより、党派間対立・矛盾の処理の形態に関する原則が確立していないからである。

このような誤りを克服し正しい党派斗争の作風を獲得するための示唆も三里塚斗争の中に求めることができる。それは昨年七月の農民放送塔、一、二番地点収用実力阻止斗争の際の革マル派の登場である。革マル派は三里塚斗争から一貫して召還するだけでなく、三里塚斗争を誹謗し敵対してきた。ところが何を思いついたか、昨年七月突然三里塚に登場し、アリバイ的に機動隊と対面し、あげくの果には野戦病院一駒井野岩に対して暴力的敵対を行なった。これに対するわれわれの対応は、権力との

左翼の作風の上での顕著な現象であり、このような傾向は、ピラ・アジテーション・オルグ、日常生活等あらゆる活動においてもみることができ、これらのことは革命的左翼がその活動態度一作風の面では、自らの小ブル浮動的な性格を一定程度克服したことを意味する。そしてこのことは、数年間三里塚に常駐し、農民と結合して斗争中で始めて、革命的左翼が学生、先進的労働者一総じてインテリゲンチヤとしての自らの狭い基盤を乗りこえることができたことを意味している。

c 革命的左翼にとっての三里塚斗争の意義

aとbで革命的左翼が三里塚において、軍事と活動態度一作風の二つの領域においてその小ブル的インテリ性・浮動性を多少とも克服しえてきていることを述べた。このことは何によつて可能になったのであろうか？ 反対同盟の構成員は大部分が農業で生活している中農（これは日本の農民全体のごく一部）であり、他は小農・富農・商店経営者等である。従つて反対同盟は総体として小土地所有者・小商品生産者・販売者であり、その意味で小ブルジョアである。プロレタリアートでも貧農でもない三里塚の農民が、革命的左翼の小ブル性の払拭を可能にしたのはなぜであらうか？ それは、反対同盟が、

斗いの中で、革マル派の本質を暴露することであつた。革マル派は大部隊でありながら、機動隊と一度も接触することなく、遠くから石を投げ、発煙筒を投げるだけであつた。われわれはこの革マル派の横で、機動隊との熾烈な攻防を戦い、革マル派の権力に対する日和見主義を暴露した。

三里塚農民の生活と斗いを前にして、諸党派のマルクス主義的政治の原則が問われ試みされているのだ。もう一つ三里塚で注目すべき現象は、その党派が解体消滅しても、その現斗団は存続していることである。これは労働運動においても見られる現象であるが、学生運動での激しい解体消滅からすれば注目し値する。

革命的左翼は革命的なインテリゲンチヤサークルを出発の一つの基盤としたが、それゆえ一貫して学生運動を斗いの中心とする構造を克服しえなかつた。それによつて革命的左翼の作風は浮動的・主観的・観念的総じて小ブルの性格を色濃くまとい、召還主義、清算主義を招来させてきた。このような作風は革命運動の現在と未来に責任を持つ革命党のそれではありえず、現実の階級斗争と無関係な左翼インテリゲンチヤだけにありえることである。党派が解体しても三里塚の現斗団は存続するといふことは、革命的左翼が三里塚の農民と数年間ともに斗争中で自らの小ブル的な限界をわずかでも克服しえたことを示している。

これまでふれた二つの現象は三里塚に見られる革命的な小ブルでありながらその土地、小経営さえもが帝国主義国家権力によつて否定され破壊されようとするのに対して全てをかけて斗つてきたからである。共産主義者は、プロレタリアートを組織しそれに依拠しつつも、資本主義に反対する全ての勤労人民と結合しそれを指導して始めて、帝国主義国家権力の厚い壁を打ち破り、社会主義共産主義を克ち取る第一歩を始めることができるのである。従つて三里塚斗争は、革命的左翼がその誕生期の狭い枠一小ブルインテリ性を払拭し、日本の勤労人民の利害を代表し革命を実現しえる真の革命党への飛躍の第一歩だったのである。基幹産業労働者・下層労働者と革命的左翼との強固な結合はこの飛躍を完成させる絶対的の条件となるだろう。

三里塚斗争が革命的左翼にとつてもつている第一の意義が、勤労人民の闘いと強固な結合の第一歩だとすれば、第二の意義はそれが勤労人民の中でも中間階級の代表としての農民だつたことである。革命における中間階級との同盟の全問題はボルシェヴィズムの核心の一つである。そして帝国主義が腐朽と反動を強める中で、一方で二大階級への分解が阻止され隠蔽され様々な形で中間階級が残存し増加し、また一方でブルジョアジーが自らを実現した民主主義さえも自らの手で否定している現在同盟軍の問題はますます重要になってきている。

われわれはこの二つの意義を確認することが決定的に重要だと考える。そして更にこの確認にもとづいて、先

にのべた軍事と活動態度―作風上の教訓だけでなく、革命的左翼の政治総体とりわけ綱領上の教訓を克ちとることが必要だと考える。このことをなしとげないかぎりわれわれは三里塚農民との結合関係を更に一步押し進め、三里塚農民、いや全国の農民を日本革命の陣型の一翼に位置づけることはできない。

### 五、三里塚闘争と日本革命の綱領問題

日本の革命的左翼は未だ綱領を真剣に問題にしたことがない―観念的な革命論上の問題としての綱領論争はあつたとしても。このことは革命的左翼が労働者人民の利害を代表し実現する革命党を建設していないことの現われであると同時に、その原因でもある。綱領とは革命の対象（敵）が何であり、革命勢力（我）が何であり、同盟軍（味方）が何であり、革命の目的と性格が何であり、革命の方法がどうであるかを全労働者人民の前に明らかにすることである。綱領を持たない革命勢力は目的を持たない大海原をさ迷う小舟に等しい。われわれは必ず日本革命の綱領をかち取らなければならない。しかし綱領は決して観念の中で作られるのではなく、革命勢力が社会のあらゆる所で闘いを展開し、その経験をもとに、この社会の分析 階級支配の構造の分析を行つて始め

て獲得されるのである。従つて三里塚斗争は綱領をかちとる営為の重要な一部分になりうるし、またそうしなければならぬ。

そしてこのことは日本革命にとつてだけでなく、三里塚斗争にとつても極めて重要である。三里塚斗争の中から日本革命の綱領を闘いとることは、三里塚斗争がどういう闘いの一環であり、三里塚農民がその中でどういう役割を担っているのかを明らかにすることである。それは三里塚の農民が自分の土地と生活を守り発展させるには空港を作らせなければならず、帝国主義を打倒する闘いの一環にならなければならないことを明らかにすることである。それは三里塚空港を粉砕しつつ、あるいは開港を許してしまつたとしても三里塚の闘いを持続、発展することである。

三里塚斗争の中からかちとるべき綱領の内容については今詳述できない。しかしその際に重要だと思われる点だけを、ここでは述べておきたい。

① 三里塚の問題はあくまでも農業の問題であり、農民の問題である。三里塚との関りの始めの頃は「軍事空港」という観点からとらえられ、農業問題の観点は顧られなかつた。三里塚空港建設とは、農民から土地をとりあげ、農民を究極的には賃金労働者におとしこめることによつて、日本全域を資本のより能率的な利潤追求を可能にするように作りかえ、またそれに必要な賃金労働者を形成していこうとする新全国総合開発計画の最も顯著

で核心的な例である。そしてこのようなブルジョアジーの攻撃を粉砕する斗争は、何よりもまず土地を防衛し農業を防衛することである。ブルジョアジーは「総合農政」の名の下に、輸入農産物に頼り、大部分の小農民を離農させ、あるいは「農地持ち賃金労働者」と化し、一握りの大型農家だけを保護育成しようとしている。三里塚の闘いはこうした「新全総」「総合農政」等のブルジョアジーの農業切り捨て、兼業政策に対して、政府と独占資本に頼らずそれらと対抗して、自立した農業を維持発展させることを源としている。

② 小ブルとしての農民、しかも中農の闘いが、階級斗争の中で占めている位置がなぜこのように高いか解明しなければならぬ。三里塚の闘いは、全国あらゆる所をまき起つている反基地、反公害・地域住民斗争の先駆けであり、起爆剤であつた。この地域住民斗争の爆発が何によつて可能になり、何を意味しているのかを究明しなければならぬ。

この爆発の客観的基盤は、農業の場合は、①で述べたことであり、全体としては、資本主義がその勃興期に有していた歴史的進歩性を一切失ない、反動と腐朽を強め、勤労人民の生活と権利を破壊することなしに自らの余命をながらえることができなくなつたことである。従つて帝国主義を打倒せんとする革命党にとつて、こうした勤労人民の帝国主義と対決して生活と権利を守る闘いと結合してこれを指導することが決定的な意味をもつている。

革命的左翼は、三里塚の農民と結合できたのであるから、基地・公害・物価等と斗わんとする全勤労人民と結合できないわけがない。公害・物価等の全人民的課題を理論的に解明することは、綱領をかちとるにあつての重要な作業の一つであることは疑いない。

③ ①で三里塚斗争の根源は政府と独占資本に対決して自立した農業を発展させることだと指摘したが、その具体的な内容を明らかにする必要がある。反対同盟の中には出荷組合をつくる、独占資本の商品である化学肥料に頼らず新しい肥料を作る試み協同作業等新しい農業が追求されている。これらはまだ部分的な試みであるが、われわれはこの事の持つ意味を確認し、これらの試みをくわしく分析し、資本主義的な農業にかわる農業の姿―とりわけ協同経営―共同土地所有のあり方を追求しなければならぬ。

このことは、プロレタリア独樹立後、小ブルとしての農民を革命の隊列に組入れ、組織して行く上で非常に重要である。しかしそれよりも、当面する革命の農業綱領として、その下に全農民を結集するために必要である。

三里塚空港建設に反対する運動にとどまるならば、政策反対斗争あるいは小ブル的な反体制運動の枠を突破できない。革命勢力はそれだけでなく、必要となつた空港のあり方、農業のあり方を具体的に提起し、それを帝国主義が担いえないこと、プロレタリアートに基礎を置く労働者政権のみがそれを実現できることを全人民に明ら

かにしなければならぬ。今三里塚で根源的に問われているのはこのことである。

## 《反弾圧アピール》

### レーニン研究会反弾圧委員会

敵権力とその雇兵どもとの敵しい闘いを続けている全国の同志、友人の皆さん？  
自衛隊派兵阻止闘争を唯一現地実力闘争として、闘いぬいてきたレーニン研究会より、全国の同志、友人の諸兄に、現在われわれに加えられてきている権力とその手先達による組織壊滅をめざす攻撃の状況を明かにするとともに、その姑息な、しかし周到な攻撃をはね返し、全世界の被弾階級―被弾民族の解放という榮譽ある事業を担わんとする固い決意を明らかにしたい。

七十一年、日本階級闘争史上に輝しい一頁を記した、

三里塚―沖繩闘争の進撃に恐怖した日帝ブルジョアジーは、連合赤軍やテルアビブの諸同志の銃撃戦を恰好の材料に仕立てあげ、史上まれにみる（あのように、新聞・テレビ・週刊誌等、連日にわたる大々的な追跡報道があつたらうか。あのブルジョアジー佐藤政府の祭典、沖繩返還式典のお祭り騒ぎも、これに比べると色あせるといふものだ）反「過激派」キャンペーン、デッチあげの公開指名手配にデッチあげの家宅搜索、別件逮捕と、ありとあらゆる手段を駆使して反革命策動に狂奔した。しかし、この経験―われわれの闘いの前進が、われわれの最後の決戦の勝利までは、同時に敵権力による弾圧の強化とメダルの表裏の關係であるというこの事実こ

そ、更に深刻な戦い、より大衆的でより激しく、より計画的に、周到に用意された戦いをひきだす源泉なのだ。

わが会に対する弾圧は、昨年夏三里塚における「赤軍、安保共闘に次ぐ過激派」キャンペーン以来、それはとどまるところを知らない。とりわけ京浜地区における、日常的な尾行から、同志の職場での就業中を狙つての介入など、斗争を利用してのデッチあげ事後逮捕などと共に系統的な組織壊滅攻撃が強化されている。とりわけ右翼雑誌から商業新聞大衆週刊誌をあげてのキャンペーンは、単なるデマ、中傷の捏造にとどまらず、思想的・政治的立場・傾向を歪曲して流布するなど、そのやり口は極めて計画的であるといえる。しかし、われわれは、このような姑息なしかし周到な攻撃に対して、われわれの大衆路線を堅持し、より広汎なより高度な、より計画的な、そしてより大胆な戦術を駆使して、反撃を開始しつつある。

今、ここで五月六・七日、自衛隊派兵阻止北熊本現地闘争の弱冠の経過と弾圧の状況を明らかにし、この経験諸兄との共有の財産とし、われわれの共同した反撃のため供したい。

#### △闘争経過▽

I 六日、九大教養部で決起集会後、熊本へ。花畑公園から、健軍町の西部方面総監部への戦闘的デモ。  
七日、水前寺駅頭に降りた五十数名の部隊は、駆け足行進で一路西部方面総監部へと向つた。取りまく二十数名の私服はトランシーバーでの連絡を激しくやりとりする。そして部隊が水前寺公園手前の草むらにさしかかつた時、一斉に全員ヘルメットをつけ竹竿と火焔ビンで武装、市電大通りを一路沖繩派兵の司令部、西部方面総監部へ進撃、通りかかった放水車三台を炎上させ、中に閉じこもつた機動隊員を震え上がらせ、駆けつけた機動隊員と白兵戦を展開。この時十名の同志が逮捕される。  
II 五月十五日「返還式典粉碎、協定粉碎」闘争の日、上京した熊本県警の特捜班により、現場写真との照合で三名の同志が、デモの隊列の横で、駅頭で事後逮捕され翌日、全日空機で熊本へ護送。しかしながら、県警―警視庁の京浜反戦共闘絶滅作戦に基づく不当逮捕は、写真照合と称しながら、それが作為であったことがバレ、一名は三泊四日で離さざるを得なかつた。

#### △新聞の対応▽

われわれが熊本へつく前日の読売新聞に「過激派がやつてくる」と記事のをせ予防弾圧に手をかす。  
六日、西日本新聞「過激派など集結―京大C戦線も―」熊本日々新聞  
八日、各紙一斉にキャンペーン「赤軍残党武装す」―

読売、「放水車火だるま」「ゲリラ荒れる」―西日本新聞、「過激派あばれる」―朝日、のセンセーショナルな見出しで報道される。この内読売新聞は、反帝学評の学生が、検問でモデルガンと模擬銃弾をもっていたのでつかまつたのが明らかであるのに、いかにもわれわれの中にいたかのように「逃げる学生のうち十一人を公務執行妨害、凶器準備集合、放火、傷害の疑いで逮捕。うち一人のポケットから、ピストル弾一発を押収した。」と報道している。

五月五日、京都駅から熊本へ向おうとするわれわれに対し、京都駅で十数名の私服が待ちうける。そして一つへだてたプラットホームから、しきりに写真をとる。列車の中にも同乗し、大阪、三宮、岡山に着いたとき、プラットホームから写真をとる。

五月六日、九大での集会を終え、博多駅から熊本駅に向おうとしたわれわれに対し博多駅で長さ一、四メートルの竹竿に、一メートル以上との理由で公安官が文句をつける。ホームに上がっても三〇名の公安官、一〇数名の私服が取りまき、押収しようとするが、はねのけ乗車を貫徹する。

デモ。暴行による多数の負傷者。また個人テロ激しい。八日、大阪駅に降りたつ、私服が写真撮影。京都駅にも十名程写真。時おりデモの横につく。

それ以降十二日まで、京大C正門前に五、六人たむろ

### 編集後記

▽ ボルシェヴィズム通信第7号を発行します。3月の増刊号発行以来、多くの友人、読者の皆さんからの催促にもかかわらず、7号発行が遅れ諸兄の手もとに送り届けられなかったことを深くお詫びします。

▽ 7号の内容は、当初中国共産主義運動の特集とする予定でしたが、闘争等諸般の事由により、又の機会に譲ることになりました。又、表紙、版の大きさを一新することになりました。以後、この様式に統一し、読者諸兄をはじめその他の便宜に供したいと思えます。

▽ 我がレーニン研究会も結成以来はば一年をむかえるに至りました。その間、昨年9月の三里塚第2次強制代執行実力阻止闘争、11月沖繩返還協定批准実力阻止斗争、今年に入つて、2月同大決戦、京大入試強行紛糾、東大路解放区斗争を頂点とした、国私大大学費値上実力阻止斗争、更には、5月6、7日、唯一我々のみが斗い抜いた、自衛隊沖繩派兵実力阻止北熊本現地闘争と、着実に闘いの歩を進めてきました。それは、9月三里塚や10、11月全国にわたつてみられた何千何万という警察力の全面投入といった、事実上の戒厳状態、そして連合赤軍やテルアビブの銃撃戦における、権力ーマス・コミの狂気のキャンペーンといった、巨大な反革命の嵐をついての前進でした。わが会に対する、三里塚斗争、派兵阻止斗争を軸にした、フレイム・アップ、キャンペーンや、数多くの同志に対する不当逮捕、デッチあげ起訴、不当捜索、それに日々の尾行などは熾烈をきわめています。しかし、その弾圧をつき破つての我々の前進は、あたかも、広大な原生林に発した小さな火事が、おりからの嵐

し、時おり学内から出てくる男(私服らしい)と話しているのをCスト実のメンバーが確認。十日深夜本部正門前に私服らしき男二人たむろす。

十五日、七日以降都内で尾行を続けていたが、一名を宮下公園へ向う途中の駅で十数名の私服が待ちかまえて逮捕。二名をデモの横を歩いている時に逮捕。(尚、一名の同志は、他人の写真を以つて事後逮捕するという全くデータラメであり、三泊四日での奪還をかちとつた。)

取り調べは、朝十時から夜八時まで食事を除きずっと全員完黙。

五月七日西部方面体総監部の状況。「学生の乱入に備えて周囲五・四キロの金網の後に二、三重の鉄条網を張りめぐらし、正門入口は鉄サクで固め、銃を持つた隊員二十名が警戒にあたつた。(西日本新聞)

以上の事実を見てもわかるように、権力は闘争の前、闘争中、闘争後とわれわれを監視し、壊滅させようとチャンスをおらつてゐる。しかし、われわれの機敏な行動はそのスキをねらい大胆に展開された。権力には絶体自供しない。これは革命運動を担う組織の最低限の原則である。今、全ての同志は奪還され、それぞれの戦線に復帰して、闘いを再開している。

最後に、ボル通六号誌上での一一・一九闘争事後逮捕に対する緊急アピールに応え、多くの方々から支援の力ンパが寄せられたことをここに明らかにし、この場をかりてお礼を述べさせていただきます。

を ついて、むしろその嵐に力を得て、全てのものを焼き尽くしてしまふありさまに、たとえることもできません。よう。

▽ 3月以来の南ベトナム解放民族戦線と、北ベトナム軍による大攻勢は、チュノ僥倖政権を震撼させ、その軍事機構を大混乱に陥れし入れてきました。米帝国主義ニクソン政府による、比類のない残酷な北爆・南爆にもかかわらず、ベトナム人民の士気は衰えることなく、数カ月に及ぶ攻勢を堅持しています。しかし、このベトナム人民の全土解放をめざす攻勢のまえに、今ほど、我々帝国主義心臓部における闘いが要請されているときはないし、また、現在の重大な局面の前に我々の闘いのたち遅れを痛感させられているときもないでしょう。

▽ 8、25集会を皮切りに、このインドシナ革命戦争の前進に呼応する国際主義に質かれた闘いを推し進め、同時に、それを帝国主義心臓部における蜂起としてなすべき真の革命党建設をめざして、更に前進していく覚悟です。友人・読者諸兄の力強い支援を要請します。

▽ なお次号は、労働運動の特集とし、10月に発行したいと思えます。

▽ 又、連絡先を新たに設けましたので、利用してください。

ボルシェヴィズム通信 第7号

発行日 1972年8月20日

編集 レーニン研究会「ボルシェヴィズム通信」編集委員会

発行所 東京都世田谷区大原1丁目36-9 新思想社

TEL (03) 469-0724

京都市左京区東竹屋町 京大熊野寮 B棟307

TEL (075) 771-6291

定価 250円



伊  
東  
文  
庫  
蔵